

2023 年 2 月

食料安全保障月報

(第 20 号)



令和 5 年 2 月 28 日

農林水産省

食料安全保障月報について

1 意義

我が国は食料の大半を海外に依存していることから、主食や飼料原料となる主要穀物(コメ、小麦、とうもろこし)及び大豆を中心に、その安定供給に向けて、世界の需給や価格動向を把握し、情報提供する目的で作成しています。

2 対象者

本月報は、2021年6月まで発行していた海外食料需給レポートに食料安全保障の観点から注目している事項を適宜追加する形で、国民のみなさま、特に、原料の大半を海外に依存する食品加工業者及び飼料製造業者等の方々に対し、安定的に原料調達を行う上での判断材料を提供する観点で作成しています。

3 重点記載事項

我が国が主に輸入している国や代替供給が可能な国、それに加えて我が国と輸入が競合する国に関し、国際相場や需給に影響を与える情報（生育状況や国内需要、貿易動向、価格、関連政策等）について重点的に記載しています。

4 公表頻度

月1回、月末を目処に公表します。

2023 年 2 月食料安全保障月報（第 20 号）

目 次

概要編

I	2023 年 2 月の主な動き	1
II	2023 年 2 月の穀物等の国際価格の動向	4
III	2022/23 年度の穀物需給（予測）のポイント	4
IV	2022/23 年度の油糧種子需給（予測）のポイント	4
V	今月の注目情報「南米の穀物等の生産・輸出動向」	5

（資料）

1	穀物等の国際価格の動向	9
2	穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移	10
3	穀物等の期末在庫率の推移（穀物全体、品目別）	11
4	加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の状況	13
5	食品小売価格の動向	17
6	海外の畜産物の需給動向（ALIC 提供）	18
7	FAO 食料価格指数	20

品目別需給編

I 穀物

1	小麦	1
	＜米国＞ 2 月の米国産小麦輸出価格 (FOB) は主要輸出国の中で最高値	
	＜カナダ＞ 2022/23 年度の小麦の期末在庫量は史上最低の 3.5 百万トン	
	＜豪州＞ 収穫は 1 月末に終了、生産量は史上最高の 38.0 百万トン	
	＜EU27+英国＞ 飼料用とうもろこしの代替として輸入量は上方修正	
	＜中国＞ 2022/23 年度の小麦輸入は、豪州産が 57.9% を占める	
	＜ロシア＞ 生産量、輸出量とも前月から上方修正され史上最高	
	＜ウクライナ＞ 輸出量は前月予測から上方修正も、前年度比 28.3% 減少	
2	とうもろこし	9
	＜米国＞ 生産量は収穫面積・単収の減少により減産、輸出減の見通し	
	＜ブラジル＞ 生産量は史上最高、輸出量は世界第 1 位の見通し	
	＜アルゼンチン＞ 干ばつにより大幅減産見込み（輸出税継続）	
	＜中国＞ 生産量、消費量ともに史上最高、輸入量減少の見通し	
	＜ウクライナ＞ ロシアによる侵攻により、輸出量は前年度より 17% 減	
3	コメ	15
	＜米国＞ 生産量減少により長粒種の輸出価格が更に上昇	
	＜インド＞ ラビ米の作付けはほぼ終了	
	＜中国＞ 2022 年の輸入量が関税割当数量を初めて超過	

＜タイ＞ 2021/22 年度の輸出量は前年度から 22.1%増加
＜ベトナム＞ 2021/22 年度は他の作物への作付け転換等で収穫面積が減少

II 油糧種子

大豆・・ 2 1

＜米国＞ 生産量は減産、輸出も減少の見通し

＜ブラジル＞ 生産量、輸出量ともに史上最高の見通し

＜アルゼンチン＞ 干ばつにより大幅減産見込み（輸出税継続）

＜中国＞ 生産量、消費量は史上最高、輸入量も増加見通し

＜カナダ＞ 収穫面積は減少も、単収増加により増産

（参考 1）本レポートに使用されている各国の穀物年度について（2022/23 年度）・・・ 2 7

（参考 2）単位換算表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2 7

特別分析トピック

ウクライナ情勢まとめ

【利用上の注意】

表紙写真：ブラジル パラナ州の成熟期を迎えた大豆（2 月 5 日撮影）

天候に恵まれ生育状況は良好。2 月末には収穫予定

ブラジル大豆生産量は 1 億 5,000 万トンの豊作が見込まれている。

(概要編)

I 2023 年 2 月の主な動き

主要穀物等の需給・相場等について

主要穀物等の 2022/23 年度の作況については、北半球での収穫はほぼ終了し、南米では生育期から収穫期を迎えている。

品目別にみると、2月の米国農務省（USDA）の需給報告では、小麦については、豪州やロシアの豊作で世界の生産量は前年度を上回る見通し。ロシアのウクライナ侵攻に関連し、前年3月には過去最高を更新した国際相場も侵攻前の水準まで戻しているが、引き続き高水準で推移している。前年7月のウクライナの穀物輸出に関する4者合意は3月19日で二度目の期限を迎えるため、今後も注視が必要。

とうもろこしについては、米国や欧州、アルゼンチンの乾燥等の影響により、世界の生産量が前年度を下回る見通し。一方、大豆については、米国、アルゼンチンは減産も、ブラジルで増産となり、世界全体では増産となる見通し。いずれの品目も旺盛な消費により期末在庫は依然としてタイトな状況であり、引き続き注視する必要。

FAO（国連食糧農業機関）が公表している食料価格指数（最新値：1月）については、12月から下落（132.2→131.2）しているものの、引き続き高い水準を維持（参考：前年1月の値は135.6、前々年1月の値は113.5）。

海上運賃については、バルチック海運指数（穀物輸送等に使用される外航ばら積み船の運賃指数）が、直近5カ年の平均値の3割程の水準で推移。

早期注意段階の継続について

現状において、我が国の食料の安定供給に懸念は生じていないものの、上記の状況を踏まえ、2021年7月から適用を開始した、緊急事態食料安全保障指針に基づく「早期注意段階」については、2023年2月も引き続き適用。

【参考】早期注意段階について（農林水産省HP）

<https://www.maff.go.jp/j/zyukyu/anpo/soukichuui.html>



ウクライナの生産・輸出動向

ウクライナ農業政策食料省の2月17日報告によると、2022/23年度の小麦は収穫が終了し、収穫予定面積のほぼ100%に当たる2,020万トンが収穫された。収穫が遅れていたとうもろこしも収穫終盤となり、収穫予定面積の94%に当たる2,650万トンが収穫された。

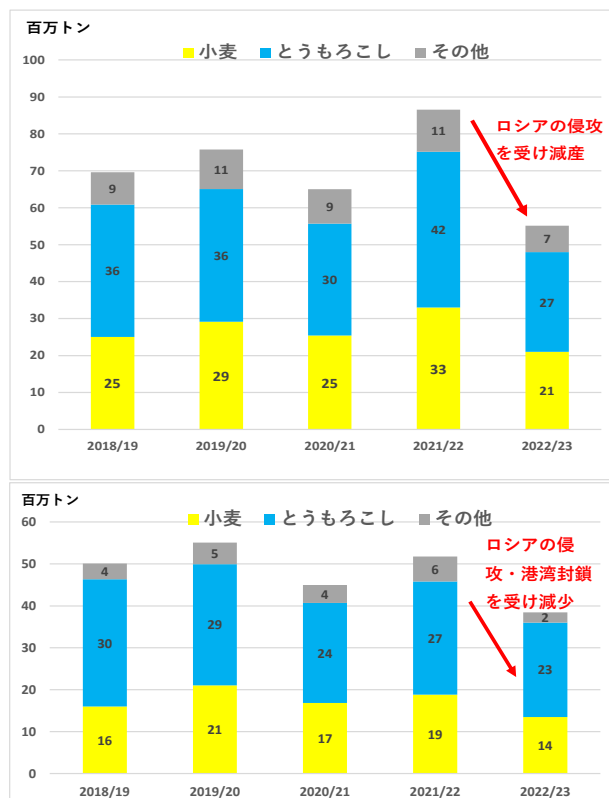
同省2月14日報告によると、2023/24年度の農作物の作付面積は、冬小麦の作付けがロシアの侵攻前であった2022/23年度と比較して、戦争の影響を受け減少し、前年より19%（700万ヘクタール）減の2,200万ヘクタールとなる見通し。2023/24年度の冬小麦の作付は、2022年11月28日報告によると計画面積の94%に当たる380万ヘクタールが終了（2022/23年度の冬小麦の作付面積は650万ヘクタール）。

米国農務省（USDA）の2月見通しによれば、2022/23年度の小麦の生産量は、前月見通しから変更なく2,100万トン（対前年度比36%減）、輸出量は前月から50万トン上方修正され1,350万トン（同28%減）の見通し。

一方、とうもろこしの生産量は、前月見通しから変更なく、収穫期の降雨過多やロシアの攻撃による収穫遅れにより2,700万トン（同36%減）、輸出量は、前月見通しから200万トン上方修正され2,250万トン（同24%減）の見通し（参考1）。

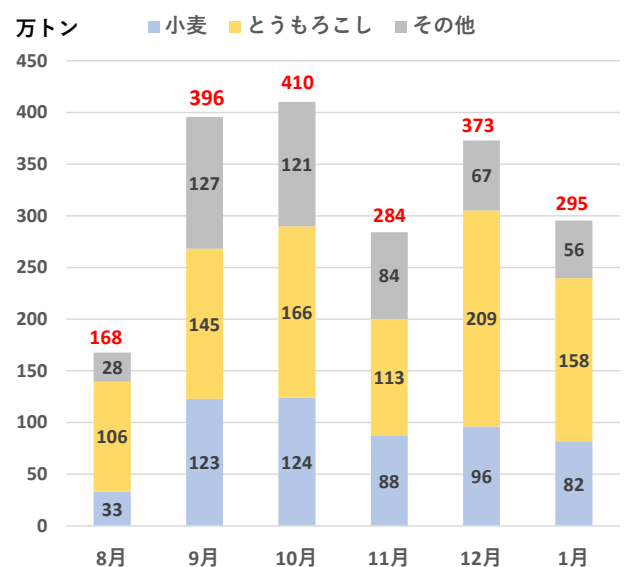
2022年7月22日の国連、ウクライナ、ロシア、トルコの4者によるウクライナ産穀物の黒海経由での輸出再開に関する合意（当初は前年11月19日まで）を受け、前年8月以降、オデーサ港等3港からの輸出が再開されたが、2023年3月19日で2度目の期限を迎える。2022年8月～23年1月累計の輸出量1,926万トン（うち、とうもろこし898万トン、小麦546万トン他）。目的地は中国、スペイン、トルコ、イタリア等（参考2）。

（参考1）小麦ととうもろこしの生産量（上）、輸出量（下）の推移（年度）



出典：米国農務省「PS&D」（2023.2） 注：その他は他の穀物（大麦等）

（参考2）黒海からの輸出量の推移（月毎）



出典：国連資料（（2023.1月末時点）

注：その他はひまわり油・大麦など

陸路による輸出を除く。

1 中国の2022年の大豆輸入量は前年より減少。2023年は大豆播種面積増加見通し

中国の海関統計によれば、2022年の穀物の輸入量については、とうもろこしは2,062万トン（対前年比27%減）と大きく減少したものの、小麦は987万トン（対前年比2%増）、コメは616万トン（対前年比60%増）と増加した。

とうもろこしの輸入減は、国内産が史上最高の豊作となったこと、輸入元の米国・ウクライナの輸出が減少したことが要因。小麦は、3年連続豊作の豪州産の輸入量が前年より倍増し、輸入量の半分強を占めた一方、米国産、カナダ産が減少した。

コメについては、特にロシアのウクライナ侵攻などで小麦やとうもろこしの穀物価格が高騰していた2022年4～9月に、代替需要として碎米の輸入量が増加したことが輸入増の要因。前年11月以降、インドの輸出規制や洪水によるパキスタンの輸出減により輸入量は2020年及び2021年同期を下回った。

大豆については上記作物と異なり多くを輸入に依存しているが、2022年産大豆が史上最高の豊作となったこと等を受け、輸入量は対前年比6%減の9,110万トン。

一方、2月13日に、中国共産党・国務院（内閣に相当）の中央一号文件が公表された。食糧生産6億5,000万トン以上の確保に加え、さらに5,000万トンの生産拡大のほか、大豆等の油糧種子の生産増大等が記載されている（※）。

※食糧安全保障法の制定に向けての取組についても言及されているが、詳細は記載されていない。

2 米国産穀物の輸出競争力低下

USDAの2月見通しによれば、米国産穀物については輸出価格が他の輸出国と比較して高く、輸出競争力に乏しいため、シェアが低下している。価格が高い背景としては、減産に加え、ミシシッピ川水位低下等に伴う国内輸送経費の高騰等によるものとみられる。このため、ロシア（小麦）、ブラジル（とうもろこし、大豆）の台頭を許すことになった。

品目別では、小麦は、豊作のロシアや豪州の価格競争力が強く、米国は5位（シェア10%）。

とうもろこしは、2012/13年度干ばつにより2位となった以降首位であったが、2022/23年度はブラジル（シェア28%）に抜かれ、米国はシェア27%の2位に転落。

大豆は、1位のブラジルのシェア55%に対し、米国は2位もシェア32%と大差。

コメは、インドやタイ、ベトナムなどアジア諸国の後塵を拝し7位（シェア4%）となっている。

3 ロシアは2月15日から6月末まで穀物輸出枠2,550万トン設定も輸出好調

USDAの2月見通しによれば、ロシアの2022/23年度の穀物生産見通しは史上最高の1億3,429万トン（前年度比17%増）。このうち、小麦は前月見通しから100万トン上方修正され、9,200万トン（同21%増）で史上最高となり、大麦も同様に50万トン上方修正され2,150万トン（同23%増、史上最高）、とうもろこしは1,400万トン（同8%減）の見通し。

また、USDAによれば、2022/23年度の穀物輸出量は5,254万トン（うち小麦4,530万トン）と前年度比29%増（小麦32%増）となる見通し。2月15日から6月30日まで穀物輸出枠2,550万トン（穀物の区分なし）が設定されたが、前年度同時期の輸出枠（小麦800万トン、とうもろこし、大麦、ライ麦計で300万トン）より大幅に増加していることや輸出税率が前年同期と比べ低いことが輸出増加の要因。

Ⅱ 2023 年 2 月の穀物等の国際価格の動向

小麦は、1 月末、280 ドル/トン前後で推移。2 月に入り、干ばつが継続していた米国の冬小麦産地での降雨予報等から、一時 270 ドル/トン台半ばに値を下げたものの、ロシアとウクライナの戦闘激化による黒海経由のウクライナ産穀物輸出の先行き懸念等から 290 ドル/トン台前半に値を上げた。その後、米国 FRB の利上げ懸念から値を下げ、2 月下旬現在、280 ドル/トン台前半で推移。

とうもろこしは、1 月末、260 ドル/トン台後半で推移。2 月に入り、米国産の低調な輸出状況や USDA の 2 月需給報告で米国の在庫がエタノール消費の減少により市場予想を上回った一方、アルゼンチンの高温・乾燥による減産懸念やブラジル大豆収穫遅れに伴う冬とうもろこしの作付け遅れ、ロシアとウクライナの戦闘激化による黒海経由のウクライナ産穀物輸出の先行き懸念等から値が小幅に上下し、2 月中旬現在、260 ドル/トン台半ばで推移。

コメは、1 月中旬、530 ドル/トン台後半で推移。2 月に入り、新穀の乾季米の市場への流通による供給増加見通しや、海外需要の軟化、パーツ安等により値を下げ、2 月中旬現在、490 ドル/トン台半ばで推移。

大豆は、1 月末、560 ドル/トン台半ばで推移。2 月に入り、ブラジルの豊作見通しや中国の輸入需要の減退懸念の一方、アルゼンチンの高温・乾燥による減産懸念や大豆粕価格の上昇、ブラジル主産地での降雨による収穫遅れ等から値が小幅に上下し、2 月中旬現在、560 ドル/トン台前半で推移。

(注) 小麦、とうもろこし、大豆はシカゴ相場（期近物）、米はタイ国家貿易委員会価格

Ⅲ 2022/23 年度の穀物需給（予測）のポイント

世界の穀物全体の生産量は、前月予測から 110 万トン下方修正され 27.3 億トン。消費量は、前月予測から 20 万トン上方修正され 27.6 億トン となり、生産量が消費量を下回る見込み。

期末在庫率は前年度を下回り 27.5% となる見込み（資料 2 参照）。

生産量は、前月予測から、小麦、コメで上方修正、とうもろこしで下方修正され、穀物全体で下方修正され、27.3 億トンの見込み。

消費量は、前月予測から、小麦、コメで上方修正、とうもろこしで下方修正され、穀物全体で上方修正され、27.6 億トンの見込み。

貿易量は、前月予測から、小麦、とうもろこしで上方修正も、コメで下方修正され、4.9 億トンの見込み。

期末在庫量は、7.6 億トンと前月予測から下方修正、期末在庫率は、前月予測から下方修正された。

(注：数値は 2 月の USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」による)

Ⅳ 2022/23 年度の油糧種子需給（予測）のポイント

油糧種子全体の生産量は前年度を上回り 6.4 億トン。消費量は前年度を上回り 6.3 億トン となり、生産量が消費量を上回る見込み。

期末在庫率は前年度を下回り、18.9% となる見込み。

(注：数値は 2 月の USDA 「Oilseeds : World Markets and Trade」による)

V 今月の注目情報：南米の穀物等の生産・輸出動向

南米では2022/23年度の生育期を迎えており、一部で収穫も開始された。ブラジル南部からアルゼンチンにかけて、ラニーニャ現象を受け高温乾燥の影響等を受けた。特に、アルゼンチンでは過去60年間で最悪の干ばつとも言われ、小麦、とうもろこし、大豆とも減産見通しである。一方、ブラジルにおいては、主産地の中西部が生育期の降雨に恵まれ、大豆、とうもろこしとも史上最高の生産見通しとなり、いずれの品目でも世界一の輸出国になる見通し。両国の輸出動向と、世界の穀物等需給への影響についてまとめた。

注：文中の「2022/23年度」等は穀物年度で、ブラジルのとうもろこしは2023年3月から2024年2月。国や作物によって異なる(品目別需給編P.27参照)。

1 アルゼンチンの生産・輸出動向

(1) 天候

気象庁によれば、過去3年間のラニーニャ現象の継続が収束しつつあるも、アルゼンチンでは降雨の少ない状況が継続している。特に、2022/23年度の夏季は干ばつ状況が甚大で、ロサリオ穀物取引所の1月11日のプレスでは過去60年間で最悪の干ばつとも言われている。また、降水量不足で穀物の主要輸送路であるパラナ川の水位が大きく低下した。

本干ばつの影響を受け、1月中旬に収穫が終了した小麦、降雨不足で作付けが2月までずれ込んだ大豆やとうもろこしの生産見通しが低下した。1月後半に入り降雨があったものの、早い時期に植えた大豆やとうもろこしへの干ばつの影響の緩和には遅過ぎたとみられる。

(2) 大豆

干ばつの影響を受け、生産量は前年度より大幅に減少し、ブエノスアイレス穀物取引所の2月16日見通しによると前年度比14%減の3,800万トンと減産見通し。

アルゼンチンでは、大豆油や大豆油かすに加工して輸出される。米国農務省(USDA)によれば、丸大豆の輸出量は420万トン(対前年度比47%)で、輸入量625万トン(対前年度比63%増)を下回る見通し。

(3) とうもろこし

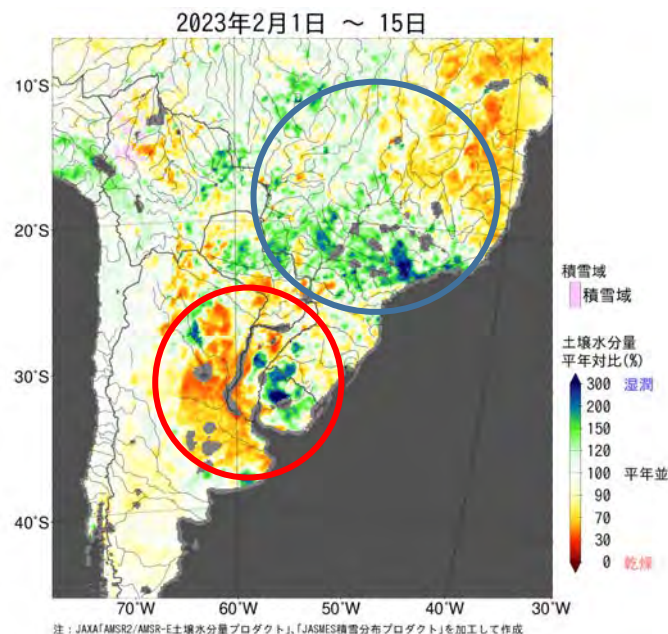
干ばつの影響を受け、生産量は前年度より大幅に減少し、ブエノスアイレス穀物取引所の2月16日見通しによると前年度比14%減の4,450万トンで、2017/18年度以来の低水準となる見通し。なお、USDAによれば、輸出量は現時点では3,500万トンと前年度(3,400万トン)を上回る見通しだが、今後の下方修正となる可能性もある。

表1 過去のエルニーニョ・ラニーニャ現象

エルニーニョ現象		ラニーニャ現象	
発生期間	季節数	発生期間	季節数
2002年夏～2002/03年冬	3	2005年秋～2006年春	3
		2007年春～2008年春	5
2009年夏～2010年春	4	2010年夏～2011年春	4
2014年夏～2016年春	8	2017年秋～2018年春	3
2018年秋～2019年春	3	2020年夏～2021年春	4
		2021年秋～	

出典：気象庁

図1 南米の2月前半の土壤水分量の平年対比(JASMAI)
ブラジル北部～中西部にかけ水分量が多く(青丸)
ブラジル南部～アルゼンチンにかけて少ない(赤丸)



(5) 小麦

ブエノスアイレス州など主産地において前年後半の生育期の降雨が少なく、生産量は前年度より大幅に減少し、ブエノスアイレス穀物取引所の1月見通しによると前年度比43%減の1,240万トンと2015/16年度以来の低水準。

USDAによれば、輸出量は750万トン（前年度1,598万トン）と半減の見通し。

(5) 輸出規制などの関連政策

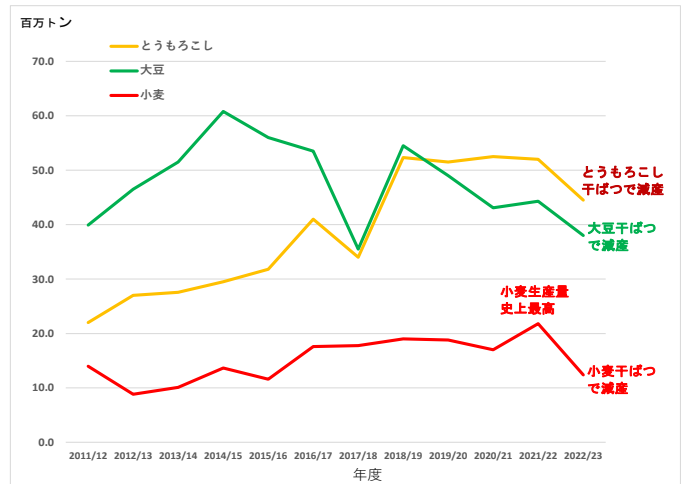
アルゼンチンは従来から国家財政の歳入不足を補うため、農産物輸出に対し輸出税を課している。特に大豆は最大33%と高い輸出税が賦課されている。大豆油・大豆油かすは31%、小麦・とうもろこしは12%となっており、コメや牛肉などにも広く輸出税が賦課されている。

また、とうもろこしや小麦については、国内供給を確保するために輸出上限数量が設定されており、2022/23年度のとうもろこしは2,000万トン、小麦は1,000万トン。

このほか、大豆は売り控え傾向にある農家による輸出を促すため、前年9月と12月に、特別な対ドル優遇為替レートが設定された。

今般の干ばつを受け、1月末以降、アルゼンチン政府や中央銀行は干ばつ被害を受けた農家への税制の優遇措置や融資の促進を決定した。今後、輸出規制について、干ばつを受けて強化されないか注視が必要である。

図2 アルゼンチンの小麦、とうもろこし、大豆生産の推移



出典：ブエノスアイレス穀物取引所（2023.2）

表2 アルゼンチンのとうもろこし・大豆・小麦の輸出規制

項目 作物	輸出税	輸出上限数量（年度別）	
		2021/22	2022/23
とうもろこし	12%	3600万トン	2000万トン
大豆	33%	-	
大豆油	31%		
大豆油かす	31%		
小麦	12%	1450万トン	1000万トン

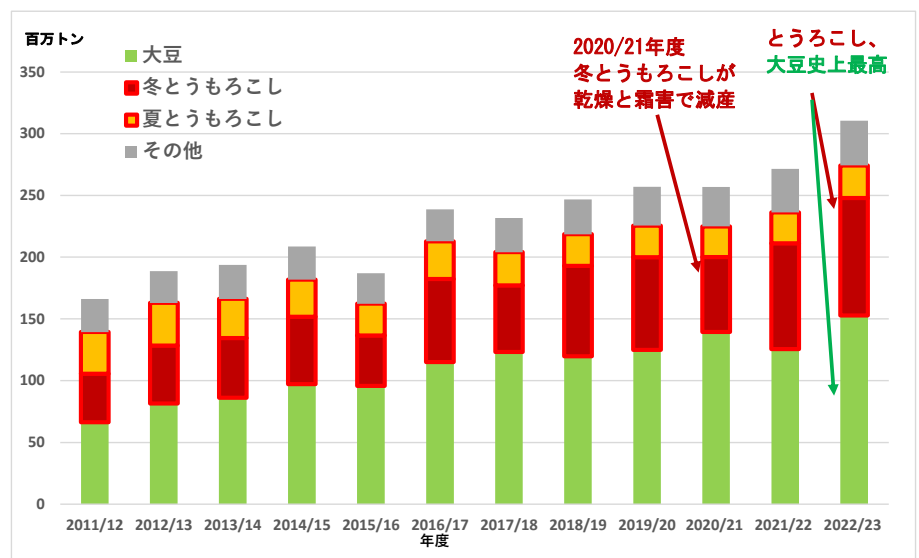
2023年2月時点

2 ブラジルの生産・輸出動向

(1) 天候

大豆の最大生産州のマト・グロッソ州を含む中西部から北部にかけて降雨に恵まれ、大豆を始めとする夏作物は順調に生育した。2月に入り収穫期を迎えたが、降雨過多により平年より収穫が遅れている。一方、アルゼンチンに隣接する南部地域、特にリオ・グランデ・ド・スール州では、乾燥天候で作柄に影響があったとみられる。

図3 ブラジルのとうもろこし、大豆生産の推移



出典：ブラジル食料供給公社（CONAB）（2023.2）

(2) 大豆

南部は降雨不足の影響を受けたが、主産地の中西部が降雨に恵まれ増産見込みのため、ブラジル食料供給公社（CONAB）の2月8日公表の穀物レポートによると1億5,290万トンと前年度比21.8%増で史上最高となる見通し。

(3) とうもろこし

大豆と同時期に作付けする夏とうもろこしと大豆収穫後の2月以降に作付けする冬とうもろこしがある。ここ数年、中国向け輸出の増加により大豆生産が大幅に増加していることから、大豆収穫後に作付けする冬作の生産割合が大きく増加し、夏作を大きく上回っている。CONABの2月レポートによれば、夏作2,650万トン、冬作9,720万トンの計1億2,370万トンで前年度比9.4%増の史上最高の見通し。現在、主産地の中西部で降雨過多による大豆の収穫遅れから、冬作の作付けも遅れており、冬作の生育期が遅れて、乾季までずれ込むことにならないか、一部で懸念されている。

(4) 小麦

ブラジルは、小麦は主産国でなく国内需要量が生産量を上回ることから、従来はアルゼンチンなどからの輸入に依存してきた。他方、2022/23年度においては、国内の自給向上の取組により作付面積が増加し、単収も向上したことから、CONABの2月レポートによれば、収穫は終了し、史上最高の1,060万トンとなり、コメの生産量（もみベース1,020万トン）を上回る見通し。USDAによれば、主食用は依然として輸入に依存しているとみられるが、アルゼンチンの不作もあり輸入量は減少する一方、飼料グレードの小麦については、サウジアラビアやベトナムなどへ輸出される見通し。

3 国際貿易の状況と南米の輸出動向

(1) とうもろこし

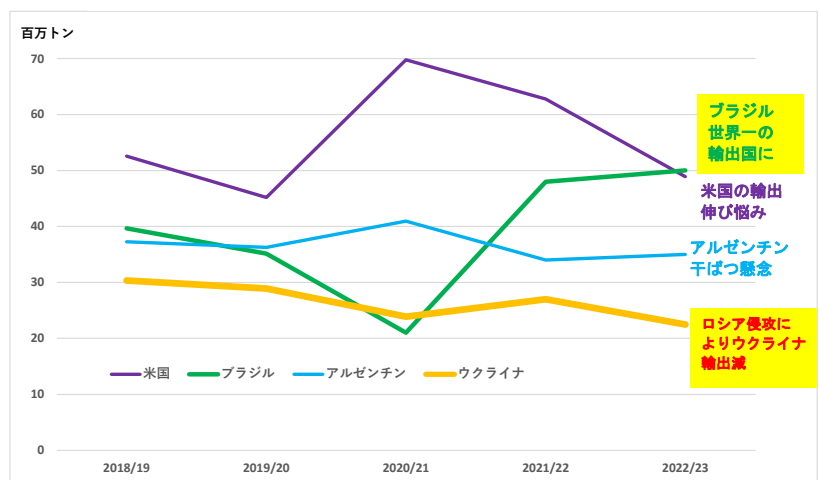
ブラジルでは、2021/22年度の冬とうもろこしが豊作、2022/23年度も豊作見通しを受け輸出量が増加し（5,000万トン）、韓国やベトナム、イラン向けも堅調なことに加え、中国向け輸出も前年末から開始されたこともあり、米国（4,900万トン）を抜いて従来からの大豆に加え、とうもろこしも世界一の輸出国になる見通し。

これに対し、アルゼンチンでは、干ばつにより更なる減産見通しとなれば、輸出量（3,500万トン）が減少する恐れがある。

その他輸出国では、ウクライナの輸出量がロシアの侵攻により減少、米国でも高温・乾燥による減産や国内輸送経費の高騰などで輸出価格が上昇し、輸出が伸び悩んでいる。

主要輸入国では、夏季の干ばつによりとうもろこしが大きく減産となったEUの2022/23年度の輸入量は2月見通しで200万トン上方修正され2,350万トンとなり、中国の輸入量（1,800万トン）を上回る見通し。EUは非GMOとうもろこしを生産しているウクラ

図4 主要とうもろこし輸出国の輸出量の推移

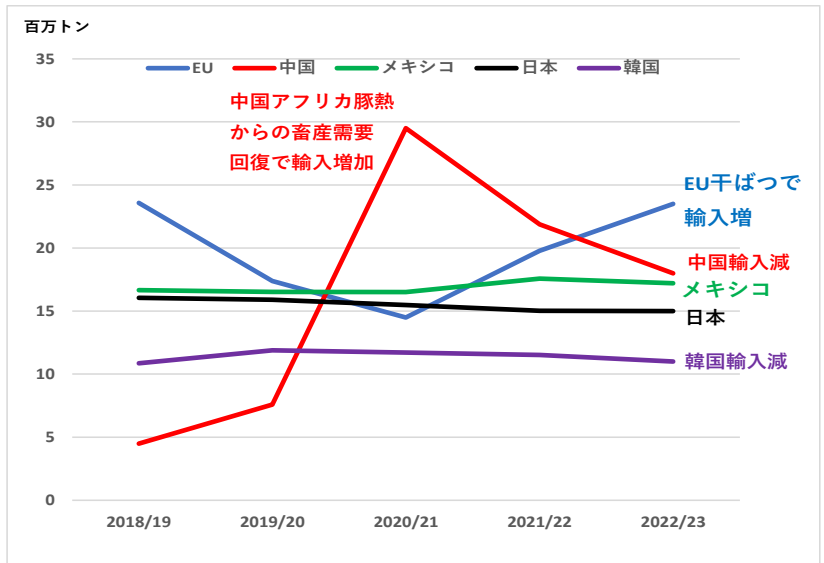


出典：米国農務省「PS&D」（2023.2）を農林水産省で加工

イナ産の輸入を黒海経由に加え、陸路輸送等により増加させた。

一方、中国は、海関統計によると、2021年はとうもろこしを2,836万トン輸入し、そのうち、米国産は1,983万トン、ウクライナ産は824万トンであった。一方、2022年は国内産が史上最高の豊作となったこと等から、輸入量は2,062万トンに減少（対前年比27%減）。うち米国産は1,486万トン、ロシアの侵攻の影響を受けたウクライナ産は526万トンとともに前年より減少となった。なお、前年11月からブラジル産の輸入を開始しており、2023年1月以降、海関統計に計上されるとみられるが、輸入先を多角化したいとの考えも背景にあるとみられる。

図5 主要とうもろこし輸入国の輸入量の推移（我が国は4位）



出典：米国農務省「PS&D」（2023.2）を農林水産省で加工

(2) 大豆

ブラジルでは主産地のマット・グロッソ州などで生育期の適度な降雨に恵まれ、生産量の見通しは1億5,000万トンを超えることもあり、2022/23年度の輸出量は前年度より大幅に増加し（9,200万トン）、低調な米国の輸出量の減少分を補ってさらに余りある見通しで、世界の輸出量合計も増加する見通し。

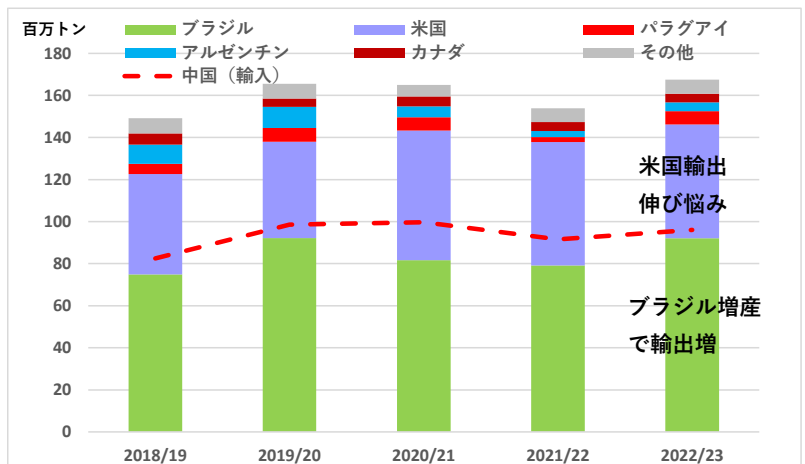
他方、アルゼンチンは、大豆かすや大豆油での輸出が中心で、数量は少ないが、とうもろこし同様、干ばつの影響により大豆の輸出が減少し、輸入増加となる恐れがある。

米国では、とうもろこし同様、減産に伴い、輸出が低調となる見通し（5,416万トン）。

世界最大の輸入国である中国の2022/23年度の大豆輸入量は、9,600万トンの見通し。他方、2022年の海関統計では、大豆輸入量は前年度比6%減の9,110万トンとなった。うち5,440万トンがブラジル産でシェアは6割。

中国は2月13日に公表された中央一号文件（例年、重要課題となっている農業を取り上げている）で、大豆の作付面積の拡大がうたわれている。また、2023年には、とうもろこしや大豆の遺伝子組換え作物の商業栽培を開始するのではとの報道もされている。2022年から人口が減少に転じ、景気減速も報道されている中、大豆を始めとする中国の今後の穀物需要や輸入、そして南米の輸出も含めた国際貿易にどのような影響を与えるか、引き続き注視する必要がある。

図6 主要大豆輸出国の輸出量の推移（参考：中国は輸入量）

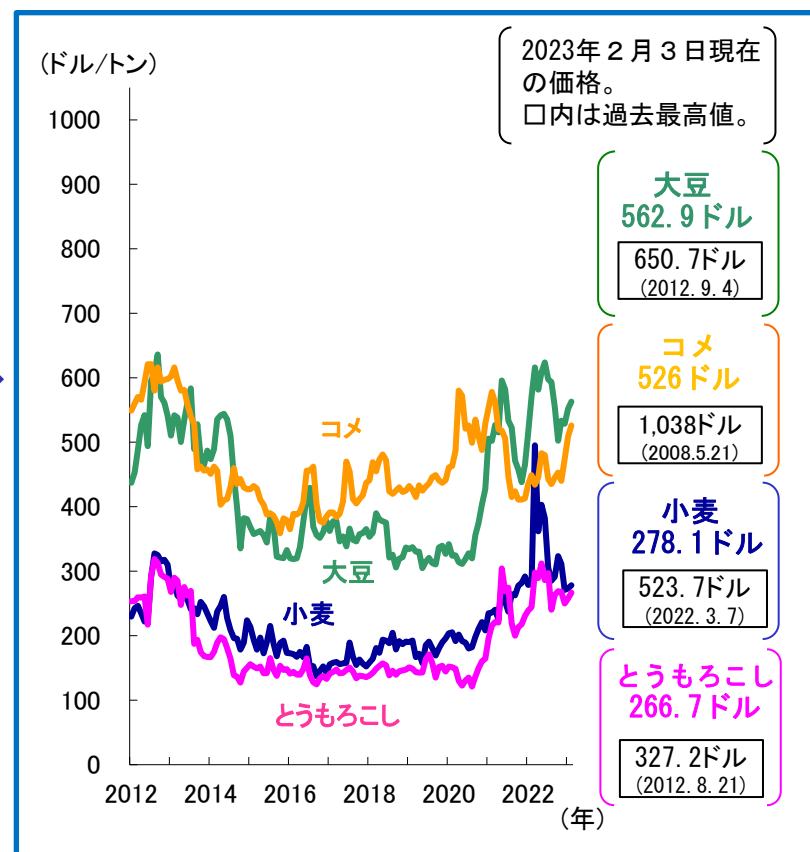
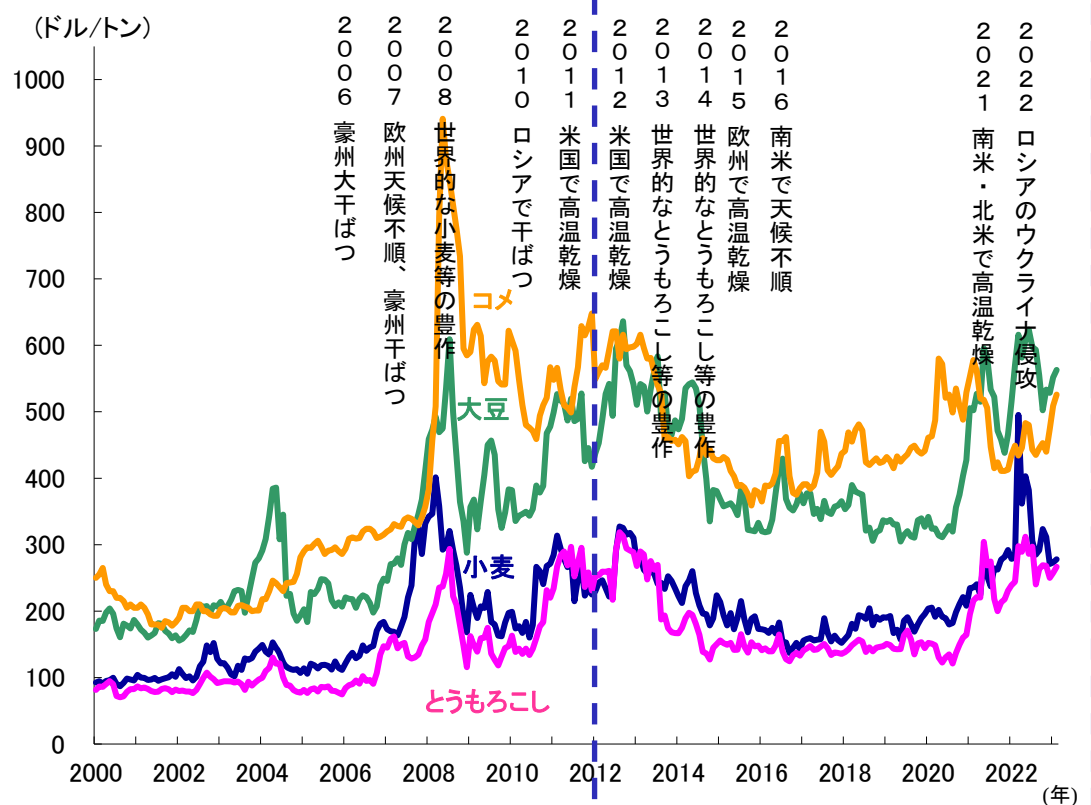


出典：米国農務省「PS&D」（2023.2）を農林水産省で加工

資料 1 穀物等の国際価格の動向（ドル/トン）

- とうもろこし、大豆が史上最高値を記録した2012年以降、世界的な豊作等から穀物等価格は低下。2017年以降ほぼ横ばいで推移も、2020年後半から南米の乾燥、中国の輸入需要の増加、2021年の北米の北部の高温乾燥等により上昇。2022年に入り、ウクライナ情勢が緊迫化する中、小麦は史上最高値を更新。コメは、2013年以降低下も2020年ベトナムの輸出枠設定や2021年初頭のコンテナ不足等で一時的に上昇。2021年2月半ばから海外需要低迷で低下。
- 穀物等価格は、新興国の畜産物消費の増加を背景とした堅調な需要やエネルギー向け需要に加え、ウクライナ情勢により、2008年以前を上回る水準で推移。

□ 穀物等の国際価格の動向



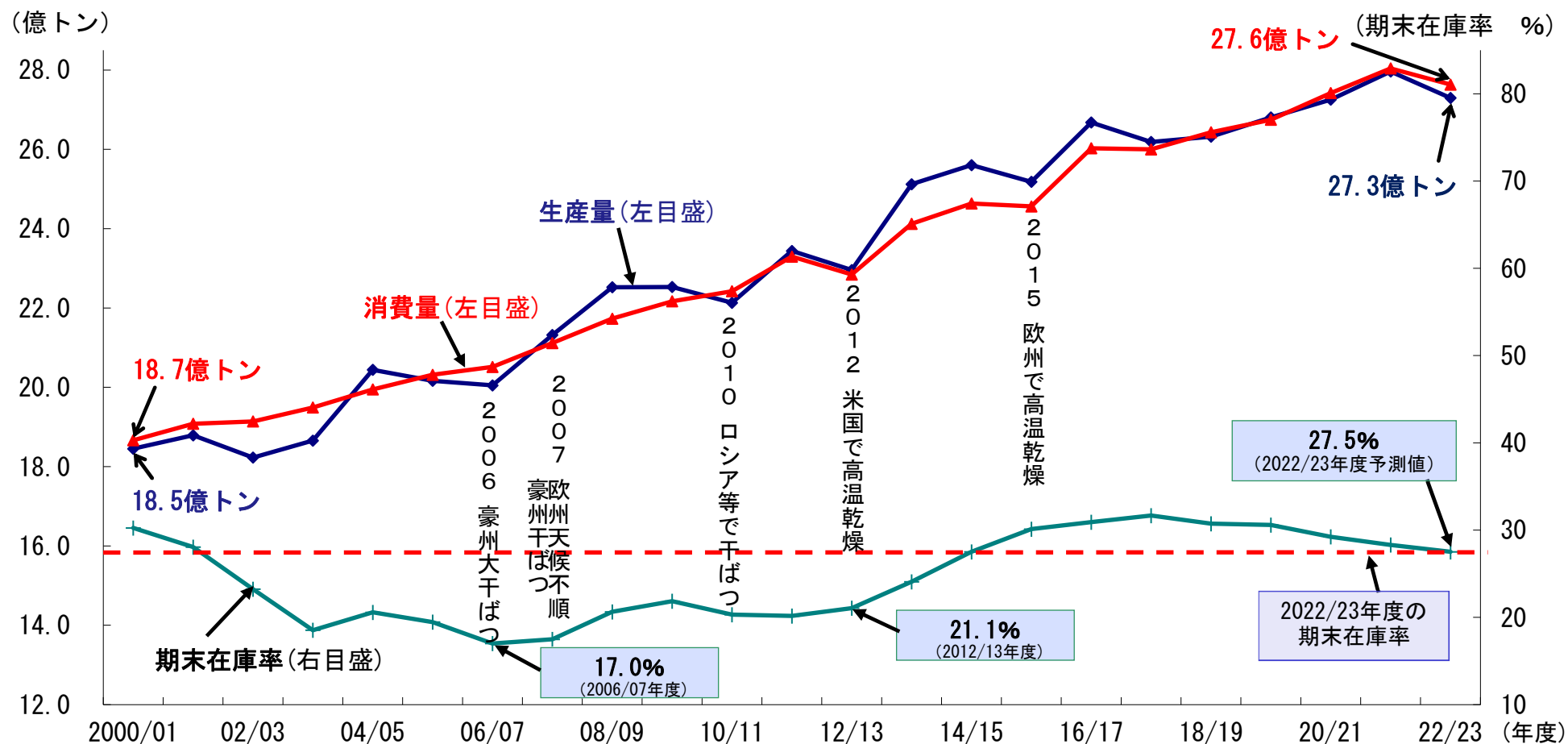
注1：小麦、とうもろこし、大豆は、シカゴ商品取引所の各月第1金曜日の期近終値の価格（セツルメント）である。コメは、タイ国家貿易取引委員会公表による各月第1水曜日のタイうるち精米100%2等のFOB価格である。

注2：過去最高価格については、コメはタイ国家貿易取引委員会の公表する価格の最高価格、コメ以外はシカゴ商品取引所の全ての取引日における期近終値の最高価格。

資料2 穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移

- 世界の穀物消費量は、途上国の人口増、所得水準の向上等に伴い増加傾向で推移。2022/23年度は、2000/01年度に比べ1.5倍の水準に増加。一方、生産量は、主に単収の伸びにより消費量の増加に対応している。
- 2022/23年度の期末在庫率は、生産量が消費量を下回り、前年度より低下し、27.5%。直近の価格高騰年の2012/13年度(21.1%)を上回る見込み。

□ 穀物(コメ、とうもろこし、小麦、大麦等)の需給の推移

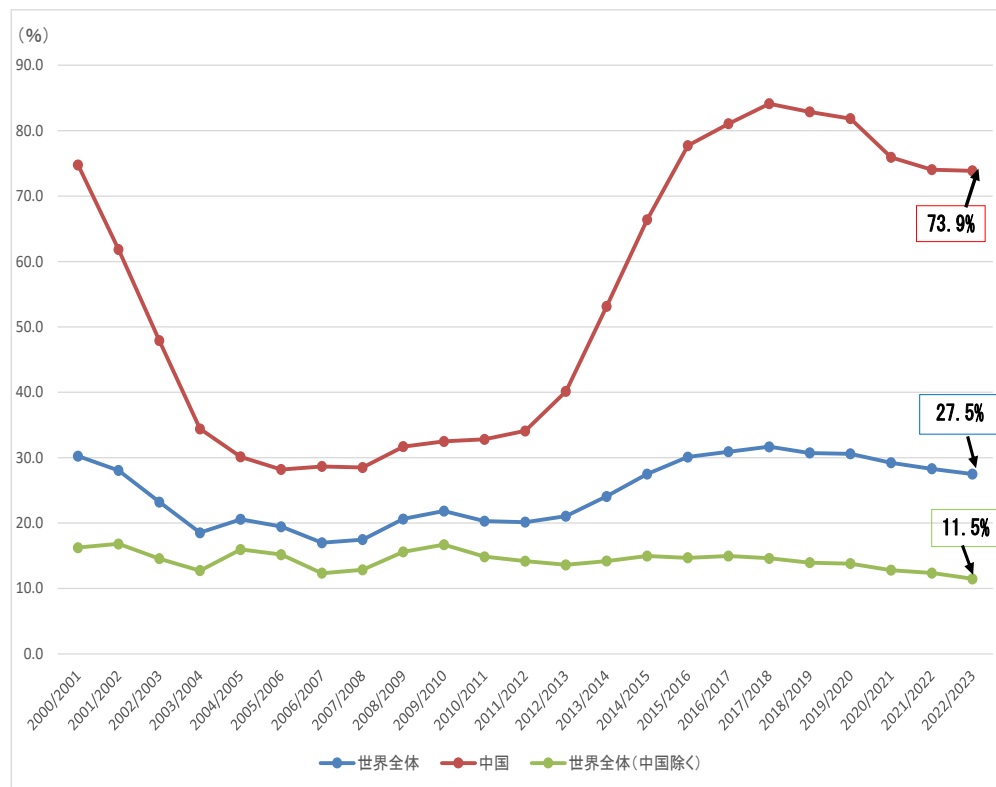


資料: USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(February 2023)、「PS&D」

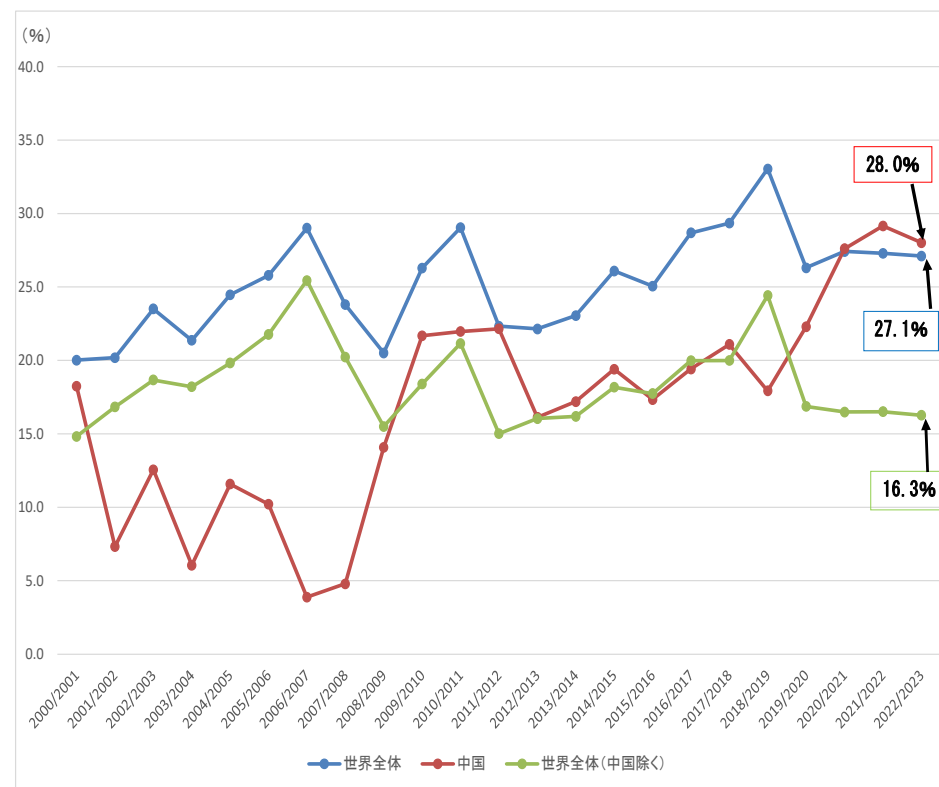
(注) なお、「PS&D」については、最新の公表データを使用している。

資料 3-1 穀物等の期末在庫率の推移（穀物全体、大豆）

○ 穀物全体の期末在庫率の推移



○ 大豆の期末在庫率の推移



資料: 米国農務省「PS&D」(February 8, 2023)

注: 1) 穀物はとうもろこし、小麦、コメ等(大豆除く)。

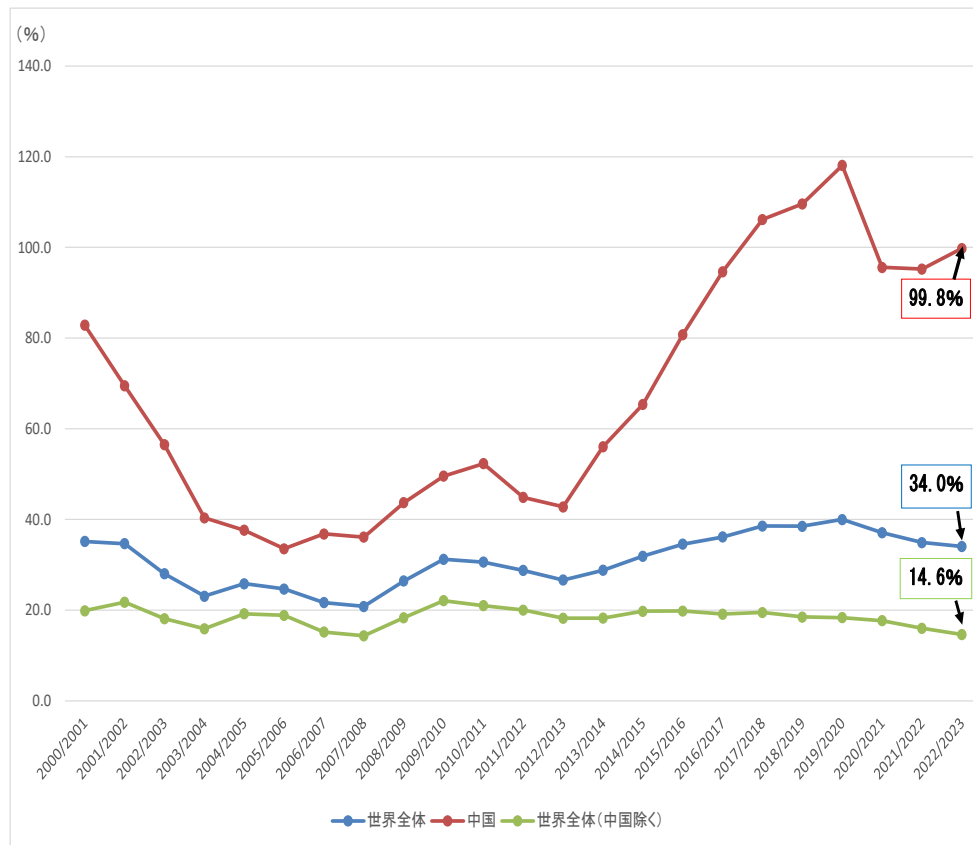
2) 世界の期末在庫率(%) = 期末在庫量 / (消費量 + 輸出量 - 輸入量) × 100 ※ただし大豆については、世界の期末在庫率(%) = 期末在庫量 / 消費量 × 100

3) 中国の期末在庫率(%) = 中国の期末在庫量 / (中国の消費量 + 中国の輸出量) × 100

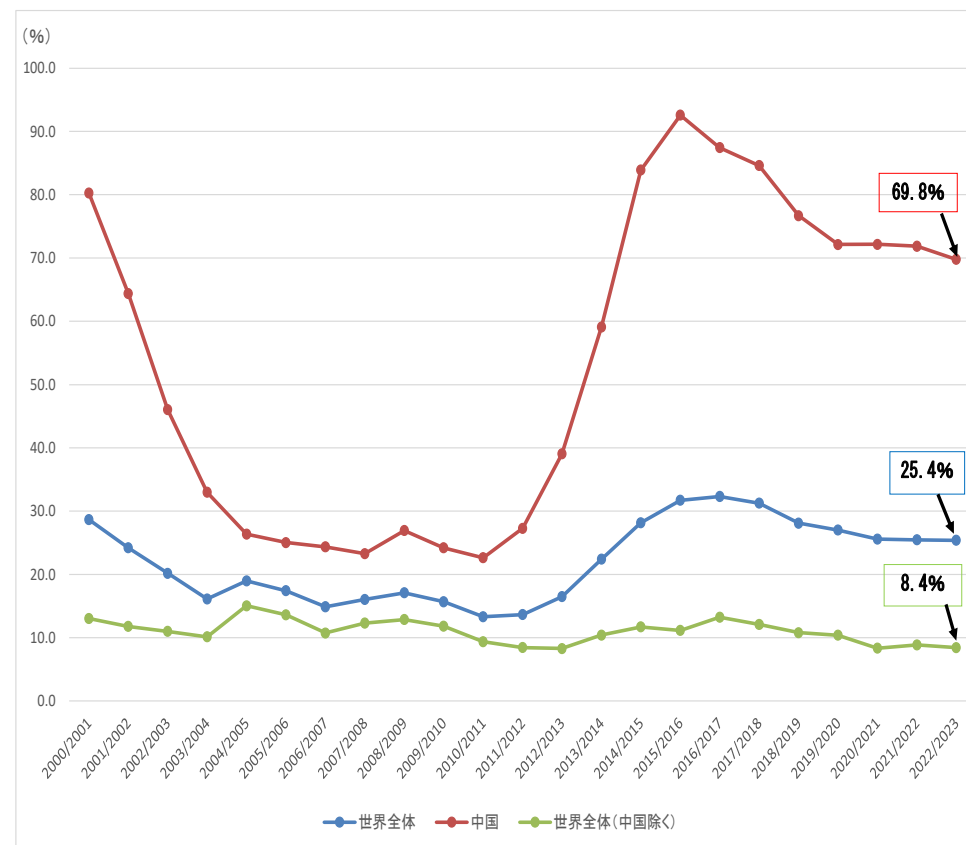
4) 中国除く期末在庫率(%) = 中国除く期末在庫量 / (中国除く消費量 + 中国除く輸出量) × 100

資料 3-2 穀物等の期末在庫率の推移（小麦、とうもろこし）

○ 小麦の期末在庫率の推移



○ とうもろこしの期末在庫率の推移



資料: 米国農務省「PS&D」(February 8, 2023)

注: 1)小麦は、小麦及び小麦粉(小麦換算)の計。

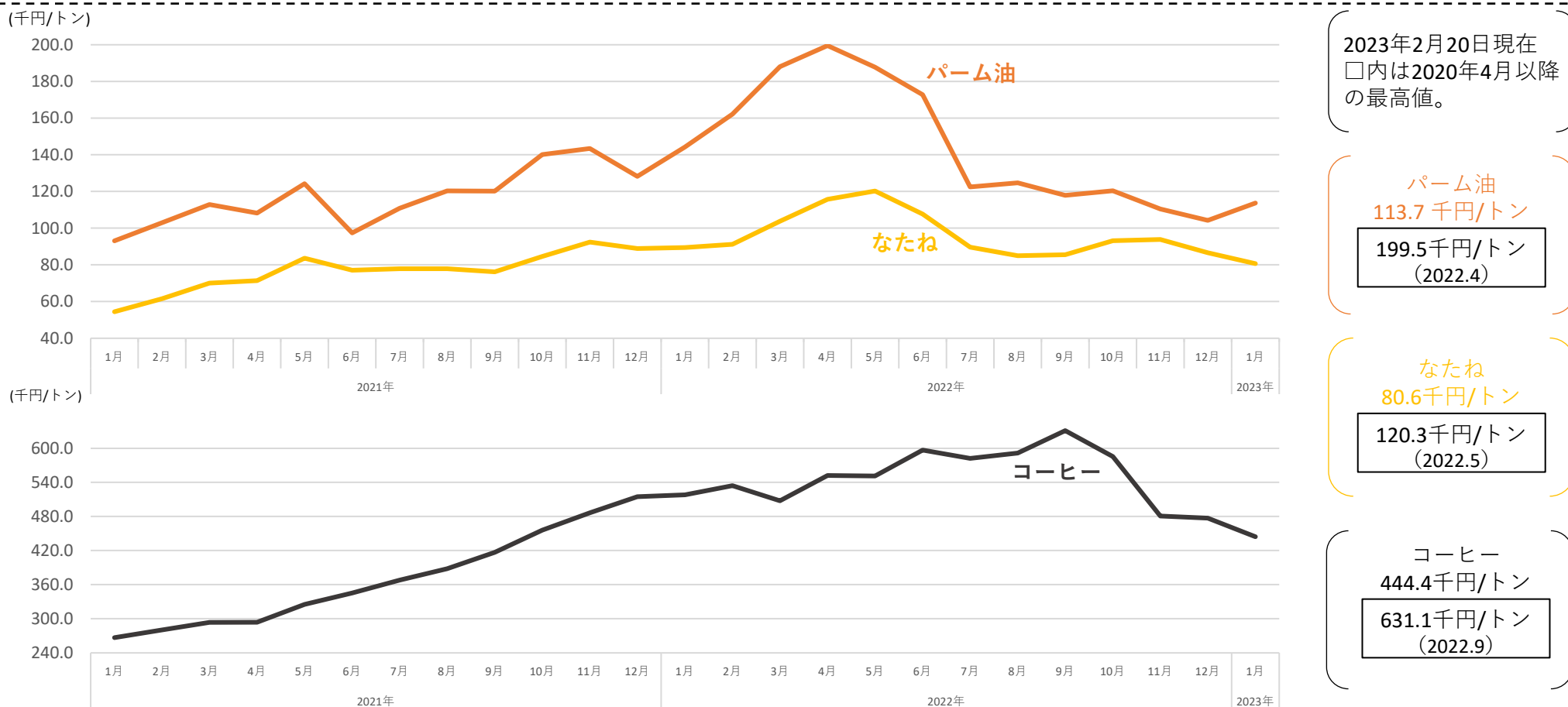
2)世界の期末在庫率(%)=期末在庫量/(消費量+輸出量-輸入量)×100

3)中国の期末在庫率(%)=中国の期末在庫量/(中国の消費量+中国の輸出量)×100

4)中国除く期末在庫率(%)=中国除く期末在庫量/(中国除く消費量+中国除く輸出量)×100

資料４－１ 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の動向

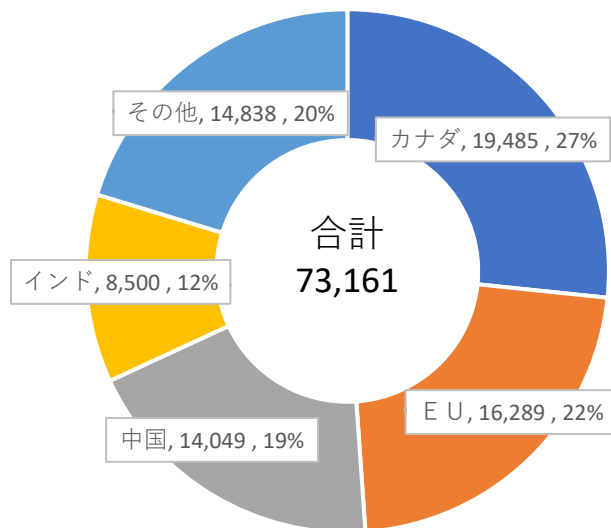
- なたね、パーム油について、需要の面では世界的な人口増加や中国等における所得水準の向上による食用油需要の拡大、エネルギー向け需要の増加などが市場価格上昇の要因であった。
- 供給面では、なたねについて、主産地であるカナダでは**2021年**に熱波による減産があったが、**2022年**は回復基調から平年並みの収量に近づいた。また、パーム油について、インドネシアの輸出禁止措置（**2022年5月23日解除**）があったが、マレーシアの生産量の増加によって供給不足の懸念が払拭された。いずれも前年の高値からは落ち着きが見られるものの、依然高止まりしている。
- コーヒーについて、世界最大の生産国であるブラジルの天候不順や世界的な物流の混乱等供給不足への懸念が強まったこと、需要面ではワクチン接種による経済活動の回復からコーヒー消費量が増加したことにより市場価格が上昇したが、消費地のインフレによる景況感の悪化やブラジルでの生産の回復によって市場価格は下降傾向にあるが、依然高値が続いている。



資料４－２ 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の生産量及び輸入先

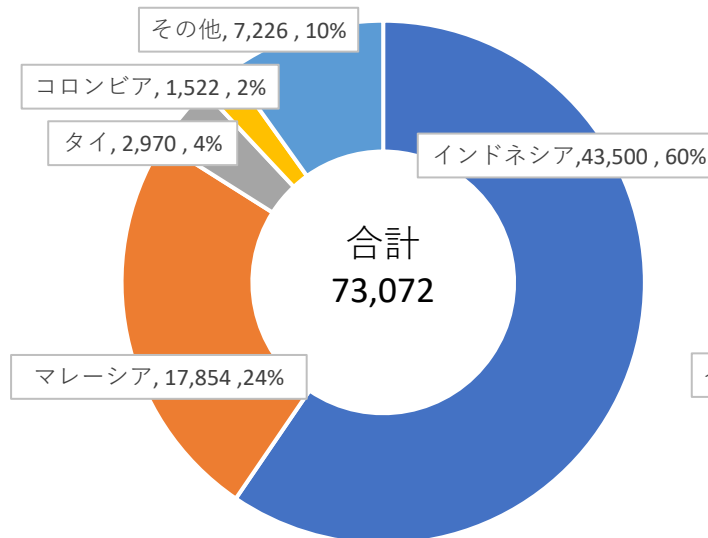
○主要生産国の生産状況

なたね生産量（2020/21）
（単位：千トン）



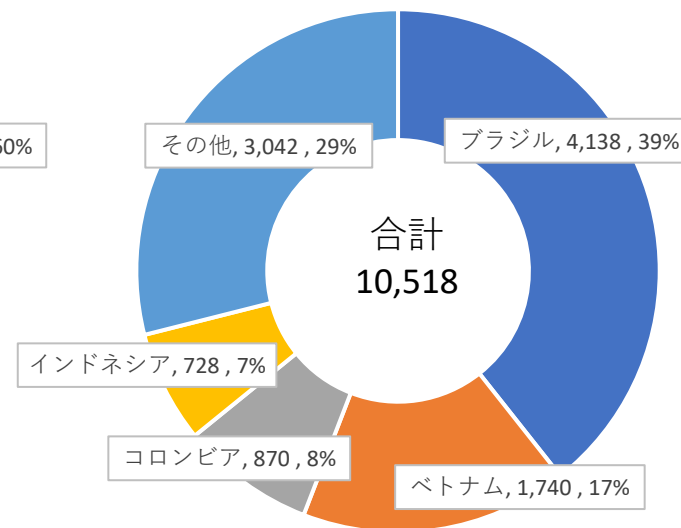
※米国農務省（Oilseeds: World Markets and Trade）

パーム油生産量（2020/21）
（単位：千トン）



※米国農務省（Oilseeds: World Markets and Trade）

コーヒー生産量（2020）
（単位：千トン）



※国際コーヒー機関（ICO）統計資料

○我が国の主な輸入先の状況（単位：千トン（2021年））

なたね	輸入量	割合
カナダ	2,124	90.7%
オーストラリア	218	9.3%
その他	0	0.0%
合計	2,342	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：1205）

パーム油	輸入量	割合
マレーシア	418	65.4%
インドネシア	220	34.5%
その他	0	0.0%
合計	638	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：1511）

コーヒー	輸入量	割合
ブラジル	146	36.4%
ベトナム	100	25.0%
コロンビア	48	11.9%
その他	108	26.7%
合計	402	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：0901.11～0901.12）

資料４－３ 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の推移①

①なたね

単位（千円/トン）

	2020年									2021年												2022年												2023年
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月
なたね	34.9	35.2	37.1	37.6	39.2	41.2	42.5	45.0	49.5	54.4	61.5	70.0	71.4	83.6	77.0	77.8	77.9	76.2	84.5	92.4	88.8	89.4	91.2	103.7	115.7	120.3	107.7	89.6	85.0	85.5	93.1	93.8	86.6	80.6
前月比	99.7	100.9	105.4	101.4	104.2	105.1	103.0	106.1	110.0	109.9	113.0	113.9	101.9	117.1	92.2	101.1	100.0	97.8	111.0	109.3	96.2	100.6	102.0	113.8	111.5	104.0	89.5	83.3	94.8	100.6	108.9	100.8	92.3	93.1
前年同月比	92.1	98.4	101.8	102.0	109.7	112.6	112.3	119.6	128.9	136.4	162.7	200.1	204.6	237.4	207.6	206.9	198.5	184.9	199.2	205.2	179.3	164.3	148.3	148.1	162.0	143.9	139.8	115.1	109.1	112.3	110.1	101.5	97.5	90.2

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ

注1 カナダウィニペグなたね定期相場の各月の月央値（期近物）から算出

②パーム油

単位（千円/トン）

	2020年									2021年												2022年												2023年
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月
パーム油	57.1	52.1	60.0	65.4	70.1	75.8	75.5	88.8	91.8	93.1	102.9	112.9	108.2	124.2	97.4	110.8	120.3	120.1	140.1	143.4	128.2	144.2	162.2	188.0	199.5	187.8	172.8	122.4	124.7	117.9	120.4	110.4	104.2	113.7
前月比	102.1	91.1	115.3	109.0	107.2	108.1	99.6	117.6	103.4	101.4	110.6	109.7	95.9	114.8	78.4	113.8	108.5	99.9	116.6	102.3	89.4	112.5	112.4	115.9	106.1	94.1	92.0	70.9	101.9	94.5	102.1	91.7	94.4	109.1
前年同月比	100.0	98.9	115.0	129.8	129.3	131.9	135.9	134.6	121.7	117.0	143.8	201.8	189.4	238.6	162.3	169.4	171.5	158.4	185.5	161.5	139.7	155.0	157.5	166.6	184.4	151.2	177.3	110.5	103.7	98.1	85.9	77.0	81.3	78.8

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ

注1 マレーシアパーム油定期相場の各月の月央値（期近物）から算出

資料 4－4 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の推移②

③ コーヒー

単位（千円/トン）

	2020年									2021年												2022年												2023年
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月
コーヒ一	257.1	247.9	235.5	241.8	267.7	270.0	244.0	251.9	260.9	266.8	280.2	293.5	293.7	325.2	345.1	367.9	388.1	416.7	455.9	486.3	514.7	517.9	534.1	507.5	552.1	551.2	596.8	582.3	591.6	631.1	585.4	480.6	477.0	444.4
前月比	99.5	96.4	95.0	102.7	110.7	100.9	90.4	103.3	103.6	102.3	105.0	104.7	100.1	110.7	106.1	106.6	105.5	107.4	109.4	106.7	105.8	100.6	103.1	95.0	108.8	99.8	108.3	97.6	101.6	106.7	92.8	82.1	99.2	93.2
前年同月比	111.0	111.4	99.1	98.0	119.0	116.0	105.3	97.4	92.9	104.6	115.4	113.6	114.2	131.2	146.6	152.2	145.0	154.3	186.9	193.0	197.3	194.1	190.6	172.9	188.0	169.5	172.9	158.3	152.4	151.4	128.4	98.8	92.7	85.8

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ

注1 国際コーヒー機関（ICO）の複合指標価格月次平均から算出

2 ICO複合指標価格は、米国、ドイツ、フランスの3大市場の現物の成約価格を収集しICOの定める方法で4品種ごとの加重平均値を算出したもの。

資料5 食品小売価格の動向

○ 令和5年1月の国内の加工食品の消費者物価指数は98.6～164.0(前年同月比で－1.2%～31.7%)の範囲内。

消費者物価指数（総務省） (令和4年8月～令和5年1月)

	H30	H31 (R元)	R2	R3	R4	R4						
品目	平均	平均	平均	平均	平均	8月	9月	10月	11月	12月	1月	上昇率 (前年 同月比)
食パン	100.2	101.1	100.0	99.2	110.3	114.4	113.8	113.7	114.2	114.1	115.0	11.5%
即席めん	95.3	98.5	100.0	100.1	107.6	114.9	112.4	112.3	114.2	111.6	113.1	12.6%
豆腐	98.8	99.1	100.0	101.3	105.3	105.1	106.7	108.3	109.1	109.9	110.3	7.8%
食用油 (キャノーラ油)	101.5	100.9	100.0	106.9	144.4	150.4	156.8	160.2	162.7	162.5	164.0	31.7%
みそ	97.4	99.1	100.0	99.3	101.3	100.1	103.4	103.6	104.9	104.4	104.5	6.3%
マヨネーズ	100.8	100.7	100.0	105.6	125.6	126.5	127.0	133.7	136.1	137.4	137.3	22.3%
チーズ	100.9	101.3	100.0	98.7	107.5	106.6	113.2	117.1	118.6	117.5	119.2	21.0%
バター	99.5	99.9	100.0	99.9	99.2	99.4	98.7	98.8	98.5	98.7	98.6	－1.2%
生鮮食品を 除く食料	97.9	99.0	100.0	100.2	104.1	104.2	105.0	106.7	107.9	108.3	108.7	7.4%

注1: 令和2年の平均値を100とした指数で表記。

【参考】

食品価格動向調査（農林水産省） (令和4年8月～令和5年2月)

	H30	H31 (R元)	R2	R3	R4	R4					R5			
品目	平均	平均	平均	平均	平均	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	上昇率 (前月比)	上昇率 (前年 同月比)
食パン	97.9	101.3	100.0	98.6	107.8	111.1	110.7	110.9	111.3	112.2	111.5	110.7	－0.7%	5.1%
即席めん	92.4	97.9	100.0	99.2	105.6	111.2	110.0	110.0	110.6	110.6	111.2	111.2	0.0%	13.0%
豆腐	100.1	100.9	100.0	100.6	103.7	103.7	104.2	107.2	107.2	107.6	108.5	108.1	－0.4%	6.9%
食用油 (キャノーラ油)	97.9	103.5	100.0	104.1	140.7	148.3	156.8	160.6	161.2	161.2	162.2	162.2	0.0%	32.0%
みそ	96.6	100.4	100.0	99.2	100.1	100.4	101.7	102.5	102.7	102.7	102.3	103.4	1.1%	5.4%
マヨネーズ	97.9	103.1	100.0	102.2	117.7	118.3	116.9	126.2	128.9	128.3	129.6	128.9	－0.5%	21.7%
チーズ	98.6	100.9	100.0	98.1	105.7	104.5	108.0	114.4	115.4	110.9	116.9	118.4	1.3%	20.1%
バター	99.0	99.5	100.0	99.8	99.1	99.3	98.6	98.6	98.6	98.6	98.6	98.6	0.0%	－1.1%

注1: 令和2年の平均値を100とした指数で表記。

注2: 調査は原則、各都道府県10店舗で実施。平成30年9月までは週1回、同年10月以降は月1回実施。

注3: 調査結果は調査期間中の平均値で算出。

注4: 令和2年4～5月、令和3年1～3月、同5～9月については、新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言の対象都道府県においては調査を中止。そのためそれぞれ前月の値とは接続しない。

資料 6-1 海外の畜産物の需給動向（ALIC提供）

- 独立行政法人農畜産業振興機構（ALIC）は毎月25日頃に海外の畜産物の需給動向を公表（月報 畜産の情報）
- 2022年3月号（2月24日に公表）の各品目の主な動きは以下の通り

『月報 畜産の情報』

◆牛肉

（米国）11月の牛肉輸出量は減速も、22年累計では前年増を維持

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002612.html

（EU）牛肉の外食需要の回復および供給量の低迷から価格は堅調

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002613.html

（豪州）牛群再構築の完了で、23年の牛肉生産量・輸出量は増加の見通し

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002614.html

（NZ）と畜頭数の増加を受け22/23年度の牛肉生産量、輸出量ともに前年度を上回る見通し

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002615.html

◆豚肉

（カナダ）と畜頭数の減少などから、22年の豚肉生産量はわずかに減少の見込み

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002616.html

（チリ）22年1～11月の豚肉輸出量、中国向けを中心に大幅な減少

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002617.html

資料 6-2 海外の畜産物の需給動向（ALIC提供）

◆牛乳・乳製品

（米国）22年11月の乳製品輸出量は好調に推移

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002618.html

（EU）生乳出荷量は増加、乳製品価格は下落

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002619.html

（NZ）生産者支払乳価、乳製品国際価格の下落基調を反映し後退の見込み

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002620.html

（中国）生乳生産量は増加するも乳製品需要は振るわず

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002621.html

◆飼料穀物

（世界）世界の期末在庫は前月に引き続き3億トンを下回る見込み

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002622.html

（世界）米国などの大豆生産量は下方修正も、世界の期末在庫は1億トン台を維持

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002623.html

（米国）米国の輸出量は前年度比22.1%減と大幅に減少する見込み

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002624.html

（中国）トウモロコシおよび大豆の価格動向

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002625.html

資料 7 FAO食料価格指数

(2014-16平均=100)



資料: FAO「Food Price Index」(2023.2)より作成

注: 穀物はとうもろこし、小麦、コメ等、植物油は大豆油、菜種油、ひまわり油、パーム油等

(品目別需給編)

1 小麦

(1) 国際的な小麦需給の概要（詳細は右表を参照）

<米国農務省（USDA）の見通し>

2022/23 年度

生産量 前年度比 前月比

- ・ウズベキスタン等で下方修正されたものの、豪州、ロシア等で上方修正され、前月から上方修正された。史上最高の見込み。

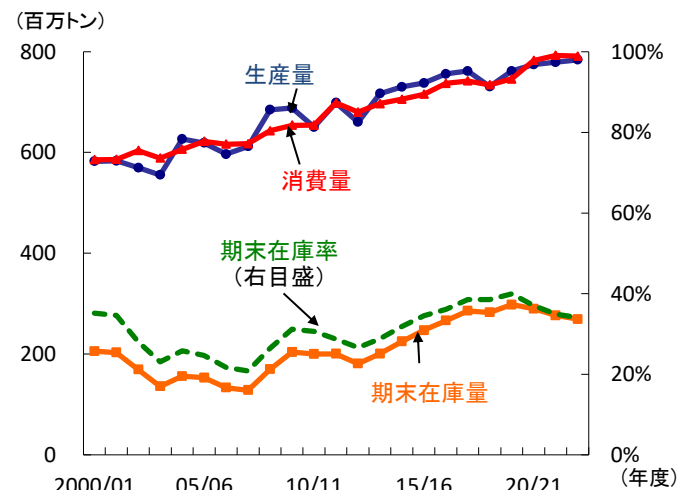
消費量 前年度比 前月比

- ・バングラデシュ等で下方修正されたものの、カナダ、EU 等で上方修正され、前月から上方修正された。

輸出量 前年度比 前月比

- ・カナダ等で下方修正されたものの、ロシア、EU、豪州、ウクライナ等で上方修正され、前月から上方修正された。史上最高の見込み。

期末在庫量 前年度比 前月比



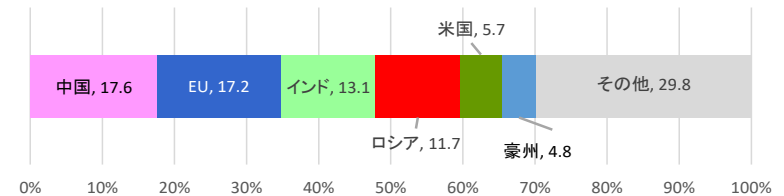
◎世界の小麦需給

(単位：百万トン)

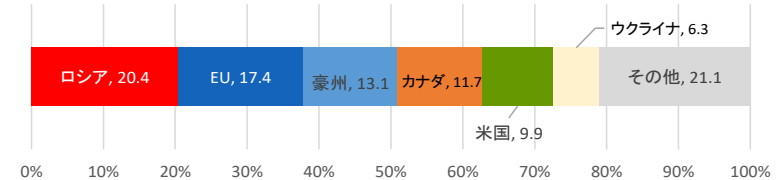
年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	774.6	779.3	783.8	2.5	0.6
消 費 量	782.7	792.7	791.2	1.4	▲ 0.2
うち飼料用	157.9	160.3	157.8	2.5	▲ 1.6
輸 出 量	203.3	202.9	213.0	1.3	5.0
輸 入 量	194.8	199.2	207.1	2.0	3.9
期末在庫量	290.1	276.7	269.3	1.0	▲ 2.7
期末在庫率	37.1%	34.9%	34.0%	0.1	▲ 0.9

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」 (8 February 2023)

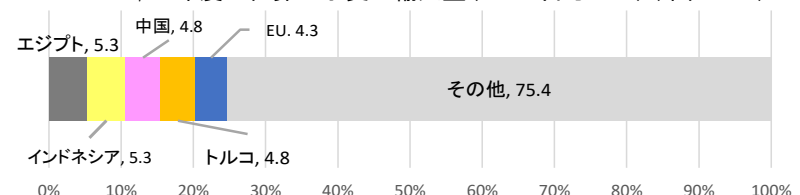
○ 2022/23年度の世界の小麦の生産量(783.8百万トン)(単位：%)



○ 2022/23年度の世界の小麦の輸出量(213.0百万トン)(単位：%)



○ 2022/23年度の世界の小麦の輸入量(207.1百万トン)(単位：%)



(2) 国別の小麦の需給動向

＜ 米国 ＞ 2月の米国産小麦輸出価格(FOB)は主要輸出国の中で最高値

【生育・生産状況】USDAによれば、2022/23年度の生産量は、前月予測からの変更はなく44.9百万トンと前年度に比べ0.2%増加したものの、2003/04年度以降では2021/22年度に次ぐ低水準の見込み。同「Crop Production」(2023.2.8)によれば、冬小麦、春小麦、デュラム小麦の生産量は、それぞれ、30.0百万トン(前年度比13.6%減、5年平均33.9百万トン)、13.1百万トン(同45.7%増、同13.7百万トン)、1.7百万トン(同69.9%増、同1.6百万トン)。

2023/24年度の冬小麦の播種面積は、同「Winter Wheat and Canola Seedings」(2023.1.12)等によれば、高水準の小麦相場を反映して、2015/16年度以降最高の14.95百万ヘクタールの見込み。

同「Wheat Outlook」(2023.2.10)によれば、冬小麦の生育状況は、2月7日現在で、米国東部のソフト・レッド・ウインター(SRW)生産地や北西部のホワイト小麦(SW)の生産地では干ばつが概ね終息しており、生育への影響はほぼないとみられる。一方、プレーンズ南部のハード・レッド・ウインター(HRW)の主要生産地を含む冬小麦生産地の58%(1月10日時点で59%)が干ばつ状況となっており、HRWの生育への影響が懸念されている。

1月29日現在、HRW主要産地の作柄評価(やや良い～良)は、オクラホマ州では、17%と1月1日時点の38%から大きく低下したものの、干ばつ被害のあった前年度同時期並みとなっている。カンザス州、ネブラスカ州の作柄評価は、21%、22%と同時点(19%、18%)に比べわずかに上回ったものの、前年度同時期の30%、36%を下回った。今後3～4月の天候が単収を決める重要な要因となる。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、21.1百万トンで1972/73年度以降最低の見込み。他の主要輸出国に比べ、輸出価格が高く競争力が弱いため、2022年6～12月の累計輸出量は12.7百万トンと前年度同時期を3%下回っている。2023年1月の輸出先国は、メキシコ(16.2%)、日本(14.0%)、フィリピン(11.3%)の順。

なお、輸出価格(FOB)は、HRW生産地の干ばつによる影響懸念から、1月9日時点の374ドル/トンから上昇し、2月6日時点で391ドル/トンと小麦の主要輸出6か国の中で一番高くなっている。

米国の期末在庫量は、15.5百万トンと2008/09年度以降最低であり、期末在庫率は29.9%と2014/15年度以降最も低い。

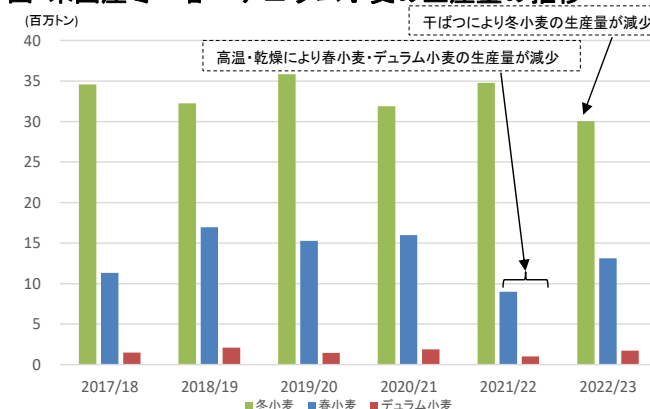
小麦一米国(冬小麦が全体の7割、春小麦は3割)

(単位:百万トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年6月～23年5月)		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	49.8	44.8	44.9	-	0.2
消費量	30.4	29.6	30.6	▲ 0.0	3.4
うち飼料用	2.5	1.6	2.2	-	36.3
輸 出 量	27.1	21.8	21.1	-	▲ 3.2
輸 入 量	2.7	2.6	3.3	-	26.3
期末在庫量	23.0	19.0	15.5	0.0	▲ 18.6
期末在庫率	40.0%	37.0%	29.9%	0.1	▲ 7.1
(参考)					
収穫面積(百万ha)	14.89	15.03	14.36	-	▲ 4.5
単収(t/ha)	3.34	2.98	3.13	-	5.0

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」
「World Agricultural Production」(8 February 2023)

図:米国産冬・春・デュラム小麦の生産量の推移



資料:USDA「Crop Production」(2023.2.8)

表:米国産小麦の輸出先国別輸出量

(輸出量:万トン、シェア:%)

2023年 (2023年1月)			2022年 (2022年1月6日～2023年1月5日)			2021年 (2021年1月7日～2022年1月6日)		
国 名	輸出量	シェア	国 名	輸出量	シェア	国 名	輸出量	シェア
メキシコ	29.0	16.2	メキシコ	376.3	19.0	メキシコ	378.0	16.5
日本	25.0	14.0	フィリピン	228.4	11.5	フィリピン	290.0	12.7
フィリピン	20.3	11.3	日本	212.2	10.7	日本	233.0	10.2
韓国	14.7	8.2	韓国	122.1	6.2	中国	227.4	9.9
中国	13.4	7.5	ナイジェリア	117.3	5.9	韓国	176.7	7.7
その他	76.8	42.9	その他	928.1	46.8	その他	984.6	43.0
計	179.2	100.0	計	1,984.4	100.0	計	2,289.7	100.0

※2023年1月は、2023年1月5日～2月2日の合計値

資料:USDA「Federal Grain Inspection Services Yearly Export Grain Totals」(2023.2.10)

＜ カナダ ＞ 2022/23 年度の小麦の期末在庫量は史上最低の 3.5 百万トン

【生育・生産状況】カナダ農務農産食品省(AAFC)「Outlook for Principal Field Crops」(2023.2.17)によれば、2022/23 年度の小麦全体の生産量は、前月予測からの変更はなく、33.8 百万トンの見込み。また、カナダ西部の干ばつにより生産量が減少した 2021/22 年度に比べると、収穫面積が増加し単収も上昇したことから、生産量は 50.9%増加(5 年平均比 10.4%増)する見込み。品種別には、普通小麦が 28.4 百万トン(前年度比 46.4%増)、デュラム小麦が 5.4 百万トン(79.5%増)となる見込み。

カナダ穀物委員会(Canadian Grain Commission: CGC)によれば、普通小麦及びデュラム小麦の大部分が 1、2 等に格付けされた。このため、飼料用グレードの小麦供給量が減少する見込み。

また、AAFC によれば、 平年並みの天候を前提とすれば、2023/24 年度の小麦全体の生産量は、2022/23 年度に比べ 1.5 %増の 34.3 百万トン。そのうち、普通小麦は播種面積が増加することから、同 1.5%増の 28.9 百万トン、デュラム小麦は他の作物の作付けにシフトすることから播種面積が減少するものの単収が上昇し、同 0.1%増の 5.4 百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】AAFC によれば、2022/23 年度の小麦全体の輸出量は、前月予測から 0.2 百万トン上方修正され、前年度に比べ 60.2%増加の 24.1 百万トン。そのうち、普通小麦は、1 月末までの輸出量が前年度同期の 70 %増になるなど、好調な輸出ペースが継続しているため、前月予測から 0.2 百万トン上方修正され、前年度に比べ 56.5%増加の 19.3 百万トンとなる見込み。デュラム小麦は、前月予測からの変更はないものの、イタリアや北アフリカの需要が強いため前年度に比べ 76.7%増加の 4.8 百万トンの見込み。カナダ産デュラム小麦の国内総供給量の約 8 割が輸出される見込み。

CGC によれば、2022 年 8 月から同年 12 月の輸出量は、普通小麦が 806.5 万トン、デュラム小麦が 192.0 万トンの計 998.5 万トン。輸出先国は、普通小麦が中国(21.6%)、インドネシア(9.6%)、バングラデシュ(8.4%)とアジア向けが多い。デュラム小麦は、イタリア(32.4%)、モロッコ(15.8%)の順。

また、2023/24 年度の輸出量は、2022/23 年度に比べ 0.4%減の 24.0 百万トンの見込みで、普通小麦が 2022/23 年度に比べ 1.6%増加の 19.6 百万トン、デュラム小麦は、欧州の生産量回復による輸入需要の減少が見込まれ、同 8.3%減少の 4.4 百万トンの見込み。

USDA によれば、2022/23 年度の期末在庫量は、前月予測からわずかに下方修正され、史上最低の 3.5 百万トンとなる見込み。ここ数年、カナダの期末在庫量は減少傾向となっている。

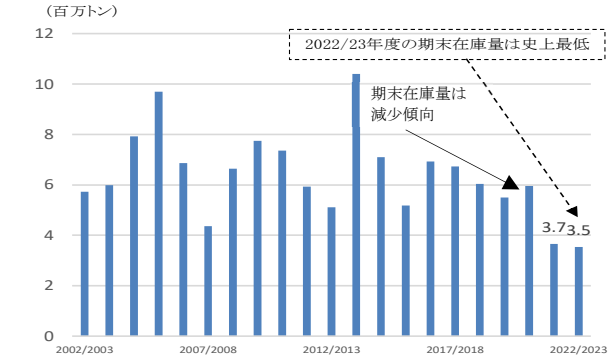
小麦－カナダ（春小麦を主に栽培）

(単位: 百万トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年8月～23年7月)		
			予測値、() はAAFC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	35.4	22.4	33.8 (33.8)	-	50.8
消 費 量	9.1	10.2	9.6 (9.0)	1.0	▲ 5.9
うち飼料用	4.2	5.2	4.5 (4.6)	1.0	▲ 12.6
輸 出 量	26.4	15.1	25.0 (24.1)	▲ 1.0	65.3
輸 入 量	0.6	0.6	0.6 (0.1)	-	9.1
期末在庫量	6.0	3.7	3.5 (4.5)	▲ 0.0	▲ 3.3
期末在庫率	16.7%	14.5%	10.2% (13.6%)	▲ 0.0	▲ 4.2
(参考)					
収穫面積(百万ha)	10.02	9.20	10.08 (10.08)	-	9.6
単収(t/ha)	3.54	2.44	3.35 (3.35)	-	37.3

資料: USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(8 February 2023)
AAFC 「Outlook For Principal Field Crops」(17 February 2023)

図 カナダ産小麦の期末在庫量の推移



資料:USDA「PS&D」(2023.2.8)をもとに農林水産省で作成

表 カナダ産普通小麦、デュラム小麦の輸出先国別輸出量
(普通小麦) (デュラム小麦)

2022年12月			2022年8月から12月			2022年12月			2022年8月から12月		
国名	輸出量 (万トン)	輸出量 シェア(%)	国名	輸出量 (万トン)	輸出量 シェア(%)	国名	輸出量 (万トン)	輸出量 シェア(%)	国名	輸出量 (万トン)	輸出量 シェア(%)
中国	37.1	23.8	中国	174.0	21.6	モロッコ	10.6	29.8	イタリア	62.3	32.4
インドネシア	28.6	18.3	インドネシア	77.5	9.6	イタリア	8.2	23.0	モロッコ	30.4	15.8
バングラデシュ	11.7	7.5	バングラデシュ	67.8	8.4	チュニジア	6.2	17.4	米国	22.8	11.9
日本	8.5	5.4	日本	64.3	8.0	米国	4.9	13.8	アルジェリア	17.1	8.9
コロンビア	6.9	4.4	ペルー	57.6	7.1	U.A.E	3.4	9.6	チュニジア	16.4	8.5
その他	63.2	40.5	その他	365.3	45.3	その他	2.3	6.5	その他	43.0	22.4
計	156.0	100.0	計	806.5	100.0	計	35.6	100.0	計	192.0	100.0

注1: Canadian Grain Commissionが認可したエレベーターから輸出された小麦(Licensed)のみのデータ。
注2: 普通小麦の品種はNO.1-3Canada Western Red Spring No.1Canada Western Red Winter
No.2Canada Eastern Red Spring No.2Canada Eastern Oat,デュラムはCanada Western Amber Durum Others
資料: Canadian Grain Commission「Export of Canadian Grain and Wheat Flour」(2023.1.23)をもとに作成。

< 豪州 > 収穫は1月末に終了、生産量は史上最高の38.0百万トン

【生育・生産状況】USDAによれば、2022/23年度の実産量は、単収の上昇により、前月予測から1.4百万トン上方修正され38.0百万トンと、これまでの史上最高である前年度の36.2百万トンを4.9%上回る見込み。

豪州の主要な穀物生産地域では、2022/23年度は4月から10月(播種期から登熟期)を通じて天候に恵まれるなど、2020/21年度から3年連続で生育条件は良好となった。このため、2022/23年度の実収が史上最高の2.92トン/ヘクタール(前年度比2.5%増、過去5年平均比40%増)となり、3年連続で史上最高の生産量を更新する見込み。特に、ウェスタンオーストラリア州(WA州)の実産量が増加。

GIWA(ウェスタンオーストラリア州穀物団体)(2023.2.17)によれば、WA州の実産量は前月予測から0.1百万トン上方修正され、前年度に比べ8.1%増加の史上最高の13.9百万トンとなる見込み。

一方で、ニューサウスウェールズ州(NSW州)、ビクトリア州(VIC州)では、収穫期の豪雨や洪水により生産量が影響を受けたとみられ、品質は低下した。なお、豪州の収穫は、豪雨によりおよそ2週間程度遅れたが、1月末には終了した。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の実輸出量は、豊富な輸出余力と世界からの堅調な需要から、前月予測から0.5百万トン上方修正され、史上最高の28.0百万トンの見込み。豪州は、ロシア(輸出シェア:20.4%)、EU(同17.4%)に次ぐ世界第3位の小麦輸出国(同13.1%)となる。

豪州統計局によれば、2022年年間輸出量は前年(2,550.9万トン)を12.8%上回る2,878.6万トン。輸出先国は、中国(21.5%)、インドネシア(15.1%)、フィリピン(11.4%)の順。豪州の輸出先は、地理的に近く他の主要輸出国に比べ輸送コストが安価となるアジア市場が多い。

また、2022/23年度は、以下の理由から豪州はアジア市場で食用、飼料用ともに小麦供給国としての主要な地位を占めるとみられる。①干ばつや霜害によるアルゼンチンからの食用小麦の輸出量の減少(前年度比53.1%減)、②ロシアの侵攻を受けたウクライナからの飼料用小麦の輸出量の減少、③インドの自国内向けの供給量の確保を目的とした輸出規制の実施、④豪州東部の降雨による大量の飼料用グレードの発生。他方、小麦生産が史上最高となったブラジルは、輸入国でありながら、飼料用グレードを中心に輸出量の半分以上をインドネシア、ベトナム等へ輸出するなど、アジア市場への存在感を増している(2022/23年度輸出量3.9百万トン、過去5年平均1.1百万トン)。

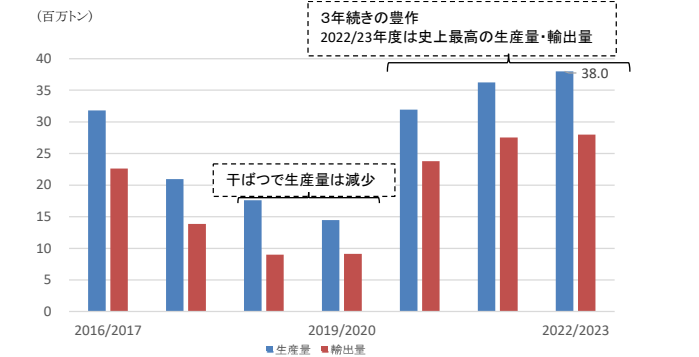
小麦一豪州 (冬小麦を主に栽培)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23(22年10月～23年9月)		
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	31.9	36.2	38.0 (34.7)	1.4	4.9
消 費 量	8.0	8.5	8.5 (8.6)	▲ 0.1	▲ 0.4
うち飼料用	4.5	5.0	5.0 (5.0)	-	-
輸 出 量	23.8	27.5	28.0 (25.7)	0.5	1.8
輸 入 量	0.2	0.2	0.2 (0.4)	-	▲ 4.8
期末在庫量	3.0	3.4	5.1 (4.0)	0.9	49.6
期末在庫率	9.5%	9.5%	14.1% (11.8%)	2.3	4.5

(参考)					
収穫面積(百万ha)	12.64	12.73	13.00 (13.1)	-	2.1
単収(t/ha)	2.52	2.85	2.92 (2.66)	0.10	2.5

資料:USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(8 February 2023)
IGC 「Grain Market Report」(12 January 2023)

図：豪州の実産量・輸出量の推移



資料:USDA「PS&D」(2023.2.8)をもとに農林水産省で作成

表 豪州の小麦輸出量及び輸出先国

2022年12月			2022年1月～2022年12月			2021年1月～2021年12月		
国 名	輸出量	シェア	国 名	輸出量	シェア	国 名	輸出量	シェア
中国	85.9	32.2	中国	619.8	21.5	インドネシア	493.6	19.4
インドネシア	38.1	14.3	インドネシア	433.3	15.1	ベトナム	301.6	11.8
韓国	29.9	11.2	フィリピン	328.3	11.4	中国	293.6	11.5
フィリピン	29.5	11.1	ベトナム	289.8	10.1	フィリピン	198.4	7.8
ベトナム	17.7	6.6	韓国	211.4	7.3	日本	118.9	4.7
日本	12.6	4.7	日本	125.6	4.4	マレーシア	114.5	4.5
その他	53.0	19.9	その他	870.4	30.2	その他	1030.2	40.4
計	266.7	100.0	計	2878.6	100.0	計	2550.89	100.0

資料:豪州統計局の資料をもとに農林水産省で作成

< EU27+英国 > 飼料用とうもろこしの代替として輸入量は上方修正

【生育・生産状況】欧州委員会(2022.1.26)によれば、EU27 の 2022/23 年度の生産量は、前月予測に比べ 0.2 百万トン下方修正され、前年度に比べ 2.6%減少の 134.5 百万トンの見込み。

そのうち、普通小麦の生産量は、スウェーデン、イタリアで下方修正されたことから、前月予測に比べ 0.1 百万トン下方修正され、127.4 百万トン。デュラム小麦は、イタリアで下方修正されたことから、前月予測から 0.1 百万トン下方修正され、7.1 百万トンの見込み。

また、USDA によれば、EU27 及び英国の生産量は、それぞれ前月予測からの変更はなく 134.7 百万トン、15.5 百万トンで、EU27 及び英国の生産量の合計は 150.2 百万トン。

2023/24 年度の EU の越冬期を迎えている冬小麦の越冬状況は、総じて順調である。なお、スペイン南部からイタリア北西部にかけては降雨不足の長期化が懸念されている。

【貿易情報・その他】USDA によれば、EU27 の小麦輸入量は近年減少傾向であったが、2022/ 23 年度の輸入量は、ウクライナからの輸入ペースが引き続き堅調なことから、前月予測から 1.0 百万トン上方修正され、前年度に比べ約 2 倍増加の 9.0 百万トンの見込み。輸入されたウクライナ産小麦はおおよそ飼料用グレードで、生産減となった EU 産とうもろこし飼料の代替として利用される見込み。そのため、飼料用小麦の消費量は前月予測から 0.5 百万トン上方修正され、45.0 百万トンの見込み。

また、EU27 の輸出量は、輸出が好調で前月予測から 0.5 百万トン上方修正され 37.0 百万トン。

欧州委員会によれば、EU は 2022 年 7 月に高温乾燥に見舞われたものの、2022/23 年度(2022 年 7 月から 2023 年 6 月)のうち、2022 年 7 月～11 月の輸出量は、普通小麦が 1,538.0 万トン(前年度同期 1,364.9 万トン、過去 5 年平均 1085.7 万トン)、デュラム小麦も 35.5 万トン(同 25.0 万トン、同 31.1 万トン)といずれも前年度同期及び過去 5 年平均を上回っている。その輸出先国は、普通小麦はアルジェリア(14.0%)、モロッコ(13.2%)、エジプト(10.3%)であり、北アフリカ諸国向けが多い。また、デュラム小麦はアラブ首長国連邦(17.7%)、タンザニア(13.7%)、チュニジア(12.4%)であり、中東、アフリカ向けが多い。

なお、ウクライナ産が大量に流入しているポーランド等では、穀物保管施設の空きが減少しているため、近隣諸国に保管されているウクライナ産穀物の搬出に EU の危機対応準備金を活用することが提案されている。

小麦－EU27+英国 (冬小麦を主に栽培)

(単位: 百万トン)

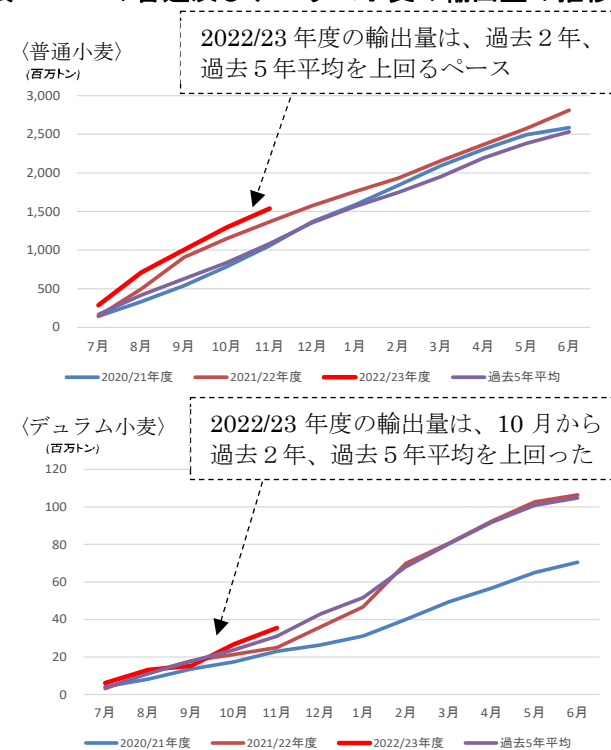
年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年7月～23年6月)		
			予測値、() は IGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	136.3	152.2	150.2 (149.3)	-	▲ 1.3
消 費 量	118.2	123.7	124.8 (123.6)	0.8	0.9
うち飼料用	48.5	52.4	52.8 (51.2)	0.5	0.8
輸 出 量	30.2	32.8	38.3 (35.6)	0.5	16.9
輸 入 量	8.6	7.2	10.8 (8.3)	1.0	49.2
期末在庫量	12.1	15.2	13.1 (15.7)	▲ 0.3	▲ 13.8
期末在庫率	8.2%	9.7%	8.0% (9.9%)	▲ 0.1	▲ 1.7

(参考)

収穫面積(百万ha)	24.36	26.05	26.10 (25.91)	-	0.2
単収(t/ha)	5.60	5.84	5.75 (5.76)	-	▲ 1.5

資料: USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(8 February 2023)
IGC 「Grain Market Report」(12 January 2023)
表内及び () 内のデータは EU27+英国+英国のデータ

表 EU27 の普通及びデュラム小麦の輸出量の推移



資料: EU 委員会 Cereals export and imports(2023.1.19)

＜ 中国 ＞ 2022/23 年度の小麦輸入は、豪州産が 57.9%を占める

【生育・生産状況】中国糧油情報センター「食用穀物市場需給状況月報」（2023.2.5）によれば、2022/23 年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、前年度に比べ 0.6%増加の 137.7 百万トンと史上最高となる見込み。作期別の生産量は、冬小麦が 132.7 百万トン(前年度比 0.8%増)、春小麦が 5.0 百万トン(同 4.2%減)の見込み。

同情報センターによれば、北部のほとんどの生産地で土壌水分が適量となり、2023/24 年度の冬小麦の越冬状況は順調であり、作柄も良好とみられる。

中央气象台「農業気象週報」（2023.2.6）によると、2月4日現在、北部の河北省、河南省、山東省等では越冬期、南部の四川省、雲南省等では節間伸長期に入っている。

【貿易情報・その他】中国糧油情報センターによれば、輸入量は前月予測からの変更はなく、前年度(95.6 百万トン)並みの 9.60 百万トンの見込み。中国海関統計によれば、2022 年の年間輸入量は、前年度(971.8 百万トン)に比べ 1.6%増加の 987.3 万トンとなり、輸入先国は、豪州、カナダ、フランスの上位 3 か国で 93.2%を占めた。豪州、米国、カナダ、フランスの上位 4 か国で 96.9%を占めた前年と比べると、2022 年は豪州が全体の 57.9%と大きく増加した一方、カナダは減少、米国は大きく減少した。中国は、カナダ、米国から高たんぱく質小麦を豪州から麵、饅頭用として低たんぱく質小麦をそれぞれ輸入しているとみられる。

農業農村部「農産品供需形勢分析月報 2022 年 12 月号」によれば、前年 12 月の中国国内需給は、新型コロナウイルス対策緩和による感染者の増加で外食需要が低迷し小麦の消費需要が減少、加工業者の仕入れ需要も低下した。今後、市場供給は増える見込みであり、コロナからの消費回復も見込られるものの、国内小麦価格は安定的に推移するとみられる。

USDA によれば、中国の期末在庫量は、前月予測から 0.5 百万トン上方修正され、144.6 百万トンとなり、世界の期末在庫量に占める中国の割合は 53.7%となる見込み。一方で、世界から中国を除いた期末在庫量は 124.8 百万トンで、2009/10 年度以降最低となる見込み。

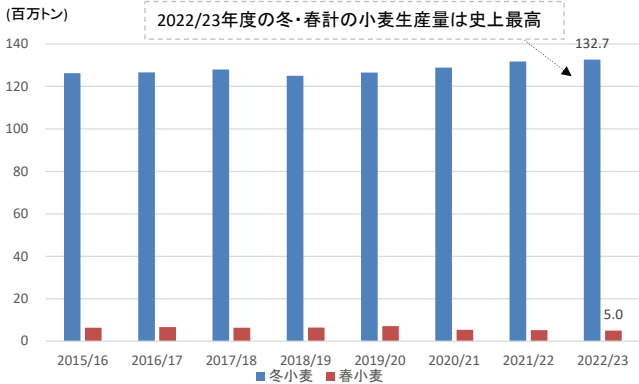
なお、2月13日には、中国共産党・国務院（内閣に相当）の中央一号文件が公表された。この中で、例年、重要課題である農業問題が取り上げられ、重要農産物の安定生産の取組が示される。小麦については、最低買入れ価格引上げ等の取組が記載されている。

小麦－中国（冬小麦を主に栽培）

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年7月～23年6月)		
			予測値、() は IGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	134.3	137.0	137.7 (138.0)	-	0.6
消費量	150.0	148.0	144.0 (139.6)	-	▲ 2.7
うち飼料用	40.0	35.0	30.0 (25.0)	-	▲ 14.3
輸 出 量	0.8	0.9	0.9 (1.1)	-	2.3
輸 入 量	10.6	9.6	10.0 (8.2)	0.5	4.5
期末在庫量	144.1	141.8	144.6 (138.5)	0.5	2.0
期末在庫率	95.6%	95.2%	99.8% (98.5%)	0.3	4.6
(参考)					
収穫面積(百万ha)	23.38	23.57	23.52 (23.6)	-	▲ 0.2
単収(t/ha)	5.74	5.81	5.86 (5.84)	-	0.9

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(8 February 2023)
IGC 「Grain Market Report」(12 January 2023)

図：中国の冬・春小麦の生産量の推移



表：中国の小麦輸入量と輸入先

2022年12月			2022年1月～2022年12月			2021年1月～2021年12月		
国 名	輸入量	シェア	国 名	輸入量	シェア	国 名	輸入量	シェア
豪州	55.1	51.6	豪州	572.0	57.9	豪州	273.4	28.1
カナダ	36.5	34.2	カナダ	179.0	18.1	米国	272.6	28.1
フランス	12.7	11.9	フランス	169.8	17.2	カナダ	254.0	26.1
米国	1.2	1.1	米国	62.6	6.3	フランス	141.6	14.6
カザフスタン	0.8	0.7	カザフスタン	3.1	0.3	カザフスタン	18.7	1.9
ロシア	0.6	0.5	ロシア	0.9	0.1	ロシア	6.6	0.7
-	-	-	-	-	-	ロシア	4.9	0.5
計	106.8	100.0	計	987.3	100.0	計	971.8	100.0

資料：中国海関統計(2023.1.20)をもとに農林水産省で作成資料

< ロシア > 生産量、輸出量とも前月から上方修正され史上最高

【生育・生産状況】USDAによれば、2022/23年度の実産量(クリミア地域分を含まず)は、前月予測から1.0百万トン上方修正され92.0百万トンと、前年度に比べ22.4%増加し、史上最高となる見込み。作期別生産量は、冬小麦が前月予測からの変更はなく68.0百万トン(前年度比30.3%増)。春小麦は、前月予測から1.0百万トン上方修正され史上最高の24.0百万トン(同4.5%増)の見込み。

ロシア農業省によれば、2023/24年度の冬小麦の播種面積は、前年度(29.40百万ヘクタール)に比べ1.4%減少の29.05百万ヘクタールの見込み。冬小麦は越冬期に入っているが、ロシアヨーロッパ南部の一部で地中温度がかなり低下したことから、その生産への影響が懸念されている。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の輸出量は、トルコとエジプトへの輸出が増加したことから、前月予測から0.5百万トン上方修正され、前年度に比べ31.8%増加の43.5百万トンの見込み。現地情報会社によれば、ウクライナ侵攻前後で旧来の中東、北アフリカ向けの輸出に大きな変化はなく、また、2023年1月の輸出量は2022年12月に比べ15.8%減少したものの、同月の過去3年平均(239.2万トン)を上回る374.2万トンと輸出量は高い水準。2022/23年度のうち2022年7月から2023年1月までの輸出先国は、トルコ(17.0%)、エジプト(16.5%)の順。前年度同時期と比べると、伝統的な輸出先国のうちイラン向けは減少(42.4%減)したが、当初減少していたトルコ向け(2.4%減)は2022年10月から輸出が増加。一方で、ロシア産は比較的安価なことから、フランスからの輸出が減少したアルジェリア(293.1%増)や、サウジアラビア(86.5%増)が新しい輸出先となっている。

ロシア農業省は、2023年2月15日に、2022/23年度後半の輸出関税割当制度を施行した。対象期間は2023年2月15日から同年6月30日までで、輸出枠数量は2,550万トン(前年は1,100万トン)。対象品目は小麦、ライ麦、大麦、とうもろこしで、数量枠内に作物別の内訳は設定されてない。本輸出枠の設定にも関わらず、ロシアは既に2023年1月までに27.6百万トンを輸出しているため、2022/23年度のUSDA輸出予測量(43.5百万トン)の達成は可能とみられる。また、小麦、大麦、とうもろこしには、現在もルール建ての可変輸出税が課されており、2月15日以降も数量枠内は引き続き当該可変輸出関税(枠外は「50%、最低100ユーロ/トン」の高率関税)が適用されるが、小麦については、1月は64ドル相当と2022/23年度当初の7月の103ドル相当よりも大幅に低い。この輸出税額の低下から、ロシアの小麦の価格競争力が高まり、ここ数ヶ月の輸出量は増加した。

小麦一口シア(主産地の欧州部で冬小麦、シベリアで春小麦を栽培)
(単位:百万トン)

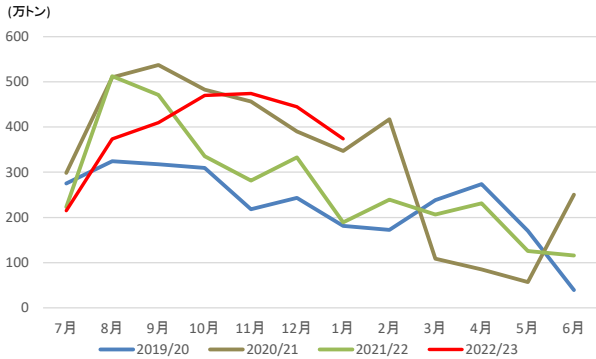
年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23(22年7月～23年6月)			
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	85.4	75.2	92.0 (95.4)	1.0	22.4	
消 費 量	42.5	42.8	45.5 (45.8)	0.5	6.4	
うち飼料用	19.0	19.5	21.5 (20.5)	0.5	10.3	
輸 出 量	39.1	33.0	43.5 (41.1)	0.5	31.8	
輸 入 量	0.4	0.3	0.3 (0.2)	-	-	
期末在庫量	11.4	11.1	14.4 (20.0)	-	29.8	
期末在庫率	13.9%	14.6%	16.2% (23.0%)	▲ 0.2	1.5	

(参考)

収穫面積(百万ha)	28.68	27.63	29.10 (28.7)	0.40	5.3
単収(t/ha)	2.98	2.72	3.16 (3.32)	▲ 0.01	16.2

資料: USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(8 February 2023)
IGC 「Grain Market Report」(12 January 2023)

図:ロシアの月別小麦輸出量の推移



資料: 現地情報会社のデータをもとに農林水産省で作成

表:ロシア産小麦の輸出量と輸出先国

2022/23年度 (2023年1月)			2022/23年度 (2022年7月～2023年1月)			2021/22年度 (2021年7月～2022年1月)		
国 名	輸出量	シェア	国 名	輸出量	シェア	国 名	輸出量	シェア
トルコ	66.1	17.7	トルコ	468.7	17.0	トルコ	480.2	20.5
エジプト	65.2	17.4	エジプト	456.5	16.5	イラン	370.4	15.8
パキスタン	33.1	8.8	カザフスタン	173.9	6.3	エジプト	365.2	15.6
サウジアラビア	27.0	7.2	サウジアラビア	170.8	6.2	カザフスタン	161.0	6.9
ケニア	22.0	5.9	イラン	157.2	5.7	サウジアラビア	91.6	3.9
アルジェリア	19.3	5.2	アルジェリア	142.7	5.2	ナイジェリア	69.1	2.9
スーダン	13.5	3.6	パキスタン	111.4	4.0	スーダン	46.0	2.0
その他	128.0	34.2	その他	1,079.8	39.1	その他	761.7	32.5
計	374.2	100.0	計	2,761.0	100.0	計	2,345.2	100.0

資料: 現地情報会社のデータをもとに農林水産省で作成

＜ウクライナ＞ 輸出量は前月予測から上方修正も、前年度比 28.3%減少

【生育・生産状況】USDAによれば、2022/23年度の生産量(クリミア地域分を含む)は、前月予測からの変更はなく、21.0百万トンの見込み。前年度に比べ、ロシアの侵攻により収穫面積が27.8%、単収が11.7%減少した。このため、生産量は史上最高だった前年度(33.0百万トン)から36.4%減少、過去5年平均(27.9百万トン)に比べ24.8%減少する見込み。また、ウクライナ農業政策食料省(2023.2.16)によれば、2022/23年度の収穫量は20.2百万トン(同32.4百万トン、37.8%減)の見込み。

同省によれば、2023/24年度の冬小麦の播種済面積は、11月28日時点で3.76百万ヘクタール。播種予定面積は前年度(6.68百万ヘクタール)を40.3%下回る3.99百万ヘクタール。

また、同省の2月14日の公表によれば、春穀物の播種面積は戦争前の2021/22年度に比べると24.1%減少の22.00百万ヘクタールの見込み。現地情報会社によれば、ウクライナ農業全体として、種子や肥料、乾燥や保管コスト、輸送コストが上昇しており、国内販売価格が生産原価を下回っていることが問題化している。2023/24年度の小麦全体の生産量は16.0百万トンと更に減産の見込み。

冬小麦の生育状況は、2023年1月は平年に比べ温暖で夜間の気温低下も厳しくなく、適度な降雨に恵まれた。このままの状況で越冬期が終了すれば、比較的早く本格的な再生長が始まる可能性が高い。

【貿易状況・その他】USDAによれば、2022/23年度の輸出量は、「黒海穀物イニシアチブ」と陸上輸送による輸出の継続から、前月予測から0.5百万トン上方修正され、13.5百万トン(前年度比28.3%減)。

ウクライナ政府等によれば、2022/23年度の2022年7月～2023年1月のウクライナの小麦の輸出量は前年度同期比43.0%減の973.0万トン。輸出先国は、トルコ(19.4%)、ルーマニア(16.1%)、スペイン(14.2%)の順。前年度に比べ、インドネシア、エジプト向け輸出量は大幅に減少したものの、ルーマニア、スペイン、ポーランド等の一部のEU諸国向けが増加した。この背景には、ウクライナの主要港湾の封鎖と輸出に制約がある一方、EU国境の鉄道インフラが整備されたことがある。

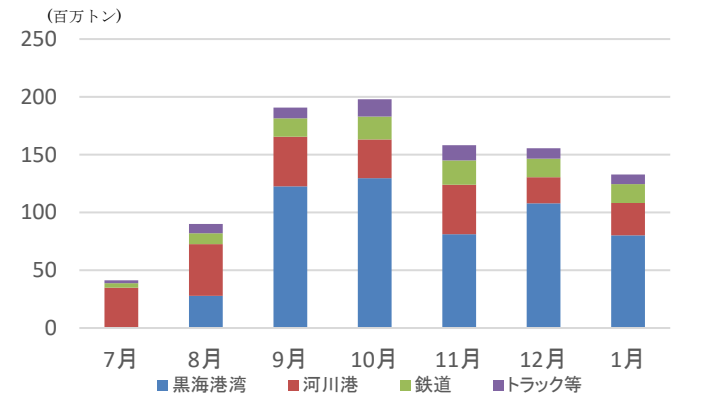
また、黒海穀物イニシアチブ「国連共同調整センター」によれば、1月31日現在、合意に基づく2022年8月から2023年1月までの黒海港湾からの小麦輸出量は545.6万トンで、輸出先国は、スペイン(24.0%)、トルコ(17.6%)、バングラデシュ(8.0%)の順。なお、1月の黒海港湾からの小麦輸出量は80.2万トンで、同月の小麦輸出量の60.7%を占める。なお、4者協議によるウクライナ産穀物の黒海経由での輸出再開に関する合意は120日間延長されており、3月19日までとされている。

小麦－ウクライナ (主に冬小麦を栽培) (単位:百万トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23(22年7月～23年6月)			
			予測値、() はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	25.4	33.0	21.0 (21.5)	-	▲ 36.4	
消 費 量	8.7	10.0	9.2 (8.5)	-	▲ 8.0	
うち飼料用	2.6	4.0	4.0 (2.9)	-	-	
輸 出 量	16.9	18.8	13.5 (13.0)	0.5	▲ 28.3	
輸 入 量	0.1	0.1	0.1 (0.1)	-	▲ 28.6	
期末在庫量	1.5	5.8	4.2 (6.0)	▲ 0.5	▲ 27.5	
期末在庫率	5.9%	20.1%	18.5% (27.7%)	▲ 2.7	▲ 1.6	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	6.85	7.41	5.35 (5.5)	-	▲ 27.8	
単収(t/ha)	3.71	4.45	3.93 (3.90)	-	▲ 11.7	

資料: USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(8 February 2023)
IGC 「Grain Market Report」(12 January 2023)

図:ウクライナ産小麦の輸出形態別輸出量



資料: 現地情報会社のデータをもとに農林水産省で作成

表:ウクライナ産小麦の輸出量と輸出先国

2022/23年度 (2023年1月)				2022/23年度 (2022年7月～2023年1月)				2021/22年度 (2021年7月～2022年1月)			
国 名		輸出量	シェア	国 名		輸出量	シェア	国 名		輸出量	シェア
スペイン	22.3	16.9	トルコ	188.4	19.4	インドネシア	265.5	15.6			
ルーマニア	18.8	14.2	ルーマニア	156.2	16.1	エジプト	250.7	14.7			
トルコ	17.6	13.3	スペイン	137.7	14.2	トルコ	160.4	9.4			
ポーランド	10.6	8.0	ポーランド	67.3	6.9	パキスタン	136.3	8.0			
バングラデシュ	8.1	6.1	イタリア	43.1	4.4	サウジアラビア	69.0	4.0			
サウジアラビア	6.4	4.8	バングラデシュ	40.5	4.2	バングラデシュ	63.2	3.7			
イタリア	6.2	4.7	エジプト	35.6	3.7	モロッコ	56.3	3.3			
その他	42.2	31.9	その他	304.2	31.3	その他	705.9	41.3			
計	132.2	100.0	計	973.0	100.0	計	1,707.3	100.0			

資料: 現地情報会社のデータをもとに農林水産省で作成

2 とうもろこし

(1) 国際的なとうもろこし需給の概要（詳細は右表を参照）

<米国農務省（USDA）の見通し> 2022/23 年度

生産量 前年度比 ↓ 前月比 ↓

・フィリピン、ベトナム等で上方修正も、アルゼンチン等で下方修正され、前月から下方修正された。

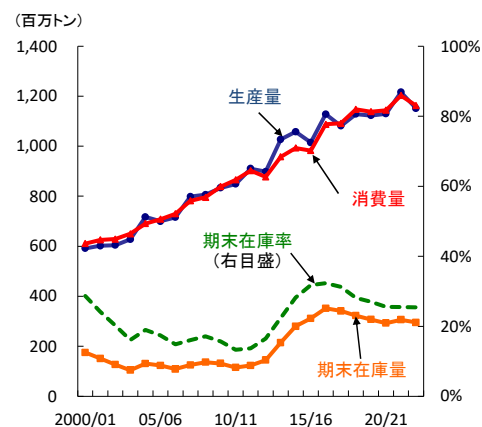
消費量 前年度比 ↓ 前月比 ↓

・EU 等で上方修正も、ブラジル、アルゼンチン等で下方修正され、前月から下方修正された。

輸出量 前年度比 ↓ 前月比 ↑

・アルゼンチンで下方修正も、ブラジル、ウクライナ等で上方修正され、前月から上方修正された。

期末在庫量 前年度比 ↓ 前月比 ↓



資料：USDA「PS&D」（2023.2.8）をもとに農林水産省にて作成

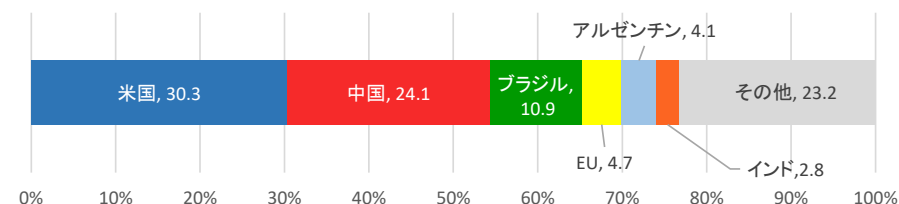
◎世界のとうもろこし需給

(単位：百万トン)

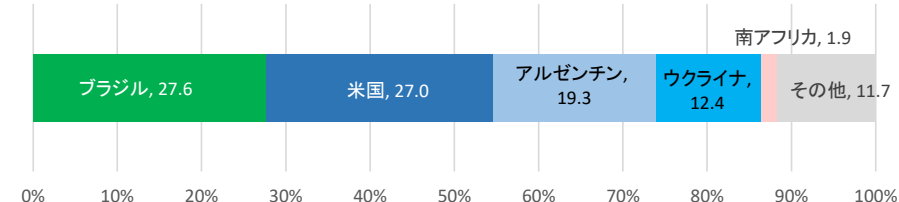
年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23		
			予測値	前月予測から の変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	1,129.5	1,216.0	1,151.4	▲ 4.6	▲ 5.3
消 費 量	1,144.1	1,202.6	1,162.4	▲ 3.1	▲ 3.3
うち飼料用	724.0	749.8	729.1	▲ 3.8	▲ 2.8
輸 出 量	182.7	204.7	181.1	2.9	▲ 11.6
輸 入 量	184.9	184.5	177.0	1.6	▲ 4.1
期末在庫量	292.8	306.3	295.3	▲ 1.1	▲ 3.6
期末在庫率	25.6%	25.5%	25.4%	▲ 0.0	▲ 0.1

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(8 February 2023)

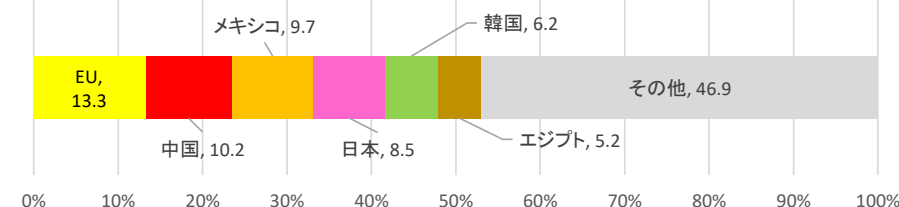
○ 2022/23 年度 世界のとうもろこしの生産量(1,151.4 百万トン) (単位：%)



○ 2022/23 年度 世界のとうもろこしの輸出量(181.1 百万トン) (単位：%)



○ 2022/23 年度 世界のとうもろこしの輸入量(177.0 百万トン) (単位：%)



（２）国別のとうもろこしの需給動向

＜ 米国 ＞ 生産量は収穫面積・単収の減少により減産、輸出減の見通し

【生育・生産状況】USDAによれば、2022/23年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、夏季のコーンベルトの一部での高温・乾燥の影響から前年度より8.9%減の348.8百万トンの見込み。なお、収穫面積は、2008/09年度以来の低水準の見込み。

前年11月末時点で、収穫は例年より早いペースでほぼ終了した。

【需要状況】USDAによれば、2022/23年度の消費量は、ガソリン需要の減少とエタノール加工マージンの悪化による前年9月から1月までの低調なエタノール生産実績を反映し、エタノール用需要が前月予測から0.6百万トン下方修正された。生産量の減少に伴い、消費量全体で、前年度より4.2%減の303.9百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、前年度より22.1%減の48.9百万トンの見込み。これは、2019/20年度（45.2百万トン）以来の低水準である。輸出量減少の背景には、主要輸出先国である中国が輸入先の多角化を進めるため、2023年以降ブラジル産の輸入を本格化させていることがありとみられる。

USDAによれば、2023年輸出検証高(2023年1月5日～2月2日)は2.8百万トンであり、内訳はメキシコ（1.3百万トン）、中国（0.6百万トン）、日本（0.4百万トン）、エルサルバドル（0.1百万トン）の順である。

USDAによれば、2022/23年度の期末在庫量は、消費量の下方修正に伴い、前月予測から0.6百万トン上方修正されたものの、前年度より8.0%減の32.2百万トンの見込み。

期末在庫率は9.1%で、前年度より低下し、引き続き低水準の見込み。

とうもろこし－米国

(単位：百万トン)

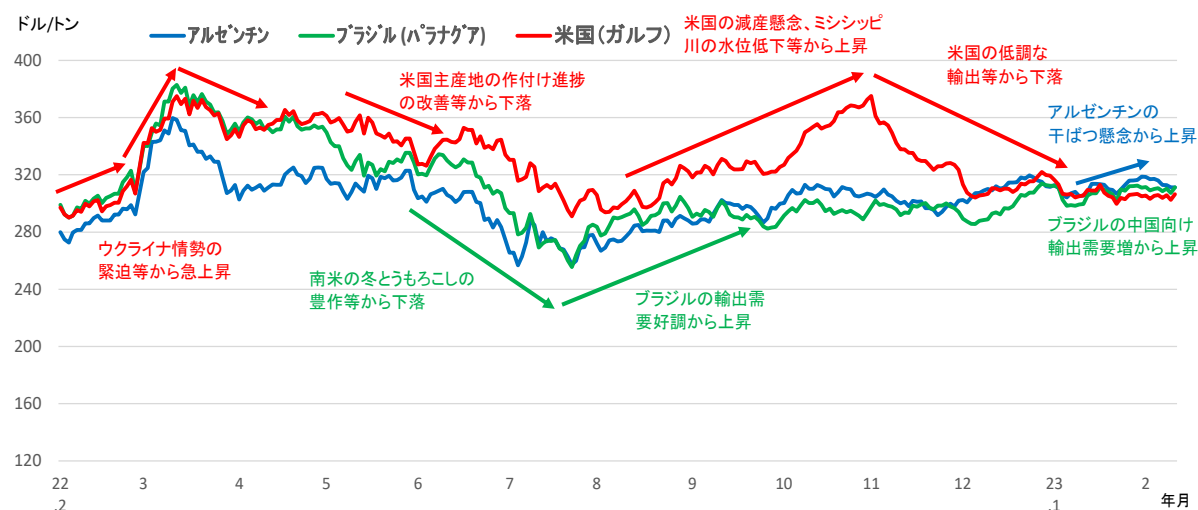
年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年9月～23年8月)		
			予測値	前月予測から の変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	358.5	382.9	348.8	－	▲ 8.9
消 費 量	306.7	317.1	303.9	▲ 0.6	▲ 4.2
うち飼料用	142.4	145.3	134.0	－	▲ 7.8
エタノール用等	127.7	135.3	133.4	▲ 0.6	▲ 1.4
輸 出 量	69.8	62.8	48.9	－	▲ 22.1
輸 入 量	0.6	0.6	1.3	－	104.8
期末在庫量	31.4	35.0	32.2	0.6	▲ 8.0
期末在庫率	8.3%	9.2%	9.1%	0.2	▲ 0.1

(参考)

収穫面積(百万ha)	33.31	34.53	32.05	－	▲ 7.2
単収(t/ha)	10.76	11.09	10.88	－	▲ 1.9

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(8 February 2023)

図：米国、ブラジル、アルゼンチンのとうもろこし輸出価格（FOB）の推移



資料：IGCのデータをもとに農林水産省にて作成

＜ ブラジル ＞ 生産量は史上最高、輸出量は世界第1位の見通し

【生育・生産状況】USDAによれば、2022/23年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、収穫面積及び単収の増加により、前年度より7.8%増の125.0百万トンで史上最高の見込み。2月上旬から中旬にかけて南部リオ・グランデ・ド・スール州では高温・乾燥傾向が続いているものの、中西部やその他の地域では平年以上の降雨が継続している。

ブラジル食料供給公社（CONAB）月例報告（2023.2.8）によれば、収穫中の2022/23年度の夏とうもろこしの生産量は、前年度比5.7%増の26.5百万トンの見込み。一方、大豆収穫後の2月以降に作付けされる冬とうもろこしの生産量は、中西部の大豆収穫遅れに伴う作付面積の下方修正により、前月予測から1.3百万トン下方修正されたものの、前年度比10.4%増の97.3百万トンの見込み。夏作・冬作の合計では前年度比9.4%増の123.7百万トンで史上最高の見込み。（P.23 大豆ーブラジルのクロップカレンダー参照）。

南部のリオ・グランデ・ド・スール州で2月9日現在、夏とうもろこしの収穫進捗率は39%。降雨過多による大豆の収穫遅れから、中西部のマット・グロッソ州で2月10日現在、冬とうもろこしの作付進捗率は34%となっており、前年度（57%）より遅れている。

【需要状況】USDAによれば、2022/23年度の消費量は、輸出の増加が国内価格を押し上げているため、飼料用需要が抑制され、前月予測から3.0百万トン下方修正されたものの、前年度より3.5%増の73.0百万トンと史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の輸出量は、中国向けを中心とした1月の輸出増と冬とうもろこし収穫後の輸出増が見込まれることを反映し、前月予測から3.0百万トン上方修正され、生産量の増加に伴い、前年度より4.2%増の50.0百万トンと史上最高の見込み。

ブラジル貿易統計によれば、2023年1月の輸出量は617.1万トンで、前年同月（273.1万トン）と比べ2.3倍となっている。内訳は、1位が中国98.4万トン、2位が日本97.6万トン、3位がベトナム63.0万トンの順。前年11月末以降、中国向け輸出が開始され、前年12月～1月の輸出量は第1位の208.1万トンとなっており、今後、輸出が本格化するとみられる。

とうもろこしーブラジル

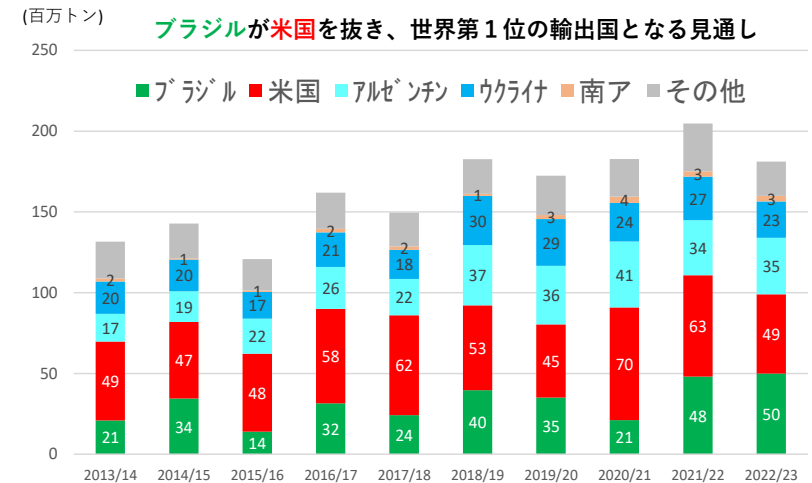
（大豆収穫後に栽培する冬とうもろこしが3/4を占め、夏とうもろこしは1/4）

（単位：百万トン）

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23（23年3月～24年2月）			
			予測値、() はIGC		前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	87.0	116.0	125.0	(123.1)	-	7.8
消 費 量	70.0	70.5	73.0	(77.6)	▲ 3.0	3.5
うち飼料用	59.5	59.5	61.5	(55.5)	▲ 3.0	3.4
輸 出 量	21.0	48.0	50.0	(44.6)	3.0	4.2
輸 入 量	2.9	2.6	1.3	(0.5)	-	▲ 50.0
期末在庫量	4.2	4.3	7.6	(6.1)	0.3	77.6
期末在庫率	4.6%	3.6%	6.1%	(5.0%)	0.2	2.6
(参考)						
収穫面積(百万ha)	19.90	21.80	22.70	(21.80)	-	4.1
単収(t/ha)	4.37	5.32	5.51	(5.65)	-	3.6

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(8 February 2023)
IGC「Grain Market Report」(12 January 2023)

図：世界のとうもろこし輸出国の輸出量の推移



資料：USDA「PS&D」（2023.2.8）のデータをもとに農林水産省にて作成

< アルゼンチン > 干ばつにより大幅減産見込み（輸出税継続）

【生育・生産状況】USDA によれば、2022/23 年度の生産量は、前年 10 月以降の長引く高温・乾燥天候により出穂期の早植えとうもろこしが被害を受け、多くの農家がサイレージ用に生育途中で刈り取ったことで、単収、収穫面積がいずれも下方修正され、前月予測から 5.0 百万トン下方修正となり、前年度より 5.1%減の 47.0 百万トンの見込み。

ブエノスアイレス穀物取引所週報（2023.2.16）によれば、2022/23 年度は、長引く高温・乾燥により、作付けは 2 月中旬によく終了した。一部の早植えとうもろこしは、サンタフェ州、エントレ・リオス州で収穫開始。作柄は、平年並みから良が 55%と前年度同期（74%）を下回る。生産量は 44.5 百万トンと前年度（52.0 百万トン）から減少する見通し。過去 60 年間で最悪の干ばつとも言われており、ラニーニャ現象に伴う乾燥天候の影響が大きいとみられる。

【需要状況】USDA によれば、2022/23 年度の消費量は、生産量の下方修正に伴い、前月予測から 2.0 百万トン下方修正され、前年度より 21.1%減の 12.0 百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2022/23 年度の輸出量は、生産量の下方修正に伴い、前月予測から 3.0 百万トン下方修正されたものの、前年度より 2.9%増の 35.0 百万トンの見込み。

アルゼンチン国家統計局によれば、2022 年 1～12 月の輸出量は 35.7 百万トンで、前年同期（40.1 百万トン）より 11.0%減。内訳は、1 位がベトナム 5.2 百万トン、2 位が韓国 4.9 百万トン、3 位がペルー 3.2 百万トン。なお、12 月の輸出量は 1.5 百万トンで、ブラジルの冬とうもろこしの不作等により生産・輸出が好調だった前年同月（2.3 百万トン）と比べ、36.8%減となっている。

アルゼンチン政府は、財政赤字の補填等のため、2019 年 12 月 14 日、輸出税を約 7%から 12%へ引き上げ、その後継続している。

2021 年 12 月 17 日、アルゼンチン農牧水産大臣は、とうもろこしと小麦の輸出に関し、国内向け穀物供給不足の回避と食料品価格の上昇を抑制するため、輸出上限数量を設定することを表明。2 月中旬現在、とうもろこしの輸出上限数量は 2021/22 年度 36 百万トン、2022/23 年度 20 百万トンに設定されている。

とうもろこしーアルゼンチン

（単位：百万トン）

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23（23年3月～24年2月）			
			予測値、() は IGC		前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	52.0	49.5	47.0	(56.0)	▲ 5.0	▲ 5.1
消 費 量	13.5	15.2	12.0	(20.4)	▲ 2.0	▲ 21.1
うち飼料用	9.5	11.3	8.0	(15.5)	▲ 2.0	▲ 29.2
輸 出 量	40.9	34.0	35.0	(37.3)	▲ 3.0	2.9
輸 入 量	0.0	0.0	0.0	(0.4)	-	-
期末在庫量	1.2	1.5	1.5	(2.2)	-	-
期末在庫率	2.2%	3.0%	3.2%	(3.9%)	0.3	0.1
(参考)						
収穫面積(百万ha)	6.55	7.10	6.70	(8.00)	▲ 0.20	▲ 5.6
単収(t/ha)	7.94	6.97	7.01	(7.00)	▲ 0.53	0.6

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(8 February 2023)
IGC「Grain Market Report」(12 January 2023)

写真：北部サンタフェ州の早植えとうもろこしの圃場風景 （1月29日撮影）

前年9月上旬に作付け。作付け期から生殖生長期まで干ばつの影響を受け続けている。先端部分には実が入っていない。収穫は3月の予定。



< 中国 > 生産量、消費量ともに史上最高、輸入量減少の見通し

【生育・生産状況】USDAによれば、2022/23年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、主産地の黒竜江省等東北地区及び華北平原で生育期を通じて良好な天候に恵まれたことから、単収の増加により、前年度より1.7%増の277.2百万トンで史上最高の見込み。

前年11月上旬時点で、春とうもろこし、夏とうもろこしの収穫は既に終了。

【需要状況】USDAによれば、2022/23年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、旺盛な飼料用消費から前年度より2.1%増の297.0百万トンと史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の輸入量は、前月予測からの変更はなく、国内産の豊作等を受け、前年度より17.7%減の18.0百万トンの見込み。

中国の貿易統計によれば、2022年1～12月の輸入量は20.6百万トンで、前年同期比で27.3%減。内訳は、米国産14.9百万トン（72%）、ウクライナ産5.3百万トン（26%）。5月以降、前年同月に比べウクライナ産の輸入が大幅に減少している。ただし、12月のウクライナ産の輸入量は28.6万トンと、前年同月（92.0万トン）には及ばないものの、前年8月以降の黒海経由の輸出再開を受けて、回復傾向にある。（右図、P.14 ウクライナ参照）

なお、前年11月末にCOFCO（中糧集団）が買い付けた6.8万トンのブラジル産とうもろこしを積んだばら積船が、1月上旬に広東省の港に到着した。今後、ブラジル産の輸入を増やし、米国産への輸入依存を減らす意向とみられる。他の穀物も含めた今後の中国の輸入動向に注視が必要。

農業農村部「農産品供需形勢分析月報 2022年12月号」によると、前年12月の国内流通価格は、3,020元/トンと前月（2,980元/トン）から上昇。12月初旬、東北部の一部産地で降雨・降雪があり、物流が大きな影響を受けたことで、市場への供給が不十分となり、2022年の最高値まで一時上昇したものの、12月中旬以降、物流は完全に回復し、価格は徐々に下落した。ただし、12月の平均価格は前月を上回った。一方、前年12月の輸入価格は、2,900元/トンと前月（3,220元/トン）から大幅に下落。

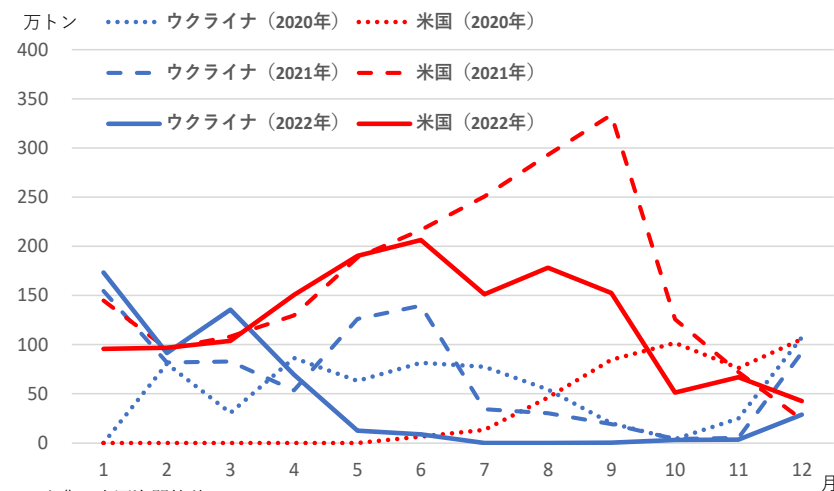
とうもろこし—中国

（単位：百万トン）

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年10月～23年9月)			
			予測値、() はIGC		前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	260.7	272.6	277.2	(277.2)	-	1.7
消 費 量	285.0	291.0	297.0	(309.4)	-	2.1
うち飼料用	203.0	209.0	216.0	(207.0)	-	3.3
輸 出 量	0.0	0.0	0.0	(0.1)	-	-
輸 入 量	29.5	21.9	18.0	(19.0)	-	▲ 17.7
期末在庫量	205.7	209.1	207.3	(175.0)	-	▲ 0.9
期末在庫率	72.2%	71.9%	69.8%	(56.5%)	-	▲ 2.1
(参考)						
収穫面積(百万ha)	41.26	43.32	43.07	(43.00)	-	▲ 0.6
単収(t/ha)	6.32	6.29	6.44	(6.45)	-	2.4

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(8 February 2023)
IGC「Grain Market Report」(12 January 2023)

図：中国におけるウクライナ、米国産とうもろこしの輸入状況



出典：中国海関統計

注：2020年1月分と2月分は合計で公表されたため、便宜上1/2で按分

< ウクライナ > ロシアによる侵攻により、輸出量は前年度より 17%減

【生育・生産状況】USDA によれば、2022/23 年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、収穫期の前年 10 月～11 月の記録的な降雨に加え、労働力不足、燃料費の高騰、輸送や貯蔵の問題といったロシアによる侵攻の影響を受け、主産地の収穫が著しく遅れたこと、一部のとうもろこしが刈り残され、冬場の圃場に放置されていることなどから、収穫面積及び単収が減少し、史上最高の生産量となった前年度より 35.9%減の 27.0 百万トンの見込み。

ウクライナ農業政策食料省によれば、2 月 16 日時点で、収穫済面積は 4.0 百万ヘクタール、収穫量 26.5 百万トン、収穫進捗率は 94%となっている。

【需要状況】USDA によれば、2022/23 年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、前年度より 43.1%減の 6.2 百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2022/23 年度の輸出量は、EU 及び中国向けの予想を上回る輸出増加を受けて前月予測から 2.0 百万トン上方修正されたものの、前年度より 16.6%減の 22.5 百万トンの見込み。

ウクライナ政府等によれば、2022/23 年度（2022 年 10 月～2023 年 9 月）のうち、2022 年 10 月～2023 年 1 月の輸出量は 1,046 万トンで、前年度同期（1,409 万トン）に比べ 25.7%減。輸出先国は、中国、ルーマニア、スペイン、ハンガリー、ポーランド、イタリア等となっている。なお、この輸出量には、海上輸送に加え、陸路等での輸出分も含まれる。

黒海穀物イニシアチブ「国連共同調整センター」によれば、輸出が再開された前年 8 月 1 日から 1 月 31 日までの黒海港湾からのとうもろこし輸出量は 898 万トンであり、輸出先国は、中国（235 万トン）、スペイン（172 万トン）、イタリア（105 万トン）、トルコ（72 万トン）等となっている。

なお、国連、ウクライナ、ロシア、トルコの 4 者によるウクライナ産穀物の黒海経由での輸出再開に関する合意は、再度 120 日延長され、2023 年 3 月 19 日までとされている。

また、2022/23 年度の期末在庫量は、前月予測から 2.0 百万トン下方修正され、前年度より 33.4%減の 3.4 百万トンの見込み。侵攻前の 2020/21 年度と比較すると、依然として高水準の見込み。

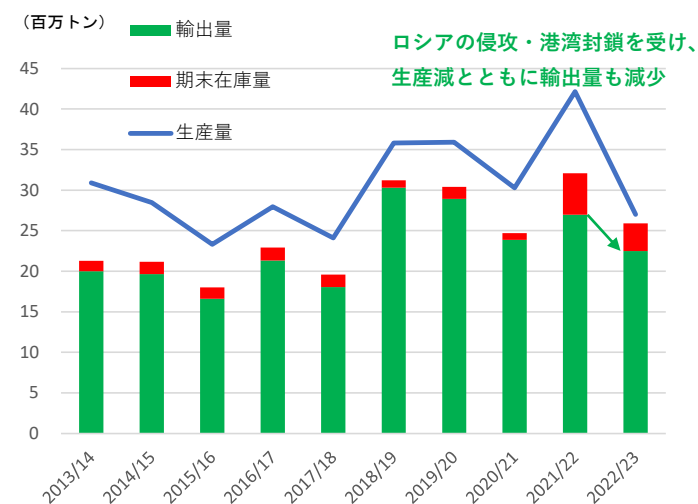
とうもろこしーウクライナ

(単位：百万トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年10月～23年9月)			
			予測値、() は IGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	30.3	42.1	27.0 (25.5)	-	▲ 35.9	
消 費 量	7.1	10.9	6.2 (8.9)	-	▲ 43.1	
うち飼料用	5.9	9.7	5.0 (5.5)	-	▲ 48.5	
輸 出 量	23.9	27.0	22.5 (19.0)	2.0	▲ 16.6	
輸 入 量	0.0	0.0	0.0 (0.0)	-	▲ 100.0	
期末在庫量	0.8	5.1	3.4 (4.5)	▲ 2.0	▲ 33.4	
期末在庫率	2.7%	13.4%	11.8% (16.3%)	▲ 8.4	▲ 1.6	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	5.40	5.49	4.00 (4.00)	-	▲ 27.1	
単収(t/ha)	5.62	7.68	6.75 (6.38)	-	▲ 12.1	

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(8 February 2023)
IGC 「Grain Market Report」(12 January 2023)

図：とうもろこしの生産量、輸出量、期末在庫量の推移



資料：USDA 「PS&D」 (2023. 2. 8) をもとに農林水産省にて作成。

3 コメ

(1) 国際的なコメ需給の概要（詳細は右表を参照）

<米国農務省（USDA）の見通し>

2022/23 年度

生産量

前年度比



前月比



- ・ベトナム等で下方修正も、タイ等で上方修正され、前月から上方修正された。

消費量

前年度比



前月比



- ・インドネシア、ブラジル等で下方修正も、中国、タイ等で上方修正され、前月から上方修正された。

輸出量

前年度比



前月比



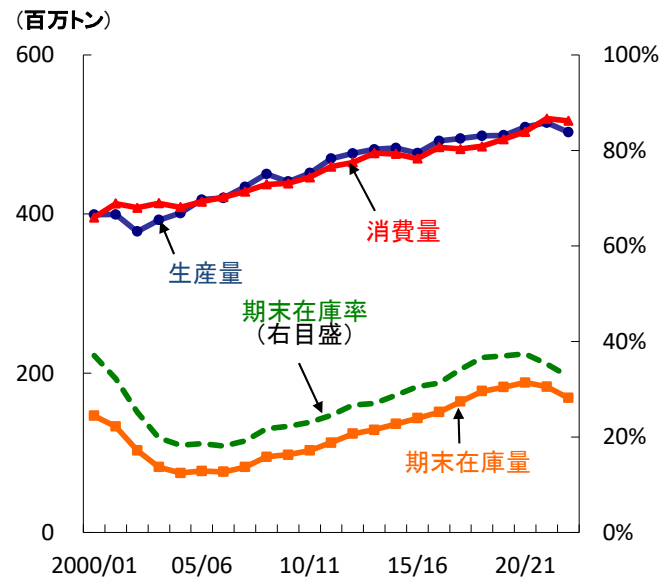
- ・インド等で上方修正も、ベトナム、タイ、パキスタン、米国等で下方修正され、前月から下方修正された。

期末在庫量

前年度比



前月比



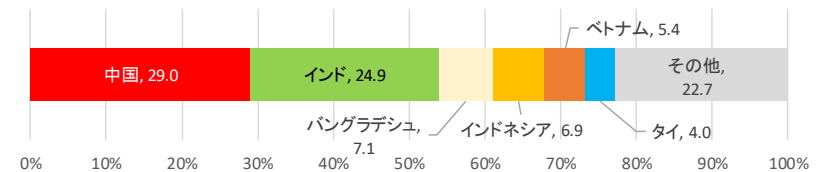
◎世界のコメ需給

(単位：百万精米トン)

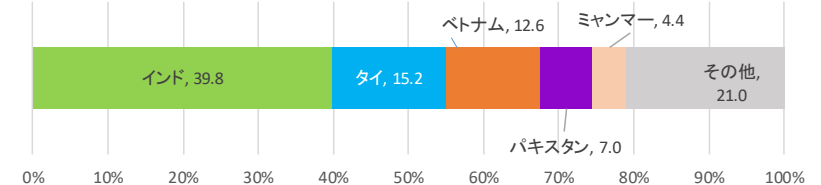
年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	509.3	514.8	503.0	0.0	▲ 2.3
消 費 量	503.4	519.9	517.2	1.1	▲ 0.5
輸 出 量	51.2	56.7	54.1	▲ 0.3	▲ 4.7
輸 入 量	46.5	54.7	53.1	▲ 0.2	▲ 3.0
期末在庫量	188.4	183.3	169.1	▲ 0.9	▲ 7.8
期末在庫率	37.4%	35.3%	32.7%	▲ 0.2	▲ 2.6

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(8 February 2023)

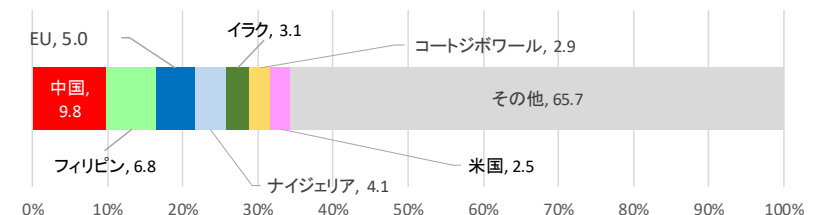
○ 2022/23年度 世界のコメの生産量(503.0百万トン) (単位：%)



○ 2022/23年度 世界のコメの輸出量(54.1百万トン) (単位：%)



○ 2022/23年度 世界のコメの輸入量(53.1百万トン) (単位：%)



(2) 国別のコメの需給動向

< 米国 > 生産量減少により長粒種の輸出価格が更に上昇

【生育・生産動向】USDAによれば、2022/23年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、長粒種、中・短粒種とも収穫面積及び単収の減少により、対前年度比 16.3%減の 5.1 百万トンと、1993/94 年度以来の低水準となる見込み。収穫面積は、長粒種の作付けが収益性がよい大豆等へシフトしたことや、厳しい干ばつの長期化による中・短粒種の灌漑用水不足等で、対前年度比で 12.9%減少し、1983/84 年度以来の低水準となる見込み。

なお、灌漑用水不足や取水制限が続いていたカリフォルニア州（中・短粒種の主産地）では、前年 12 月末から本年 1 月中旬にかけて継続的な豪雨があり、1 月の平均降水量の 2 倍という記録的な降水量となった。シエラネバダ山脈の降雪量も例年より 30%増加しており、2023 年の灌漑用水供給の改善の可能性がある。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、生産量の減少による供給量減少から、対前年度比 2.7%減の 4.7 百万トンの見込み。

2022/23 年度の輸入量は、前年 12 月末のタイの香り米輸入量が予想を下回ったことから、前月予測から 0.1 百万トン下方修正されたものの、対前年度比 10.8%増の 1.3 百万トンと、依然として史上最高の見込み。特に、中・短粒種の減産に伴い、同種の輸入量が 27%増と大幅に増加している。

2022/23 年度の輸出量は、特に長粒種の輸出価格高騰による輸出競争力の低下見込み等から、前月予測から 0.1 百万トン下方修正され、対前年度比 24.5%減の 2.0 百万トンと、1985/86 年度以来の低水準の見込み。

USDA「Rice Outlook」（2023.2.10）によれば、長粒種の価格は供給量の減少によりここ数か月間高止まりしており、2月7日までの週のイラク向け長粒種（2等、砕米4%混入）は 760 ドル/トンと、前月から 25 ドル/トン上昇し、2008 年 10 月初旬（772 ドル/トン）以来の高値となっている。また中粒種は、地中海向けカリフォルニア米（1等、砕米4%混入）の価格が 1,650 ドル/トンと、高止まりしている。（右図参照）

コメー米国

主に長粒種はミシシッピ川沿いで栽培、中・短粒種のシェアは 1/4
米国のコメ生産に占めるカリフォルニア州のシェアは約 2 割

（単位：百万精米トン）

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年8月～23年7月)		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	7.2	6.1	5.1	-	▲ 16.3
消費量	4.9	4.8	4.7	-	▲ 2.7
輸出量	3.0	2.6	2.0	▲ 0.1	▲ 24.5
輸入量	1.1	1.2	1.3	▲ 0.1	10.8
期末在庫量	1.4	1.3	1.1	0.0	▲ 16.7
期末在庫率	17.8%	17.0%	15.8%	0.8	▲ 1.2

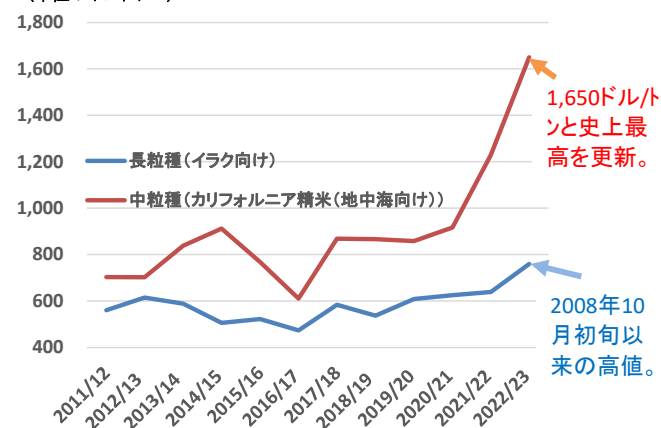
(参考)

収穫面積(百万ha)	1.21	1.01	0.88	-	▲ 12.9
単収(もみt/ha)	8.54	8.64	8.28	-	▲ 4.2

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(8 February 2023)

図：米国の長粒種と中粒種の輸出価格の推移

（単位：ドル/トン）



資料：USDA「Rice Outlook」（2023.2.10）より。価格は年度内の平均価格。なお、2022/23 年度は 2023 年 2 月の価格。

< インド > ラビ米の作付けはほぼ終了

【生育・生産動向】USDAによれば、2022/23年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、モンスーン期の降雨の遅れによるカリフ米の作付け減少により、対前年度比 4.1%減の 125.0 百万トンの見込み。

インド農業農民福祉省（2023.2.3）によると、ラビ米の作付け済面積は、2月3日時点で 462.5 万ヘクタールと、過去5年平均（2016/17-2020/21年度：477.1 万ヘクタール）に対する進捗率は 96.9%。また、第2回収量予測（2023.2.14）によると、2022/23年度の生産量は 130.8 百万トン（カリフ米が 108.1 万トン、ラビ米が 22.8 百万トン）と、目標値である 130.5 百万トンを超える見通し。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、史上最高となった前年度より 2.5%減の 108.5 百万トンとなる見込み。なお、前年度に引き続き政府の低所得世帯向け食料配給プログラム（約8億人が対象）向けにコメを放出していることもあり、依然として史上2番目の消費量となる見込み。

2022/23年度の輸出量は、引き続き他のアジア諸国より価格競争力があること、ここ数か月の輸出量が予想以上に増加していることを受け、前月予測から 1.0 百万トン上方修正されたものの、生産量減少により対前年度比 2.4%減の 21.5 百万トンの見込み。

なお、インドは、カリフ米の生産減少による国内価格高騰を防止する観点から、前年9月9日に輸出規制（碎米（100%）の輸出禁止及びバスマティ米・パーボイルド米以外のコメへの輸出税課税（20%））を発動。ただし、依然として世界の輸出量の 40%を占め、世界第1位の輸出国となる見込み。

同「Rice Outlook」（2023.2.10）によれば、インド産米（碎米5%混入）の2月7日までの週の輸出価格は 435 ドル/トンと、前月から 40 ドル/トン上昇したものの、依然アジア主要輸出国の中で最低価格水準となっている（P.20の「長粒種の FOB 価格の推移」を参照）。

2022/23年度の期末在庫量は、輸出量の上方修正に伴い前月予測から 1.0 百万トン下方修正され、対前年度比 14.7%減の 29.0 百万トンの見込み。

コメーインド

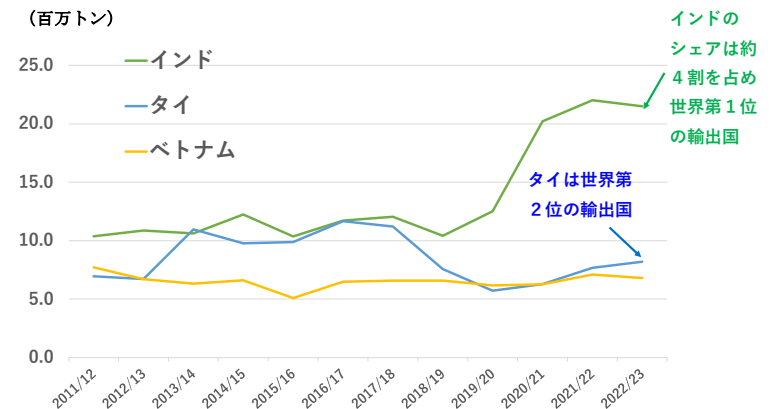
雨季をカリフ、乾季をラビと呼ぶ。北部はカリフ・ラビ（小麦）の二毛作、南部はカリフ・ラビの二期作。主にインディカを栽培

（単位：百万精米トン）

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23（22年10月～23年9月）		
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	124.4	130.3	125.0 (123.8)	-	▲ 4.1
消費量	101.1	111.3	108.5 (109.0)	-	▲ 2.5
輸出量	20.2	22.0	21.5 (17.7)	1.0	▲ 2.4
輸入量	0.0	0.0	0.0 (0.0)	-	-
期末在庫量	37.0	34.0	29.0 (30.0)	▲ 1.0	▲ 14.7
期末在庫率	30.5%	25.5%	22.3% (23.7%)	▲ 1.0	▲ 3.2
(参考)					
収穫面積(百万ha)	45.77	46.38	45.50 (45.00)	-	▲ 1.9
単収(もみt/ha)	4.08	4.21	4.12 (2.75)	-	▲ 2.1

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(8 February 2023)
IGC「Grain Market Report」(12 January 2023)（単収は精米t/ha）

図：世界のコメの主要輸出国の輸出量の推移



資料：USDA「PS&D」（2023.2.8）をもとに農林水産省にて作成

< 中国 > 2022 年の輸入量が関税割当数量を初めて超過

【生育・生産動向】USDAによれば、2022/23 年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、対前年度比 2.0%減の 146.0 百万トンと、2013/14 年度以来の低水準の見込み。

なお、中国国家统计局「2022 年糧食生産量データ」(2022.12.12)によれば、生産量（もみベース）は 208.5 百万トンと、対前年比 2.0%減少した。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23 年度の消費量は、前月予測から 1.0 百万トン上方修正されたものの、飼料用米の消費量の減少から、対前年度比 0.9%減の 155.0 百万トンとなる見込み。なお、中国国家糧食及び物資備蓄局の推計では、ここ 3 年ほど、毎年 30 百万トン（粳ベース）程度の古米が飼料用として仕向けられているとのこと。

2022/23 年度の輸入量は、前月予測からの変更はなく、砕米の主要輸入先国であるパキスタンの洪水による生産減少見通しやインドのコメ輸出規制により、対前年度比 12.6%減の 5.2 百万トンの見込み。中国はこれまで、とうもろこし等飼料用穀物の価格高騰を背景に、飼料用等として低価格の砕米をインド等から輸入してきた。

中国海関統計によれば、2022 年の年間輸入量は、前年の 492.6 万トンから 25.0%増加し、615.6 万トンとなった。輸入先はインドが 218.0 万トンと最も多く、対前年同期比で 99.9%の増加。次いでパキスタンが 119.7 万トン（対前年同期比 24.5%の増加）となっている。なお、11 月以降、インドの輸出規制やパキスタンの洪水による減産の影響から、輸入量は 2020 年及び 2021 年を下回った。

なお、USDAによれば、2022 年に、コメの関税割当て制度が設けられてから初めて、割当数量（5.32 百万トン）を超える輸入となった。

USDAによれば、2022/23 年度の期末在庫量は、消費量の上方修正により、前月予測から 1.0 百万トン下方修正され、対前年度比 5.3%減の 107.0 百万トンの見込み。世界の期末在庫量のうち、中国が依然として約 6 割を占める見通し。なお、中国国家糧食及び物資備蓄局は、備蓄入替と飼料価格抑制のため、3 月から 18.0 百万トンの古米（USDA による推計）の競売を実施する見込み。

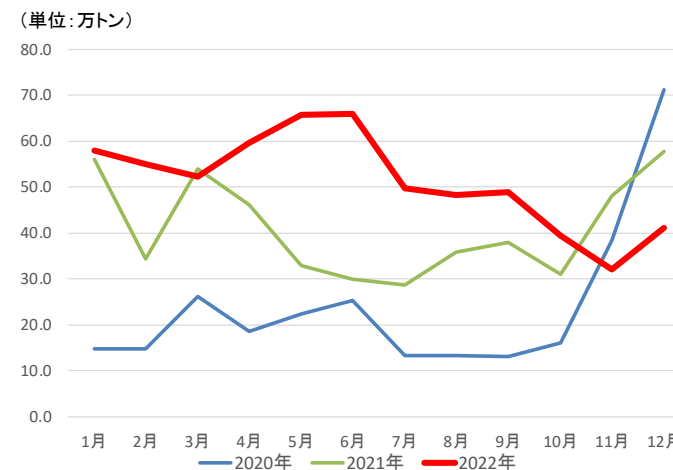
コメー中国

北部で一期作、南部で二期作。ジャポニカ(粳)米は東北地区、江蘇省等で栽培、生産シェアは3割程度

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年7月～23年6月)		
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	148.3	149.0	146.0 (146.0)	-	▲ 2.0
消 費 量	150.3	156.4	155.0 (151.1)	1.0	▲ 0.9
輸 出 量	2.2	2.1	2.2 (2.2)	-	5.8
輸 入 量	4.2	6.0	5.2 (3.4)	-	▲ 12.6
期末在庫量	116.5	113.0	107.0 (104.2)	▲ 1.0	▲ 5.3
期末在庫率	76.4%	71.3%	68.1% (68.0%)	▲ 1.1	▲ 3.2
(参考)					
収穫面積(百万ha)	30.08	29.92	29.45 (30.03)	-	▲ 1.6
単収(もみt/ha)	7.04	7.11	7.08 (4.86)	-	▲ 0.4

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(8 February 2023)
IGC「Grain Market Report」(12 January 2023) (単収は精米t/ha)

図：中国のコメ輸入量の推移



出典：中国海関統計

注：2020 年 1 月分と 2 月分は合計で公表されたため、便宜上 1/2 で按分。

< タイ > 2021/22 年度の輸出量は前年度から 22.1%増加

【生育・生産動向】USDA によれば、2021/22 年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、良好な天候と十分な降雨により、対 2020/21 年度比 5.3%増の 19.9 百万トンの見込み。

2022/23 年度の実産量は、乾季にもかかわらず、十分な降雨による潤沢な灌漑用水の供給から、乾季米の単収の増加が見込まれ、前月予測から 0.1 百万トン上方修正され、対前年度比 1.6%増の 20.2 百万トンの見込み。背景には、農家出荷価格の上昇が農家の作付け意欲を刺激していることもあるとみられる。

アセアン食料安全保障情報システム（2023.2）によると、乾季米は幼穂形成期から穂ばらみ期にある。前年度同時期より灌漑用水が潤沢なことから、作付面積は前年度より 19%増加している。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2022/23 年度の輸出量は、2022 年後半の輸出ペースの鈍化が継続すると予想されることから、前月予測から 0.3 百万トン下方修正されたものの、対前年度比 6.8%増の 8.2 百万トンとなる見込み。インドに次ぐ世界第 2 位のコメ輸出国となる見通し。

2021/22 年度の輸出量は、貿易統計に基づき前月予測から 0.2 百万トン下方修正されたものの、対 2020/21 年度比 22.1%増の 7.7 百万トンの見込み。

タイ米輸出業者協会によれば、2022 年 1～12 月の輸出量は、前年同期の 629.7 万トンから 22.2%増加し、769.4 万トンとなった。主な輸出先はイラクが 160.0 万トン（前年度比 4.6 倍）、南アフリカが 77.5 万トン（前年度並み）、中国が 75.2 万トン（前年度比 1.2 倍）、米国が 65.2 万トン（前年度比 1.1 倍）。また、本年 1 月時点でのバーツ高を受け、2022/23 年度の輸出目標を 0.5 百万トン引き下げ 7.5 百万トンとした。

USDA「Rice Outlook」（2023.2.10）によれば、2 月 7 日までの週のタイ産米（長粒、2 等精米）の輸出価格は、バーツ高や東南アジア・中東諸国からの堅調な需要により前月から 12 ドル上昇し、2021 年 3 月以来の水準である 507 ドル/トンとなった（P.20 の「長粒種の FOB 価格の推移」を参照）。背景として、インドネシアが政府備蓄の不足に対処するため輸入を拡大していること、イラクが検疫問題で 7 年間停止していたタイ産米の輸入を 2022 年に再開したことなどもあるとみられる。

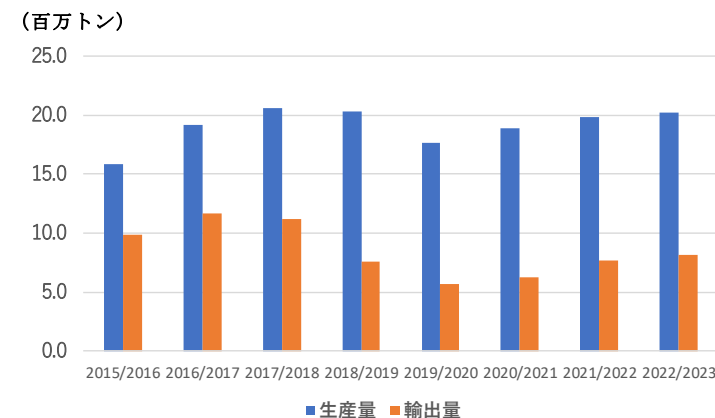
コメ・タイ

夏期の雨季作と冬期の乾季作で行われる。主にインディカ米を栽培

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (23年 1 月～23年12月)		
			予測値、() は IGC	前月予測からの変更	対前年度増減率(%)
生 産 量	18.9	19.9	20.2 (20.2)	0.1	1.6
消 費 量	12.7	12.8	13.0 (12.3)	0.2	1.6
輸 出 量	6.3	7.7	8.2 (8.5)	▲ 0.3	6.8
輸 入 量	0.2	0.1	0.2 (0.3)	-	15.4
期末在庫量	4.0	3.5	2.7 (6.6)	0.4	▲ 24.3
期末在庫率	21.0%	17.1%	12.5% (31.9%)	2.0	▲ 4.6
(参考)					
収穫面積(百万ha)	10.51	10.70	10.85 (10.85)	-	1.4
単収(もみt/ha)	2.72	2.81	2.82 (1.86)	0.01	0.4

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(8 February 2023)
IGC「Grain Market Report」(12 January 2023)（単収は精米t/ha）

図：タイの生産量・輸出量の推移



資料：USDA「PS&D」（2023.2.8）をもとに農林水産省にて作成

< ベトナム > 2021/22 年度は他の作物への作付け転換等で収穫面積が減少

【生育・生産動向】USDA によれば、収穫面積の減少（1996/97 年以来の水準）により、2022/23 年度の生産量は、前月予測から 0.2 百万トン下方修正されたものの、前年度比 0.9% 増の 27.0 百万トンの見込み。

2021/22 年度の生産量は、主として夏秋作の収穫面積減少により、前月予測から 0.1 百万トン下方修正され、2020/21 年度比 2.2% 減の 26.8 百万トンの見込み。なお、2021/22 年度は、全ての作期で、主として肥料高騰や高収益作物（果物・野菜・養殖）への転換等により、収穫面積が減少した。

なお、アセアン食料安全保障情報システム（2023.2）によると、北部では冬春作の播種が開始された。播種済み面積は 10.7 万ヘクタールで、冷涼な気候が続いているため前年度より播種が遅れている。南部では、冬春作の播種が進んでおり、播種済み面積は現時点で 182 万ヘクタールとなっている。一部地域では好天の中、冬春作の収穫が始まっている。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2021/22 年度の輸出量は、最近の輸出減速により、前月予測から 0.1 百万トン下方修正されたものの、2020/21 年度比 12.7% 増の 7.1 百万トンの見込み。

2022/23 年度の輸出量は、輸出価格の上昇や、2021/22 年度と 2022/23 年度の生産量が下方修正されたことから、前月予測から 0.6 百万トン下方修正され、前年度比 4.2% 減の 6.8 百万トンの見込み。

ベトナム税関総局によれば、2022 年 1～12 月の輸出量は 710.6 万トンで、上位からフィリピン（321.4 万トン）、中国（85.1 万トン）、コートジボワール（65.6 万トン）となっている。うち、ジャポニカ米は 27.9 万トンと約 4% を占める。

USDA 「Grain: World Markets and Trade」（2023.2.8）によれば、ベトナム産米（長粒種、5% 碎米混入）の 2 月 7 日までの週の価格は、春の新穀入荷前に、フィリピン及びアフリカからの需要が堅調なことから、前月の価格から 35 ドル/トン上昇して 509 ドル/トンと、高水準となった。

コメベトナム

北部で二期作、南部で二期作・三期作。主に長粒種、一部で短粒種も栽培

（単位：百万精米トン）

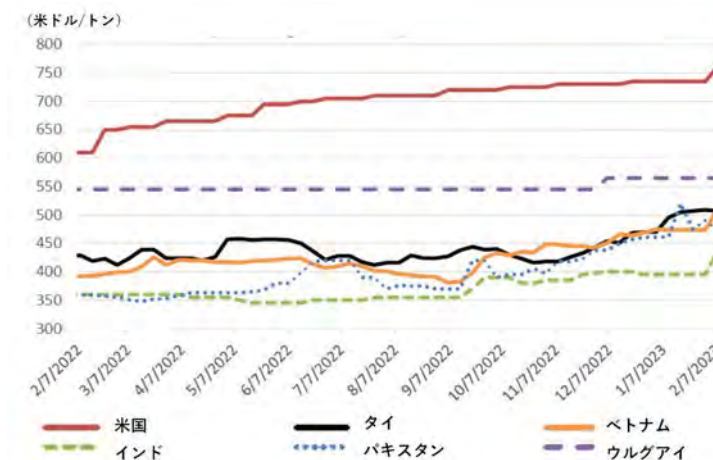
年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (23年1月～23年12月)		
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	27.4	26.8	27.0 (28.3)	▲ 0.2	0.9
消 費 量	21.5	21.5	21.5 (22.7)	-	-
輸 出 量	6.3	7.1	6.8 (7.2)	▲ 0.6	▲ 4.2
輸 入 量	1.8	1.5	1.0 (0.9)	-	▲ 33.3
期末在庫量	2.6	2.3	2.0 (2.1)	0.3	▲ 13.0
期末在庫率	9.5%	8.1%	7.1% (7.0%)	1.2	▲ 1.0

(参考)

収穫面積(百万ha)	7.31	7.19	7.17 (7.22)	▲ 0.11	▲ 0.3
単収(もみt/ha)	6.00	5.96	6.03 (3.92)	0.04	1.2

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」 (8 February 2023)
IGC 「Grain Market Report」 (12 January 2023) (単収は精米t/ha)

図：長粒種の FOB 価格の推移



資料：USDA 「Grain : World Markets and Trade」 (2023.2.8) より。

Ⅱ 油糧種子 大豆

(1) 国際的な大豆需給の概要（詳細は右表を参照）

<米国農務省（USDA）の見通し> 2022/23 年度

生産量 前年度比 ↑ 前月比 ↓

・アルゼンチン等で下方修正され、前月から下方修正された。史上最高の見込み。

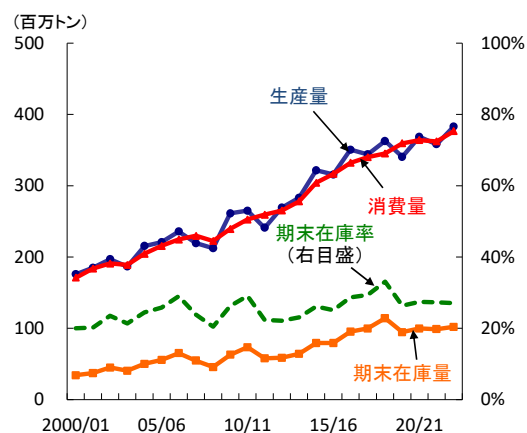
消費量 前年度比 ↑ 前月比 ↓

・中国、アルゼンチン等で下方修正され、前月から下方修正された。史上最高の見込み。

輸出量 前年度比 ↑ 前月比 ↓

・ブラジル、パラグアイ等で上方修正も、アルゼンチン等で下方修正され、前月から下方修正された。史上最高の見込み。

期末在庫量 前年度比 ↑ 前月比 ↓



資料：USDA「PS&D」（2023.2.8）をもとに農林水産省で作成

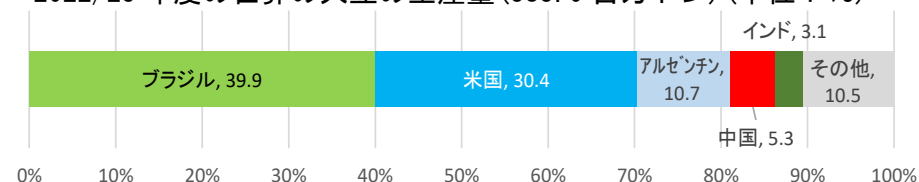
◎世界の大豆需給

(単位：百万トン)

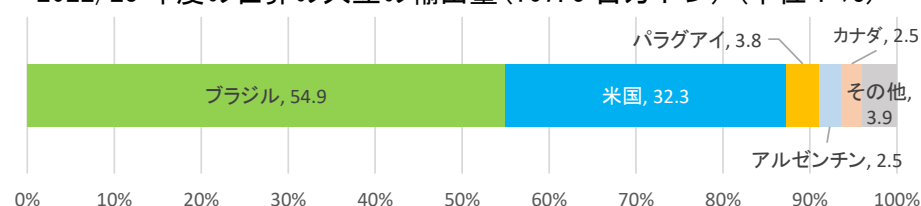
年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23		
			予測値	前月予測からの 変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	368.5	358.0	383.0	▲ 5.0	7.0
消 費 量	363.9	362.1	376.4	▲ 3.1	3.9
うち搾油用	315.9	312.9	323.9	▲ 3.4	3.5
輸 出 量	165.0	153.9	167.5	▲ 0.1	8.8
輸 入 量	165.6	157.1	164.1	▲ 0.3	4.4
期末在庫量	99.8	98.8	102.0	▲ 1.5	3.2
期末在庫率	27.4%	27.3%	27.1%	▲ 0.2	▲ 0.2

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」（8 February 2023）

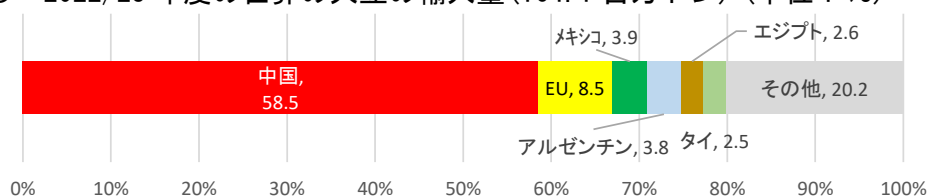
○ 2022/23 年度の世界の大豆の生産量 (383.0 百万トン) (単位：%)



○ 2022/23 年度の世界の大豆の輸出量 (167.5 百万トン) (単位：%)



○ 2022/23 年度の世界の大豆の輸入量 (164.1 百万トン) (単位：%)



（２）国別の大豆の需給動向

＜ 米国 ＞ 生産量は減産、輸出も減少の見通し

【生育・生産状況】USDAによれば、2022/23年度の実産量は、前月予測からの変更はなく、夏季のコーンベルトの一部での高温・乾燥の影響から主に単収の減少により、前年度より4.2%減の116.4百万トンの見通し。

前年11月中旬時点で、収穫は例年より早いペースでほぼ終了した。

【需要状況】USDAによれば、2022/23年度の実消費量は、前年12月以降の極度の低温の影響により一部の搾油工場の稼働が一時停止したことに伴う搾油量の減少から、前月予測から0.4百万トン下方修正されたものの、前年度より1.9%増の64.0百万トンで史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の実輸出量は、前月予測からの変更はなく、生産量の減少、ブラジルの輸出拡大等を背景に、米国の輸出競争力が弱くなっており、前年度より7.8%減の54.2百万トンの見込み。

USDAによれば、2023年輸出検証高（2023年1月5日～2月2日）は、8.7百万トンであり、内訳は中国（5.8百万トン）、メキシコ（0.7百万トン）、イタリア（0.4百万トン）、ドイツ（0.4百万トン）、インドネシア（0.3百万トン）の順。

USDAによれば、2022/23年度の期末在庫量は、消費量の下修正に伴い、前月予測から0.4百万トン上方修正されたものの、前年度より17.9%減の6.1百万トンの見込み。

なお、期末在庫率は5.2%で、前年度を下回っており、2015/16年度（5.0%）以来の低水準の見込み。

米国の輸出価格は、前年12月以降、収穫期を迎えているブラジル産に比べ割高で推移している。（右図参照）

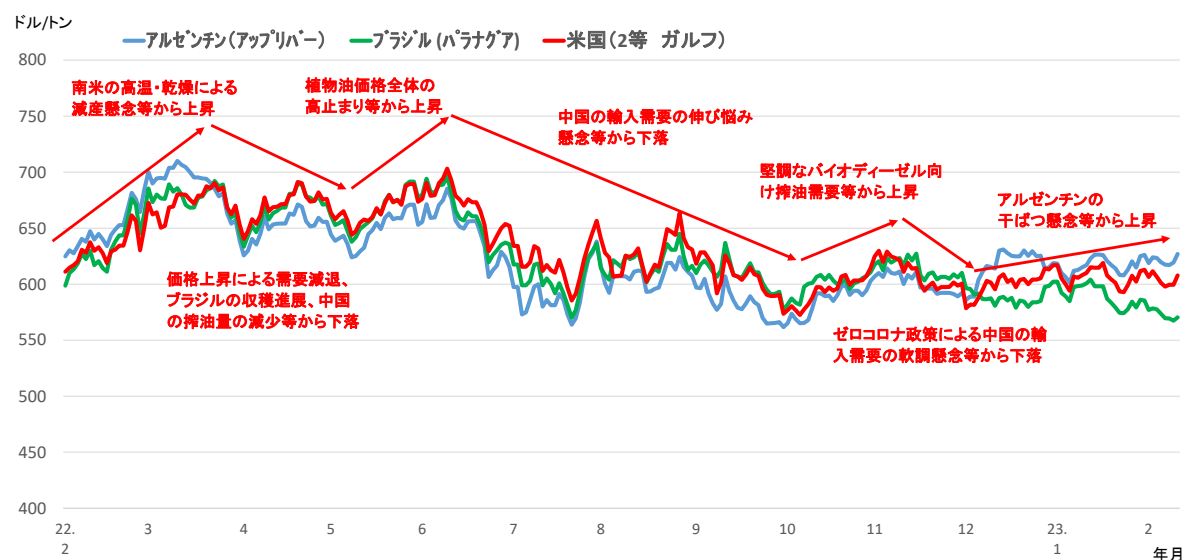
大豆－米国

（単位：百万トン）

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年9月～23年8月)		
			予測値	前月予測からの 変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	114.8	121.5	116.4	－	▲ 4.2
消 費 量	60.9	62.8	64.0	▲ 0.4	1.9
うち搾油用	58.3	60.0	60.7	▲ 0.4	1.2
輸 出 量	61.7	58.7	54.2	－	▲ 7.8
輸 入 量	0.5	0.4	0.4	－	▲ 4.7
期末在庫量	7.0	7.5	6.1	0.4	▲ 17.9
期末在庫率	5.7%	6.1%	5.2%	0.4	▲ 1.0
(参考)					
収穫面積(百万ha)	33.43	34.93	34.94	－	0.0
単収(t/ha)	3.43	3.48	3.33	－	▲ 4.3

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(8 February 2023)

図：米国、ブラジル、アルゼンチンの大豆輸出価格（FOB）の推移



資料：IGCのデータをもとに農林水産省にて作成

＜ ブラジル ＞ 生産量、輸出量ともに史上最高の見通し

【生育・生産状況】USDA によれば、2022/23 年度の実産量は、前月予測からの変更はなく、前年度より 18.1%増の 153.0 百万トンと史上最高の見込み。なお、収穫面積は、特に中西部のマット・グロッソ州（最大生産州）、ゴイアス州等で増加見込み。

また、ブラジル食料供給公社(CONAB)月例報告（2023.2.8）によれば、2022/23 年度の実産量は、中西部の主産地の天候に恵まれ、南部の州を中心に深刻な高温・乾燥の影響を受けた前年度より 21.8%増の 152.9 百万トンで史上最高の見込み。

2月上旬から中旬にかけて、南部リオ・グランデ・ド・スール州では高温・乾燥傾向が続いている一方、中西部の大豆産地では降雨が継続し、収穫遅れにつながっている。中西部のマット・グロッソ州で2月10日現在、収穫率は44%で、前年度（60%）より遅れているものの、過去5年平均（46%）に近づいている。南部のリオ・グランデ・ド・スール州で2月9日現在、作付進捗率は99%で、開花段階は68%。

【需要状況】USDA によれば、2022/23 年度の実消費量は、前月予測から 0.3 百万トン上方修正され、前年度より 5.3%増の 56.4 百万トンと史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2022/23 年度の実輸出量は、干ばつの影響を受けた隣国アルゼンチンの輸出量の下方修正及び輸入量の上方修正を受け、前月予測から 1.0 百万トン上方修正され、前年度より 16.3%増の 92.0 百万トンと史上最高の見込み。

ブラジル貿易統計によれば、2023 年1月の輸出量は 84.0 万トンで、前年同月（245.2 万トン）に比べ 65.8%減となっている。輸出先の内訳は、1位が中国 51.0 万トン、2位がロシア 14.5 万トン、3位がタイ 7.1 万トンとなっている。

大豆ーブラジル

（単位：百万トン）

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年10月～23年9月)			
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	139.5	129.5	153.0 (149.0)	-	18.1	
消 費 量	49.9	53.5	56.4 (54.6)	0.3	5.3	
うち搾油用	46.7	50.3	52.8 (51.5)	0.3	5.0	
輸 出 量	81.7	79.1	92.0 (90.9)	1.0	16.3	
輸 入 量	1.0	0.5	0.8 (0.4)	-	38.9	
期末在庫量	29.4	26.8	32.2 (5.6)	▲ 1.2	20.1	
期末在庫率	22.4%	20.2%	21.7% (3.8%)	▲ 1.0	1.5	

(参考)

収穫面積(百万ha)	39.50	41.50	43.40 (42.89)	-	4.6
単収(t/ha)	3.53	3.12	3.53 (3.47)	-	13.1

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(8 February 2023)
IGC「Grain Market Report」(12 January 2023)

ブラジルのクロップカレンダー(中部から南部)

2022/23年度の実作付けは、2022年9月以降、順次開始。

2023年2月以降、大豆の収穫が行われ、その後、一部の圃場で冬とうもろこしを栽培予定。

2022/23年度	2022年												2023年							
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月
夏とうもろこし	リオ・グランデ・ド・スール州等						作付 4.4(百万ha)						収穫 26.5(百万t)						→ 収穫夏冬作計 123.7百万t	
冬とうもろこし	作付面積夏冬作計 22.0百万ha ←												作付 17.6(百万ha)				→ 収穫 97.3(百万t)			
大豆	マット・グロッソ州、パラナ州等						作付 43.3(百万ha)						大豆収穫後の一部圃場で冬とうもろこし作付け 収穫 152.9(百万t)							

資料：CONAB穀物レポート（2023.2.8）

< アルゼンチン > 干ばつにより大幅減産見込み（輸出税継続）

【生育・生産状況】USDAによれば、2022/23年度の生産量は、これまでの高温・乾燥の継続が、作付けの遅れとともに、1月に開花期を迎えていた早植え大豆の単収に影響したことで、収穫面積、単収が下方修正され、前月予測から4.5百万トン下方修正となった。高温・乾燥の影響を大きく受けた前年度より、単収見通しが更に減少することを受け、前年度より6.6%減の41.0百万トンの見込み。

ブエノスアイレス穀物取引所週報（2023.2.16）によれば、2022/23年度の作付けは、例年に比べ遅れて終了した。生産量は、38.0百万トンと前年度（43.3百万トン）から減少する見通し。作柄は、平年並みから良が44%と前年度同期（77%）を下回る。過去60年間で最悪の干ばつとも言われており、ラニーニャ現象に伴う乾燥天候の影響が大きいとみられる。

【需要状況】USDAによれば、2022/23年度の消費量は、生産量の下方修正に伴い、前月予測から0.7百万トン下方修正され、前年度より3.2%減の44.6百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の輸出量は、生産量の下方修正に伴い、前月予測から1.5百万トン下方修正されたものの、前年度より1.5倍の4.2百万トンの見込み。

アルゼンチン国家統計局によれば、2022年1～12月の輸出量は550.6万トンで、前年同期（537.4万トン）より2.5%増。内訳は、1位が中国492.5万トン、2位が米国12.4万トン、3位がチリ5.8万トン。

アルゼンチンは、丸大豆の搾油後に発生する大豆加工品の輸出が多く、大豆油及び大豆粕については、世界第1位の輸出国である。

USDAによれば、2022/23年度の輸入量は、生産量の下方修正を一部補うため、近隣国であるブラジル及びパラグアイからの輸入増により、前月予測から1.3百万トン上方修正され、前年度より62.8%増の6.3百万トンの見込み。

アルゼンチン政府は、財政赤字の補填等のため、輸出税を設定している。2021年1月以降、輸出税を大豆最大33%、大豆油及び大豆粕31%に設定。2022年3月に、大豆油及び大豆粕の輸出税について2022年末まで2%引き上げたが、2023年1月からは31%に戻っている。

大豆ーアルゼンチン

（単位：百万トン）

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23（22年10月～23年9月）			
			予測値、()はIGC		前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	46.2	43.9	41.0	(42.0)	▲ 4.5	▲ 6.6
消 費 量	47.4	46.0	44.6	(44.1)	▲ 0.7	▲ 3.2
うち搾油用	40.2	38.8	37.3	(38.6)	▲ 0.7	▲ 3.9
輸 出 量	5.2	2.9	4.2	(3.9)	▲ 1.5	46.9
輸 入 量	4.8	3.8	6.3	(5.4)	1.3	62.8
期末在庫量	25.1	23.9	22.4	(1.7)	▲ 1.1	▲ 6.3
期末在庫率	47.6%	48.9%	45.9%	(3.4%)	▲ 0.1	▲ 2.9
(参考)						
収穫面積(百万ha)	16.47	15.90	15.90	(16.40)	▲ 0.40	-
単収(t/ha)	2.81	2.76	2.58	(2.56)	▲ 0.21	▲ 6.5

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」
「World Agricultural Production」(8 February 2023)
IGC「Grain Market Report」(12 January 2023)

写真：北部サンタフェ州の早植え大豆の圃場風景 （1月29日撮影）

前年11月末に作付けされ、収穫は4月前半の予定。
草丈が未だ低く、畝間の隙間が埋まっていない状況で
生育不良となっている。



< 中国 > 生産量、消費量は史上最高、輸入量も増加見通し

【生産・生育状況】USDAによれば、2022/23年度の実生産量は、前月予測からの変更はなく、主産地の黒竜江省等東北地区で生育期を通じて良好な天候に恵まれたことに加え、政府の補助金による大豆生産奨励策等により収穫面積が大幅に増加したことから、前年度より24.0%増の20.3百万トンで史上最高の見込み。前年11月上旬時点で、収穫はすでに終了。

2月13日に公表された中国共産党・国務院（内閣に相当）の中央1号文件には、引き続き大豆の作付け拡大の取組等について記載された。

【需要状況】USDAによれば、2022/23年度の消費量は、1月までの搾油が予想以上に低調であったことから、前月予測から1.0百万トン下方修正されたものの、畜産向け国内大豆粕需要が前年度（景気減速により豚肉を中心に食肉需要が低調）から回復することにより、前年度より7.2%増の115.3百万トンと史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の輸入量は、前月予測からの変更はなく、前年度より4.8%増の96.0百万トンの見込み。

中国の貿易統計によれば、2022年1～12月の輸入量は91.1百万トンと、前年同期比で5.6%減。内訳は、ブラジル産54.4百万トン（60%）、米国産29.5百万トン（32%）。なお、12月の輸入量は10.6百万トンで、米国の収穫の終了に伴い、米国産が6.0百万トンとブラジル産（2.6百万トン）の2.3倍となった。

農業農村部「農産品供需形勢分析月報 2022年12月号」によると、前年12月の国内価格（山東省の国産大豆工場渡し価格）は、前月（6,340元/トン）から下落し、6,240元/トンとなった。主な要因としては、国内の新穀大豆の豊作により、市場供給に余裕があったことによる。国内価格は、今後安定的に推移するとみられる。また、前年12月の輸入価格（山東省の輸入大豆価格）は、アルゼンチンの天候不順により、ドルベースの国際大豆価格は上昇したものの、ドルに対する人民元の上昇により、5,500元/トンと前月（5,640元/トン）から下落した。今後も中国の輸入動向に注視が必要である。

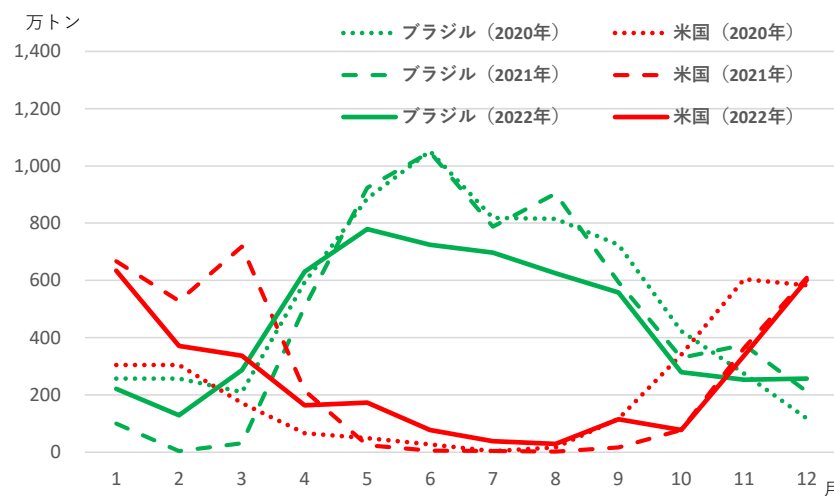
大豆－中国

（単位：百万トン）

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年10月～23年9月)			
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	19.6	16.4	20.3 (20.3)	-	24.0	
消 費 量	112.7	107.6	115.3 (114.7)	▲ 1.0	7.2	
うち搾油用	93.0	87.5	94.0 (95.8)	▲ 1.0	7.4	
輸 出 量	0.1	0.1	0.1 (0.1)	-	-	
輸 入 量	99.7	91.6	96.0 (96.0)	-	4.8	
期末在庫量	31.2	31.4	32.3 (30.5)	1.0	3.0	
期末在庫率	27.6%	29.2%	28.0% (26.6%)	1.1	▲ 1.1	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	9.88	8.42	10.27 (9.90)	-	22.0	
単収(t/ha)	1.98	1.95	1.98 (2.05)	-	1.5	

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(8 February 2023)
IGC「Grain Market Report」(12 January 2023)

図：中国におけるブラジル、米国産大豆の輸入状況



出典：中国海関統計

注：2020年1月分と2月分は合計で公表されたため、便宜上1/2で按分

< カナダ > 収穫面積は減少も、単収増加により増産

【生育・生産状況】USDAによれば、2022/23年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、収穫面積及び単収増加から前年度より5.1%増の6.5百万トンの見込み。前年11月中旬時点で、収穫は終了。

なお、カナダ農務農産食品省(AAFC)「Outlook for Principal Field Crops」(2023.2.17)によれば、2022/23年度の収穫面積は前年度より0.7%減少した。一方、単収は、西部カナダで生育期の降雨と温暖な天候に恵まれたことから、カナダ全体の単収は前年度より5.8%増となった。前年度において高温・乾燥で減産となった生産量第2位のマニトバ州で前年度より58.7%増と史上最高の単収となり、生産量1位のカナダ東部のオンタリオ州の単収の減少をカバーしたことが要因。この結果、生産量は前年度より5.1%増の6.5百万トンの見込み。

また、この春に作付けされる2023/24年度の実産量は、現在の市場状況と過去の傾向に基づけば、作付面積が2022/23年度より7.3%増と予想されることから、2022/23年度より3.5%増の6.8百万トンの見込み。

【需要状況】USDAによれば、2022/23年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、前年度より11.3%増の2.6百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、前年度より1.8%減の4.2百万トンの見込み。

カナダ穀物委員会(Canadian Grain Commission)によれば、2022/23年度(2022年8月～2023年7月)のうち、2022年8～12月の輸出量は257.5万トンとなり、国別では、中国(102.8万トン)向けが40%を占め、続いて、イラン(35.1万トン)、アルジェリア(27.8万トン)の順となっている。2022年12月の輸出量は89.1万トンで、中国向けが26.3万トン、イラン向けが25.5万トンである。

大豆－カナダ

(単位：百万トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年8月～23年7月)		
			予測値、()はAAFC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	6.4	6.2	6.5 (6.5)	-	5.1
消 費 量	2.5	2.4	2.6 (2.5)	-	11.3
うち搾油用	1.6	1.8	1.9 (1.9)	-	0.3
輸 出 量	4.7	4.3	4.2 (4.4)	-	▲ 1.8
輸 入 量	0.5	0.5	0.5 (0.4)	-	▲ 7.6
期末在庫量	0.3	0.4	0.7 (0.4)	-	52.1
期末在庫率	4.1%	6.5%	9.5% (5.1%)	-	3.1

(参考)

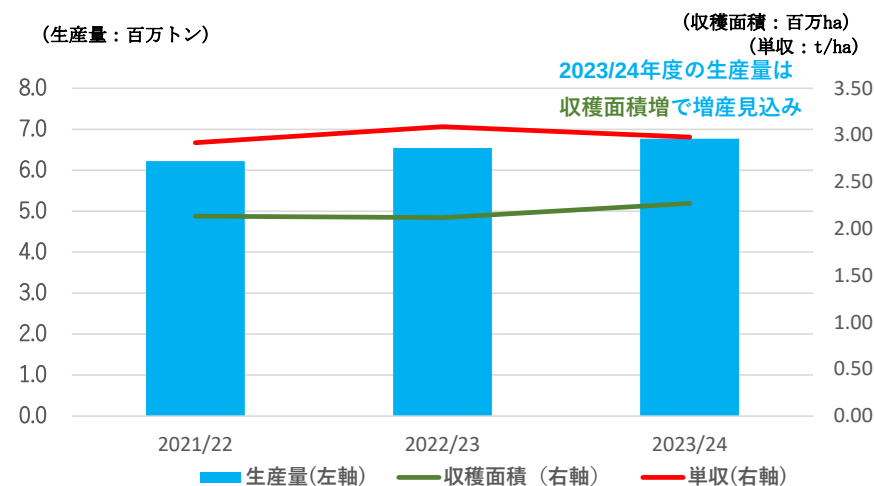
収穫面積(百万ha)	2.04	2.08	2.12 (2.12)	-	1.9
単収(t/ha)	3.12	2.99	3.09 (3.09)	-	3.3

資料：USDA「PS&D」

「World Agricultural Production」(8 February 2023)

AAFC「Outlook for Principal Field Crops」(17 February 2023)

図：カナダの直近3か年の生産量等の推移



資料：AAFC「Outlook for Principal Field Crops」(2023.2.17)をもとに農林水産省にて作成。

(参考1)本レポートに使用されている各国の穀物年度について (2022/23年度)

	小麦	とうもろこし	コメ	大豆
米国	22年6月～23年5月	22年9月～23年8月	22年8月～23年7月	22年9月～23年8月
カナダ	22年8月～23年7月			22年8月～23年7月
豪州	22年10月～23年9月		23年3月～24年2月	
EU	22年7月～23年6月	22年10月～23年9月		
中国	22年7月～23年6月	22年10月～23年9月	22年7月～23年6月	22年10月～23年9月
ロシア	22年7月～23年6月	22年10月～23年9月		22年9月～23年8月
ウクライナ	22年7月～23年6月	22年10月～23年9月		
ブラジル		23年3月～24年2月	23年4月～24年3月	22年10月～23年9月
アルゼンチン	22年12月～23年11月	23年3月～24年2月		22年10月～23年9月
タイ			23年1月～12月	
インド	22年4月～23年3月		22年10月～23年9月	
ベトナム			23年1月～12月	

注 市場年度は、おおむね各国で作物が収穫される時期を期首として各国ごとに設定されているため、国、作物によって年度の開始月は異なります。
 例えば、2022/23年度は、米国の小麦では2022年6月～2023年5月、ブラジルのとうもろこしでは2023年3月～2024年2月です。
 なお、各国別、作物別の市場年度は、米国農務省によります。
<https://apps.fas.usda.gov/psdonline/app/index.html#/app/downloads> (「Reference Data」タブを参照)

(参考2)単位換算表

1 容積→重量

1 Bushel (ブッシェル) (穀物により異なる)	0.027216	メトリクトン	小麦、大豆	米国等
	0.021772	メトリクトン	大麦	
	0.025401	メトリクトン	とうもろこし	
	0.014515	メトリクトン	オーツ	
1 CWT(百ポンド)	0.045359	メトリクトン	コメ	米国等

2 面積

1Acre(エーカー)	0.040469	ヘクタール	米国等
1rai(ライ)	0.16	ヘクタール	タイ
1 亩(ムー)	0.0667	ヘクタール	中国

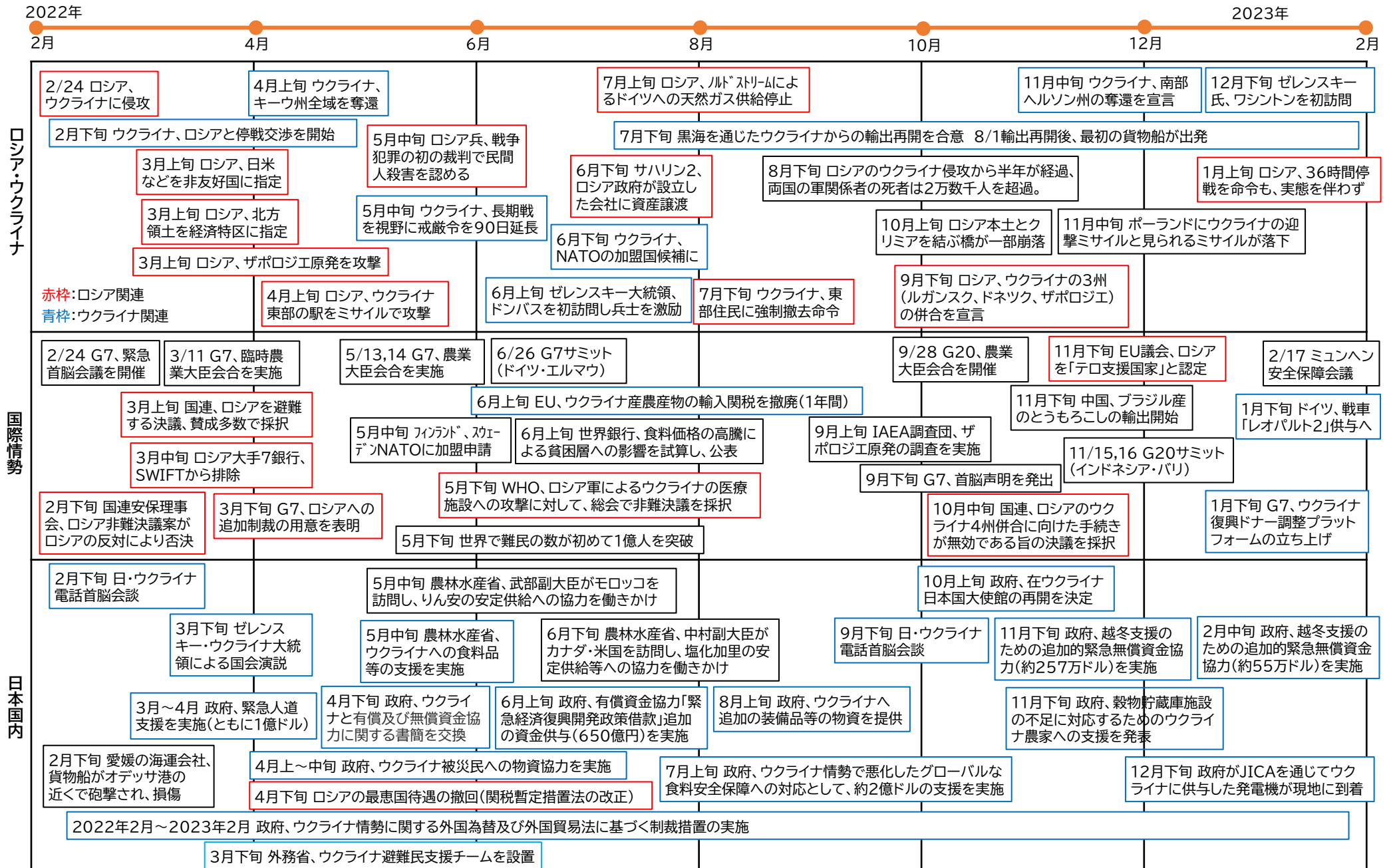
3 その他

1ガロン	4.536	リットル	英国
1ガロン	3.785	リットル	米国
1LAKH(ラック)	10万	位取り	インド
1斤	500g	重量	中国
華氏→摂氏 : °C = (° F - 32) ÷ 1.8			

第20号特別分析トピック:ウクライナ情勢まとめ

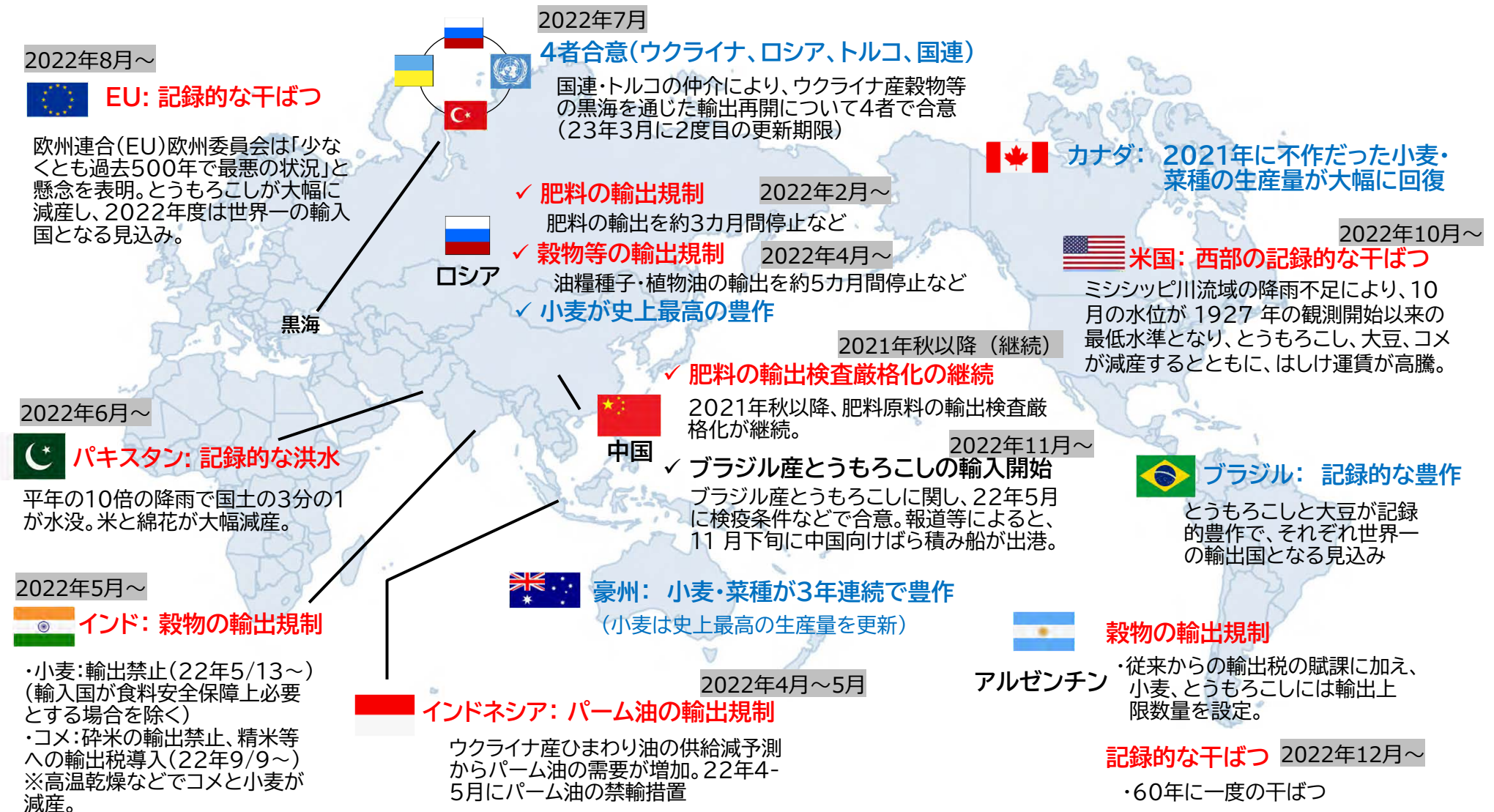
国際編

ウクライナ情勢に関する主な出来事



2022年の諸外国での主な動き

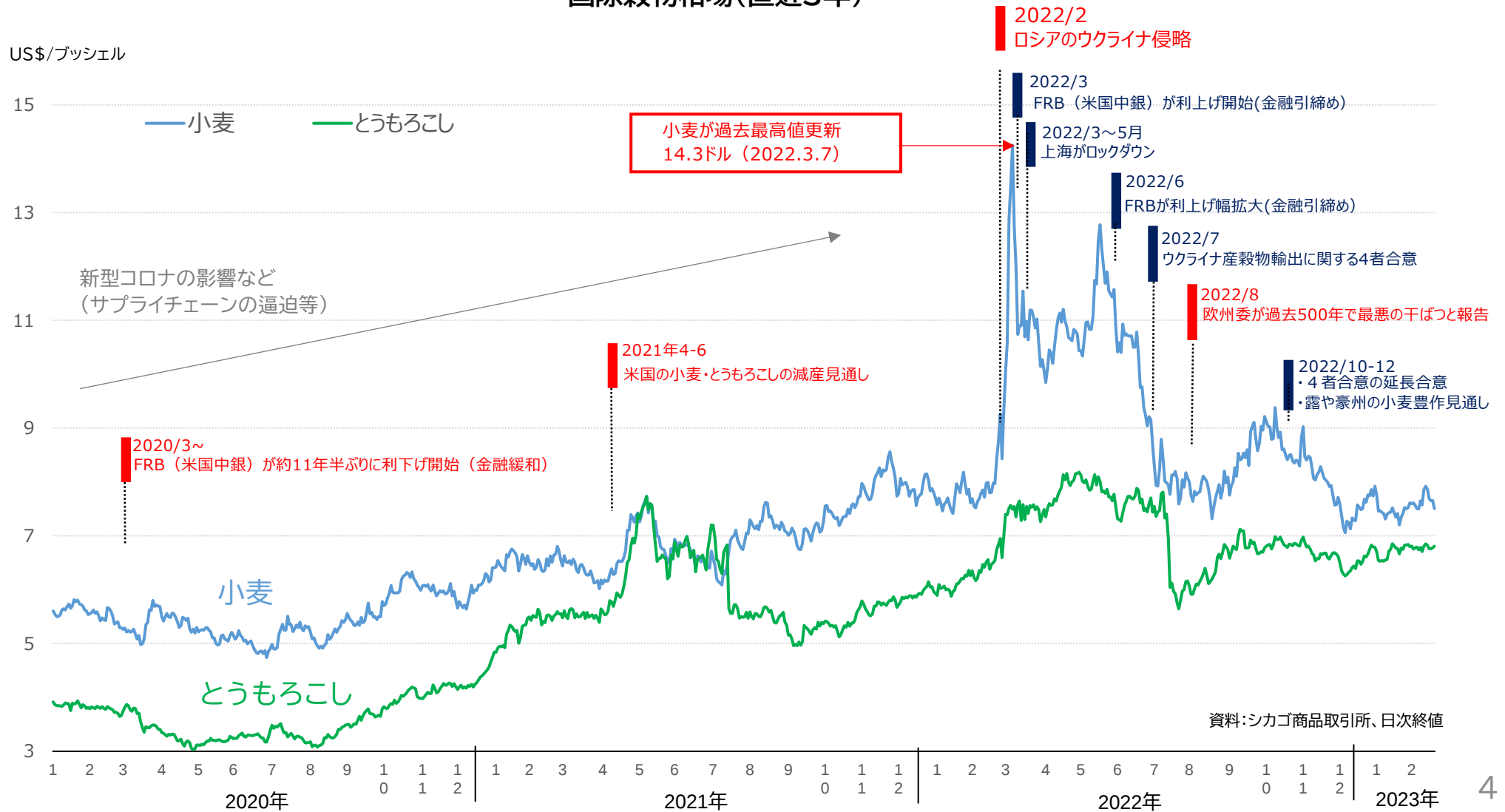
○ ロシアによるウクライナ侵略の影響や、世界各地で発生した高温乾燥等の影響が複合的に影響し、各国で食料や肥料の輸出規制などの動きが発生するとともに、穀物や生産資材価格が高騰。



世界の食料価格への影響

- 世界の農産物価格は、コロナパンデミックの影響等により2020年中頃から上昇傾向で推移しており、ロシアのウクライナ侵略を経て更に上昇、その後下落したが依然として高止まり。

国際穀物相場(直近3年)



ロシア・ウクライナの小麦の生産・輸出

- 2021/22年度において、ロシアは世界1位、ウクライナは世界5位の小麦輸出国。
- 2022/23年度については、ロシアの侵略に伴うウクライナが生産・輸出減少はあるものの、歴史的な大豊作であったロシアの輸出増加等により、世界の小麦輸出量は過去最高を更新する見込み。
- ロシアの主な輸出先は、中近東、アジアなど。ウクライナの主な輸出先はアジア、中近東など。

■小麦の生産・輸出(世界)

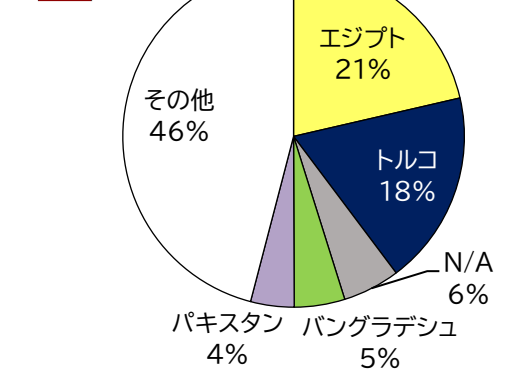
輸出量

■ロシア・ウクライナの小麦の輸出先国



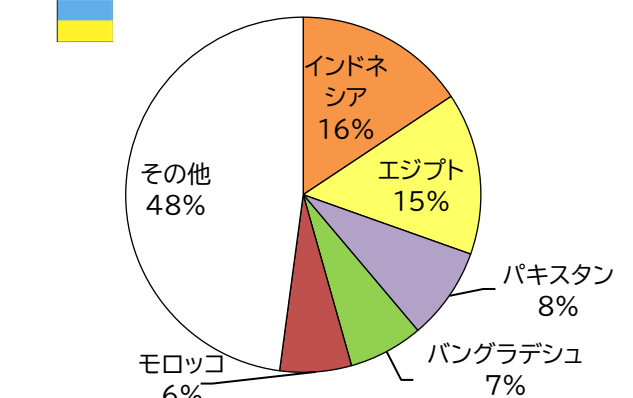
ロシア

2020/21年度



ウクライナ

2020/21年度



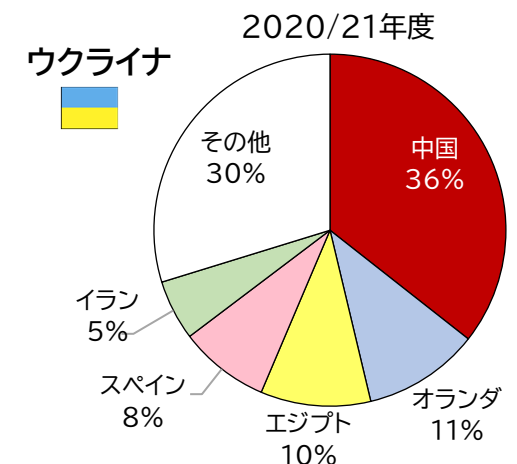
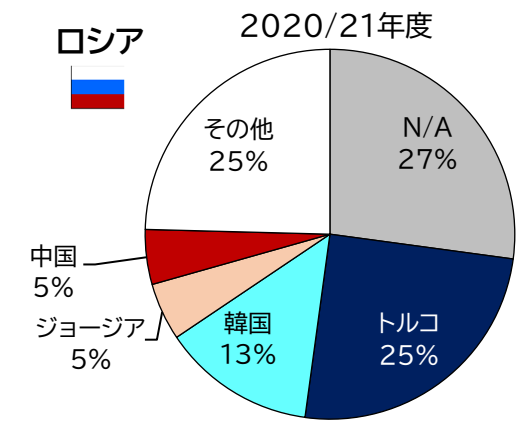
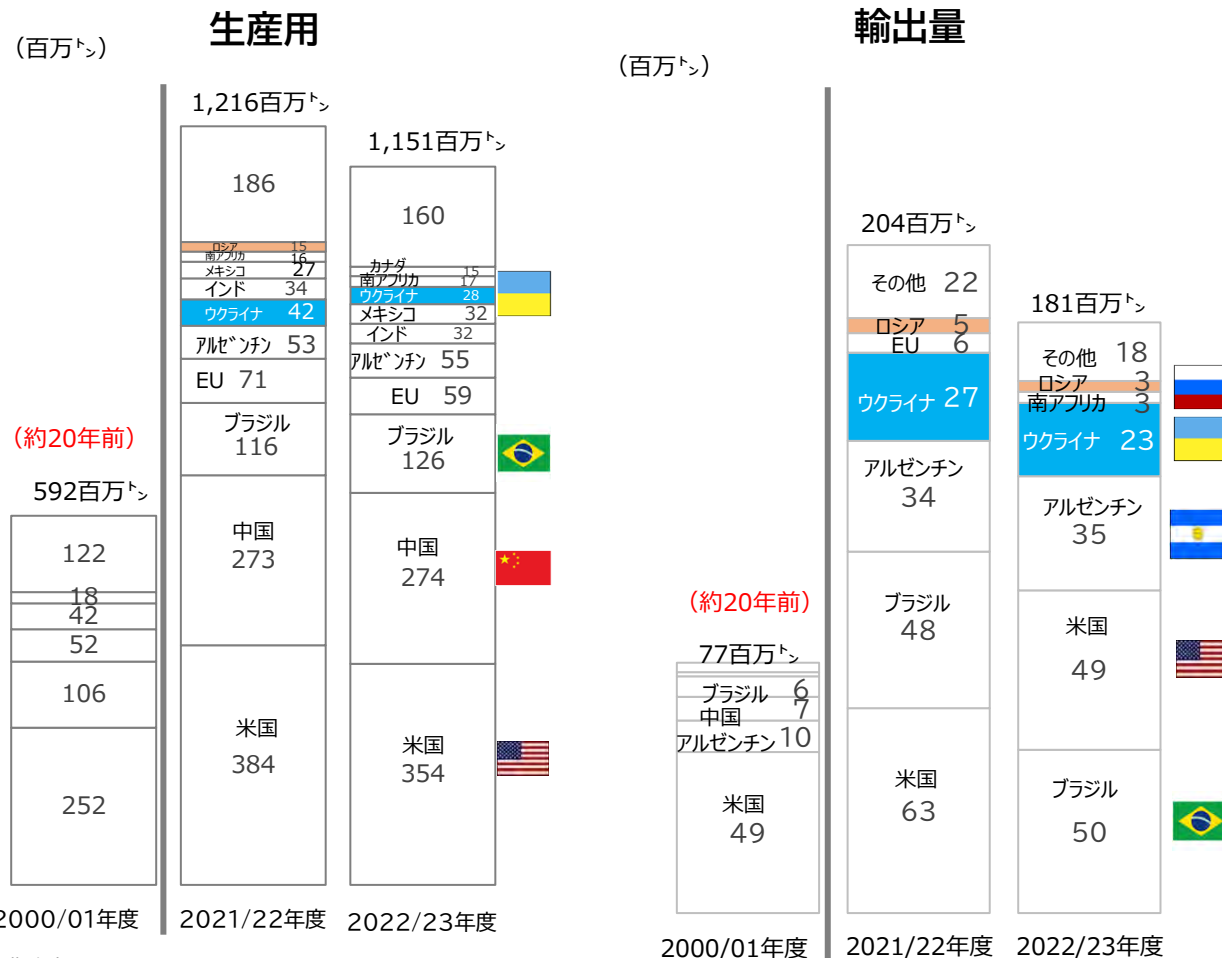
資料:ロシア税関、ウクライナ国家統計局
注:ロシアのN/Aは仕向け先非公表

ロシア・ウクライナのとうもろこしの生産・輸出

- 2021/22年度において、ウクライナは世界4位、ロシアは世界6位のとうもろこし輸出国。
- 2022/23年度については、ブラジル等の南米では生産増加見込みであるものの、ロシアの侵略に伴うウクライナの輸出減少や、高温・干ばつによるEUや米国での生産減少等により、世界全体の輸出量は約1割、減少見込み。
- ロシアの主な輸出先は、中近東、アジアなど。ウクライナの主な輸出先は中国、欧州、中近東など。

■とうもろこしの生産・輸出(世界)

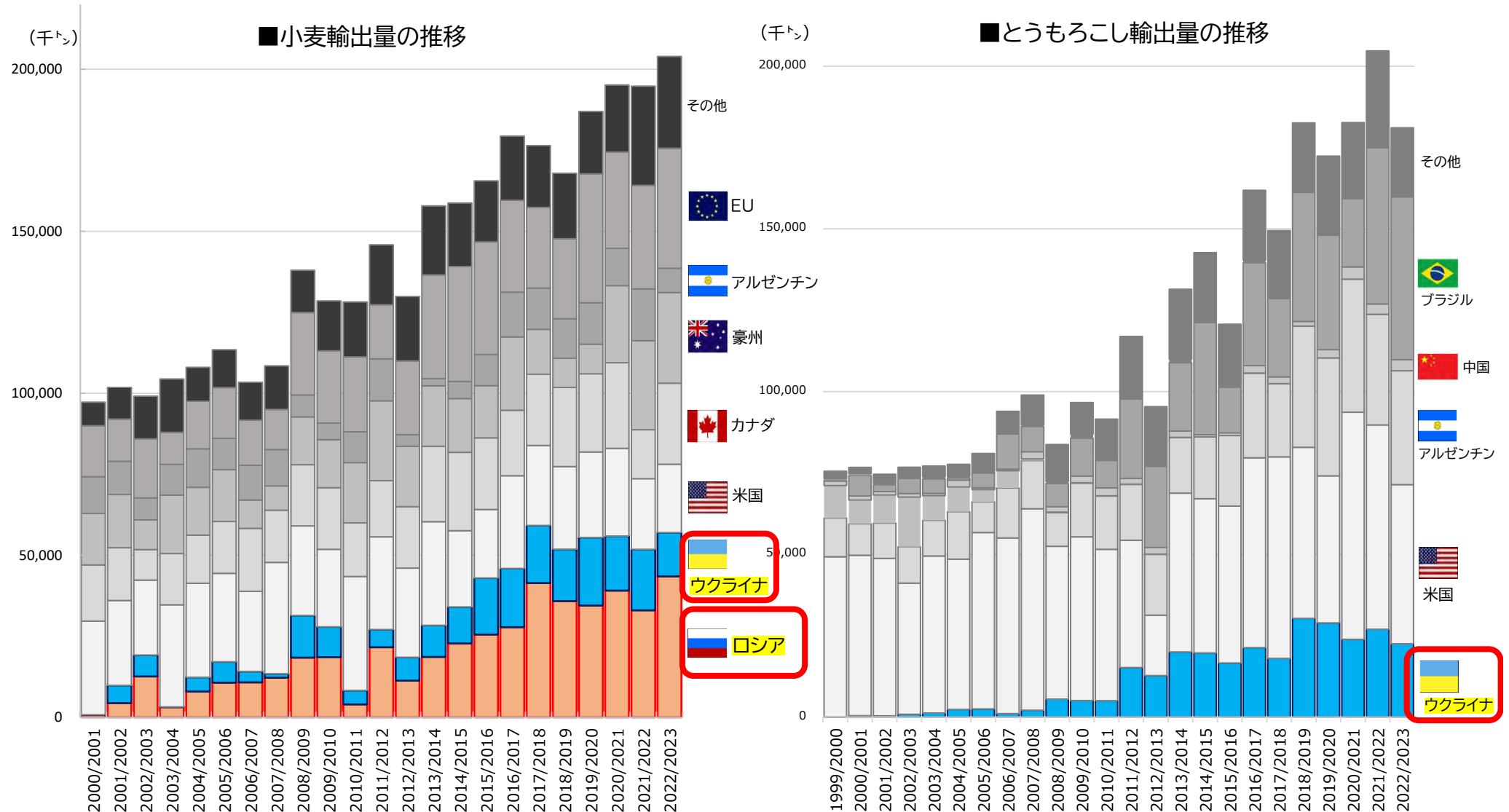
■ロシア・ウクライナのとうもろこし輸出先国



資料:ロシア税関、ウクライナ国家統計局
注:ロシアのN/Aは仕向け先非公表

世界の穀物輸出量の長期推移

○ 直近約20年間で、小麦の輸出国はロシア、ウクライナなどが台頭。とうもろこしは、南米諸国やウクライナなどが台頭。(ロシア、ウクライナ共に、穀物の世界有数の輸出国となっており、世界の穀物市場に与える影響は大きい)

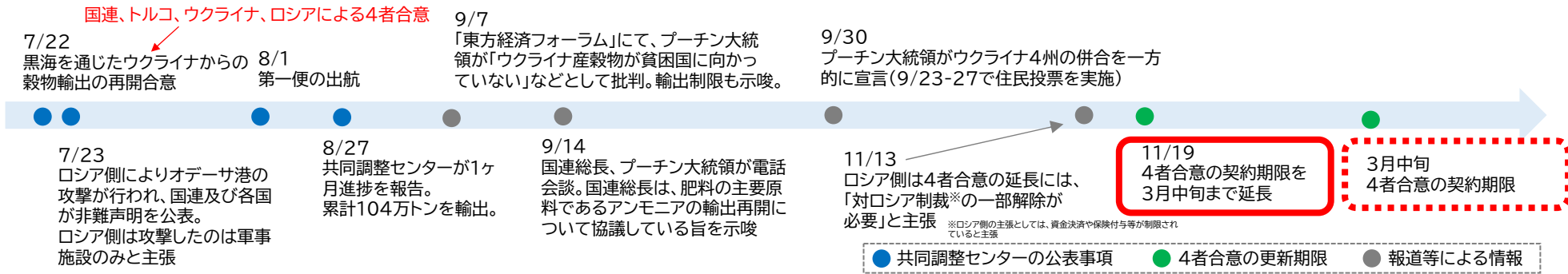


ウクライナの黒海回廊による穀物輸出再開状況

○2022年2月のロシアのウクライナ侵略以降、ウクライナの穀物輸出が途絶えていたが、7月に国連、トルコの仲介により、ウクライナ産穀物等の輸出が再開(国連、トルコ、ウクライナ、ロシアによる4者合意)。
○2023年3月に4者合意の契約延長期限が到来(昨年11月に続いて2回目)すること等、注視が必要な状況。

■ウクライナの黒海経由の穀物輸出再開をめぐる動向

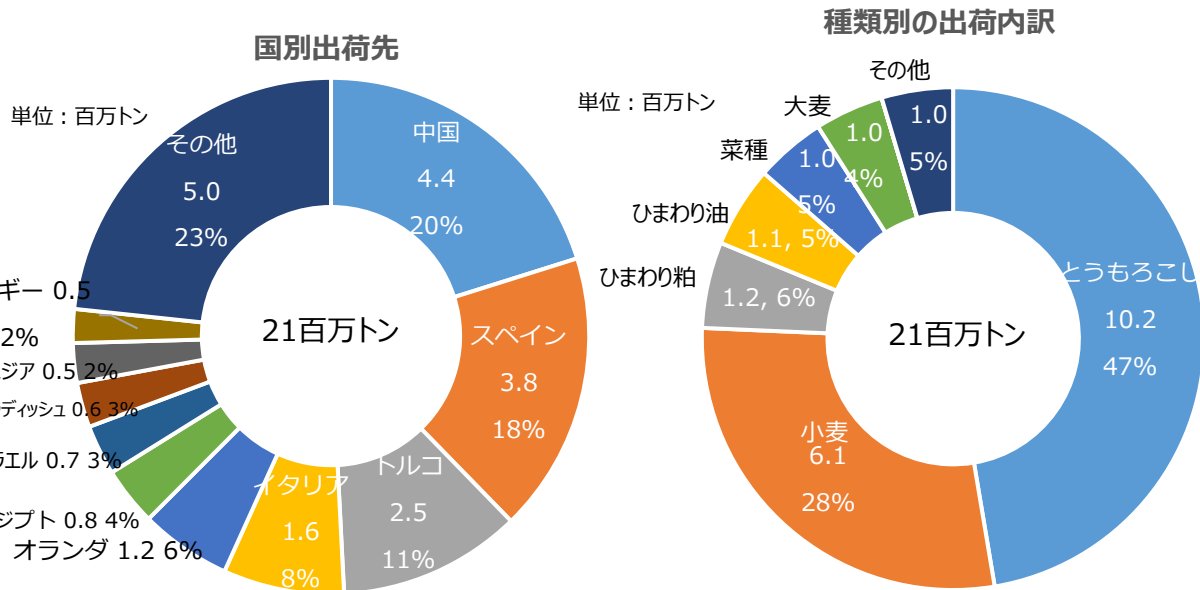
2023年2月時点



■黒海輸出の地図



■輸出再開後のウクライナ産穀物等の出荷実績(8/1～2/17の累計)



資料:国連ホームページ

※2021/22年度(通年)のとうもろこし輸出実績は26百万トン、小麦輸出実績は19百万トン

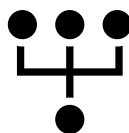
ウクライナ産農産物の過剰流入によるEUへの影響

- EUは、ロシアのウクライナ侵攻に伴う海路からの穀物輸出の停滞に対応するため、陸路とEUの港を経由したウクライナからの食料輸出を促進する「連帯レーン」イニシアティブを推進。
- その一方で、ウクライナの穀物等のEU市場への流入が大幅に増加したことで、近隣国では国産穀物の需要と競合し、生産者の影響緩和に向けた対応も求められている。

■「連帯レーン」イニシアティブとは



船舶・貨物自動車
等の提供



輸送ネットワーク
の効果的利用



通関業務の迅速化



EU域内における保管

EUはプログラム拡大のための投資を
続けており、2023年末までに、欧州機関、
欧州復興開発銀行、世界銀行から10億
ユーロ以上が割り当てられている。

■ウクライナから近隣国へのとうもろこしの輸出状況



EUでは、

- ・連帯レーンからEU域内市場への漏出・流入を防止
 - ・ウクライナ産農産物の流入増加により悪影響を受けた農家への補償
 - ・共通農業政策における柔軟な対応
 - ・新しい輸送路の設置への支援
- 等を検討中ではあるが、対応方針は現時点では確定していない状況

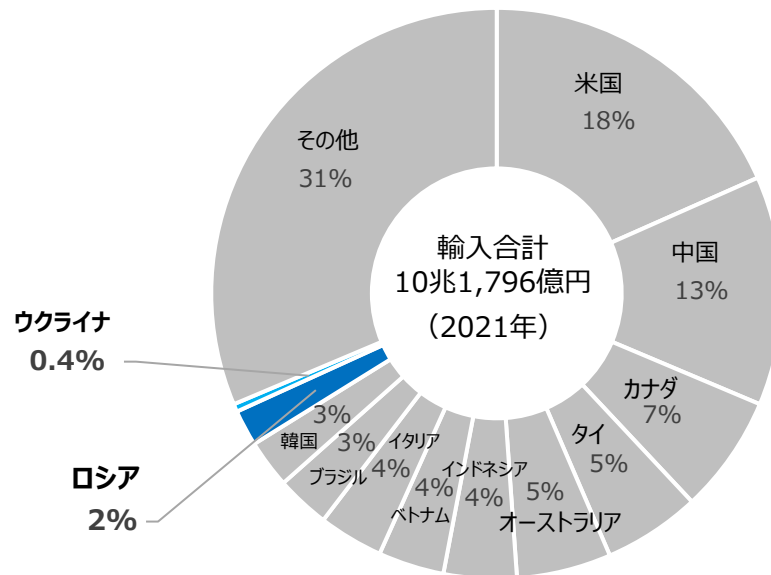
国内編

日本の農林水産物の貿易について

- 日本の農林水産物の総輸入額のうち、ロシア・ウクライナが占める割合は小さい。
- ロシアからの輸入は、製材や水産物が中心。ウクライナからの輸入は、たばこが中心。

■ 我が国の農林水産物の国別輸入額

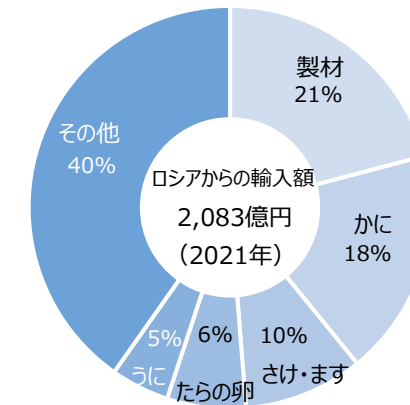
ロシア・ウクライナの我が国の輸入全体に占める割合は比較的小さい



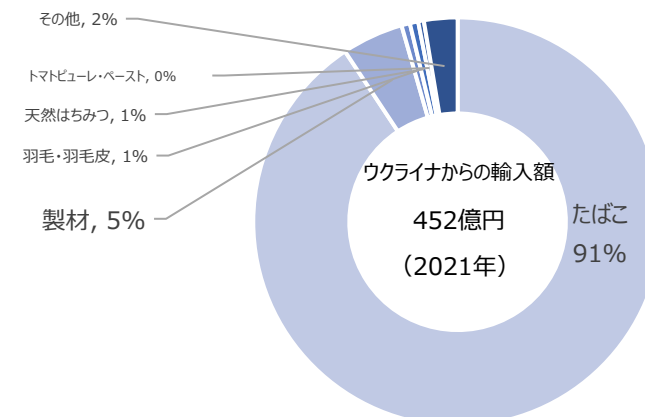
資料：財務省「貿易統計」

■ 我が国のロシア、ウクライナからの輸入品

ロシアからの農林水産物の輸入



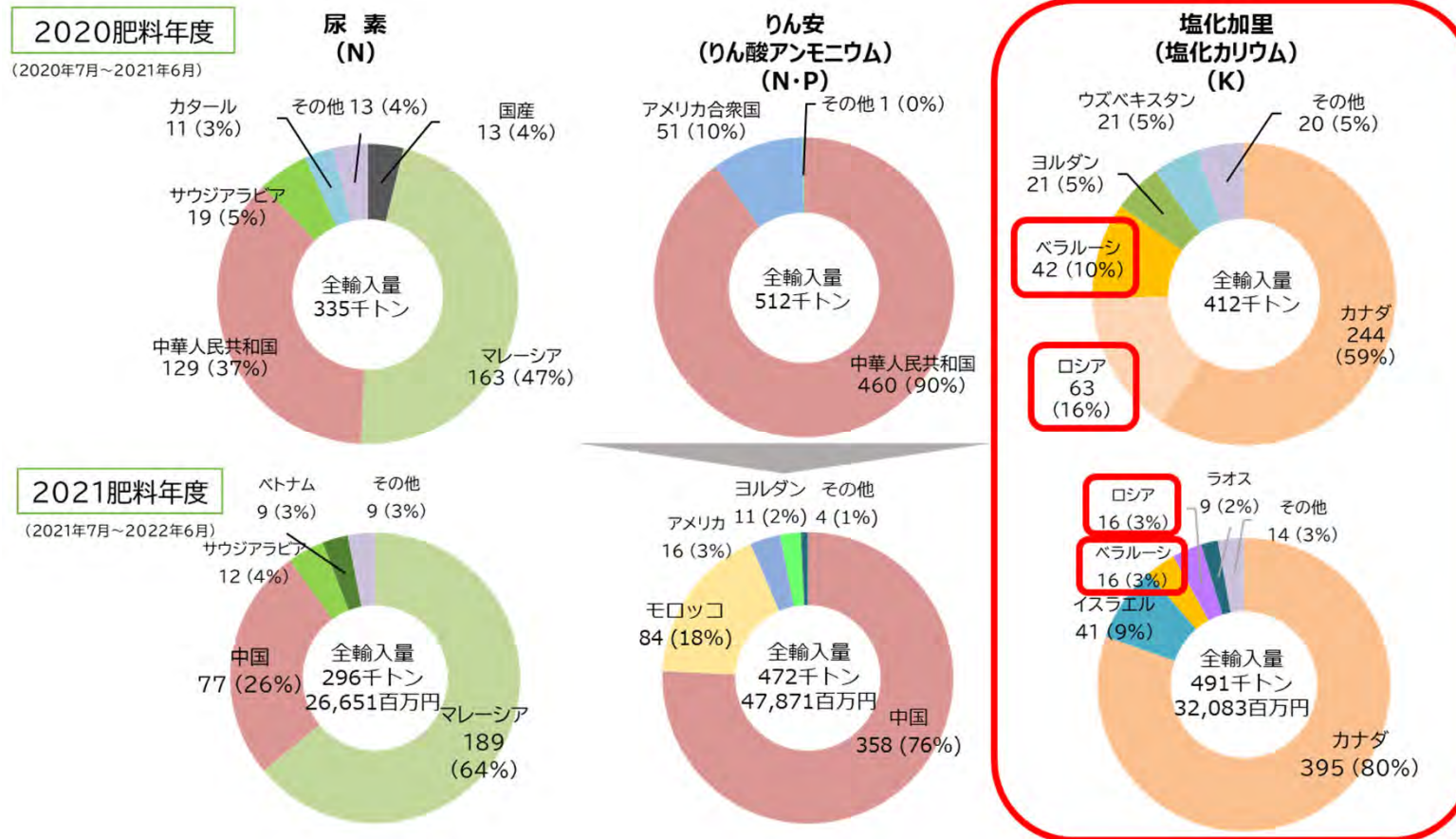
ウクライナからの農林水産物の輸入



資料：財務省「貿易統計」

肥料原料の輸入状況

- りん安や塩化加里は原料となる鉱物資源が偏在している。2020肥料年度の主な輸入先国は、尿素についてはマレーシア、中国、りん安については中国、塩化加里についてはカナダと特定の国への依存度が高まっている。
- こうした中、2021年秋以降、中国において肥料原料の輸出検査が厳格化され、我が国の肥料原料の輸入が停滞したことを受け、モロッコ等からの協調買入を急遽要請。また、ロシアやベラルーシから一定割合を輸入していた塩化加里についても、ウクライナ侵略の影響によりカナダ等から必要量を確保。



現在の対応状況

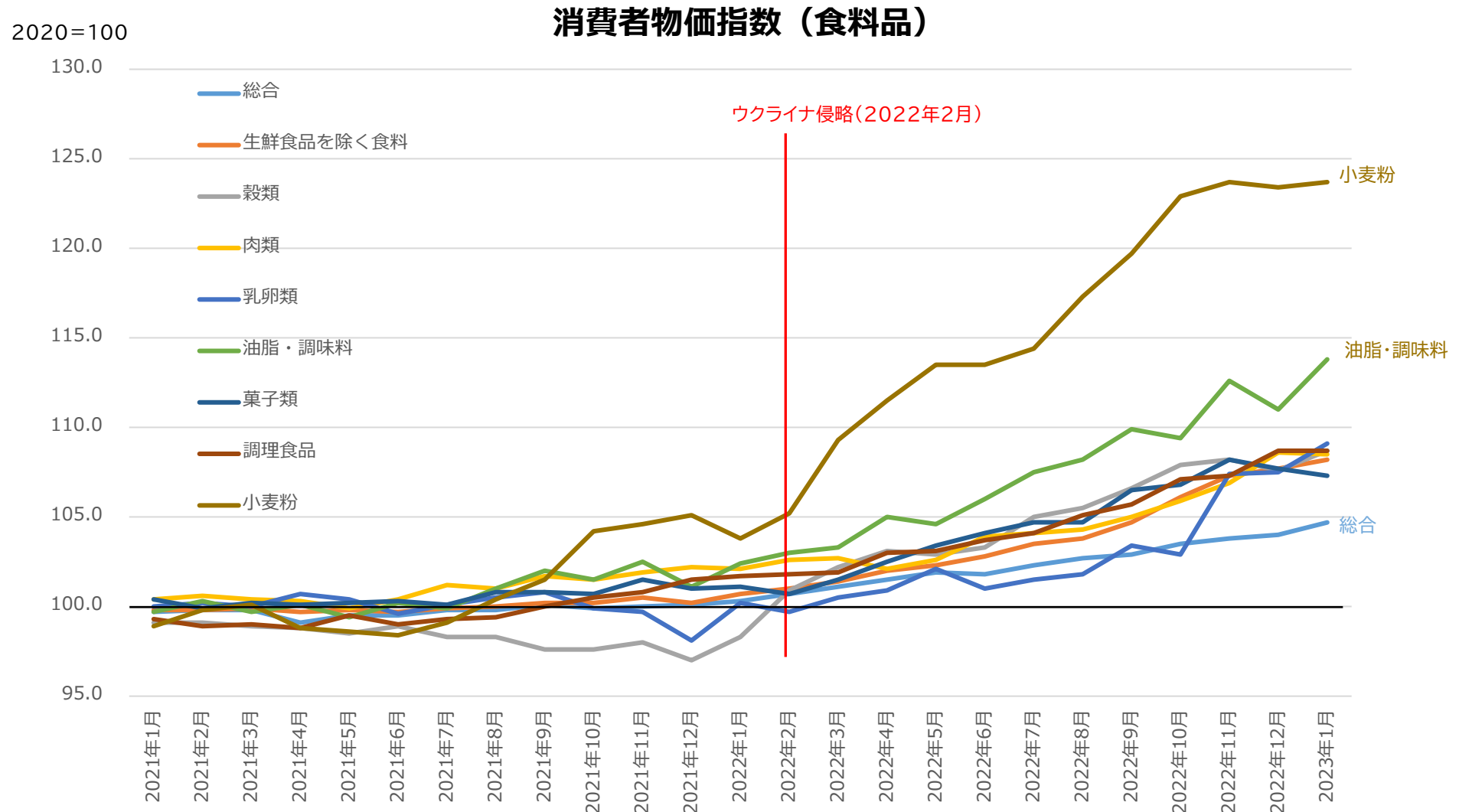
中国からの輸入が停滞
→ マレーシア等からの輸入が増加

中国からの輸入が停滞
→ モロッコ、ヨルダン等からの輸入が増加

ロシア・ベラルーシからの輸入が停滞
→ カナダ等からの輸入が増加

日本の食品価格について

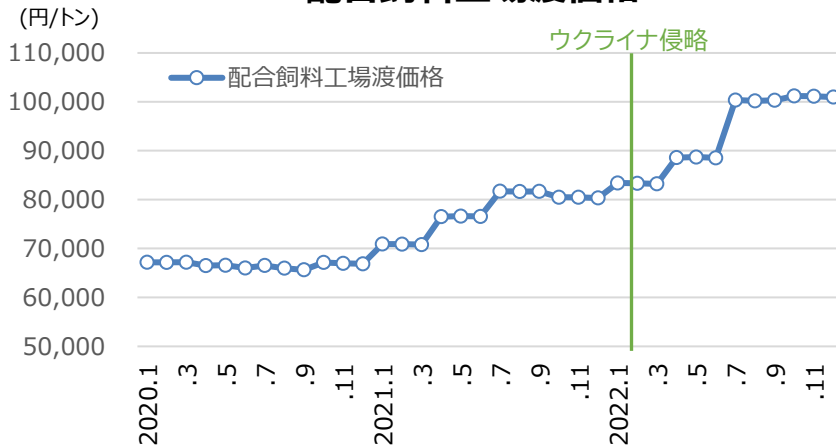
○小麦粉や油脂などを中心に、食料品の物価は上昇傾向。



各種価格・指標の推移

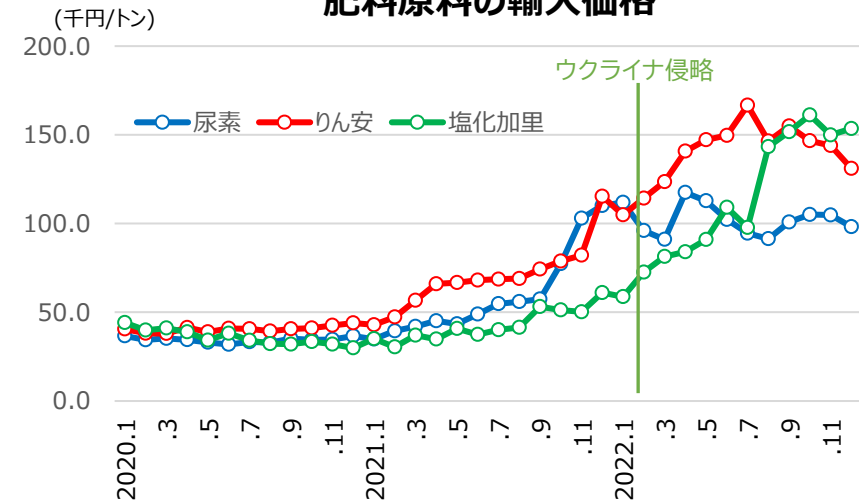
○ 昨今の世界的な人口増加等に伴う食料需要の拡大や、気候変動に伴う食料生産の不安定化、新型コロナウイルス(サプライチェーンの逼迫等)、ロシアによるウクライナ侵略、円安等により、穀物や、肥料、飼料の価格は上昇・高止まり。

配合飼料工場渡価格



資料：(公社) 配合飼料供給安定機構「飼料月報」注：配合飼料価格は、全畜種の加重平均価格である。

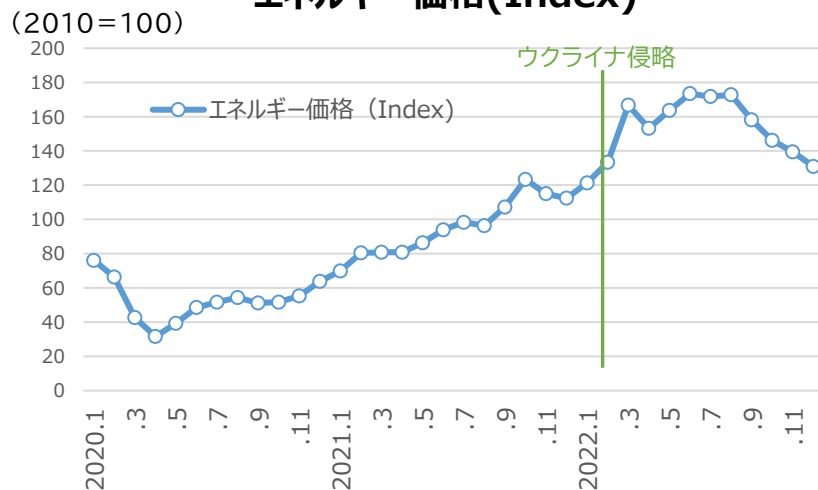
肥料原料の輸入価格



資料：農林水産省調べ

注：財務省貿易統計における各原料の輸入額を輸入量で除して算出。
ただし、月あたりの輸入量が5,000t以下の月は前月の価格を標記。

エネルギー価格(Index)



資料：世界銀行

為替相場 (円/ドル)



資料：日本銀行

参考(ウクライナ関連情報)

(参考)ウクライナの農林水産概況

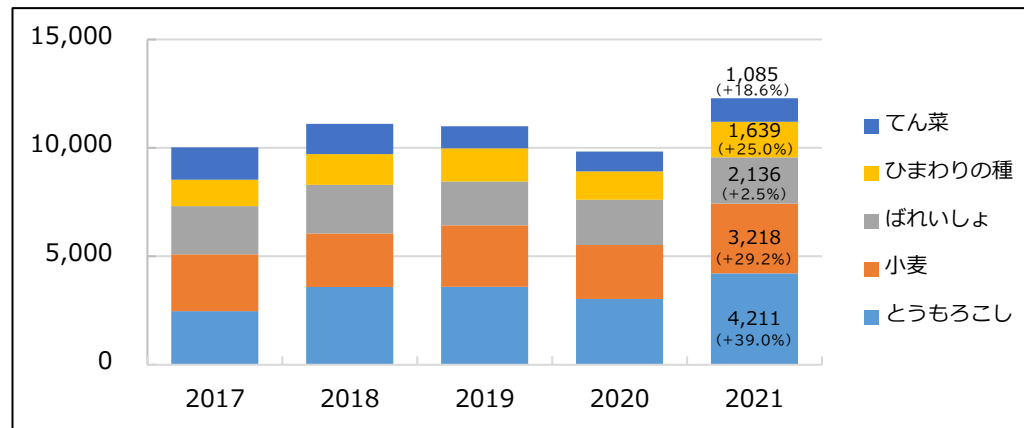
- 人口は、約4,353万人(2021年)。
- 「ヨーロッパの穀倉」といわれ、国土の約7割を農用地が占める。
- 西の国境付近を除き緩やかな丘陵地で、チェルノーゼムと呼ばれる肥沃な黒土が広がる。気候は温暖で、年間降水量は北西から南東に向かうにつれて減少する。
- 主要農産物は、小麦、とうもろこし、ばれいしょ、ひまわりの種、てん菜等



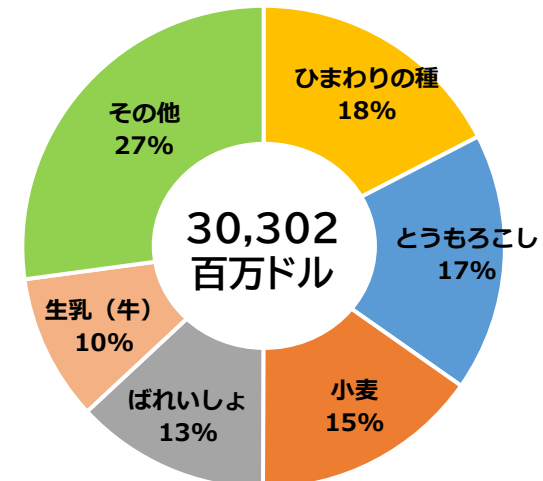
■農林水産業の地位(2021年)

	ウクライナ		日本	
	名目額	比 率	名目額	比 率
国内総生産(GDP)	2,001	100%	49,409	100%
うち農林水産業	213	9.3%	514	1.0%
一人当たりGDP(USドル)	4,596		39,650	

■主な農産物の生産状況(2017～2021年)



■農畜産物の生産額の割合(2020年)

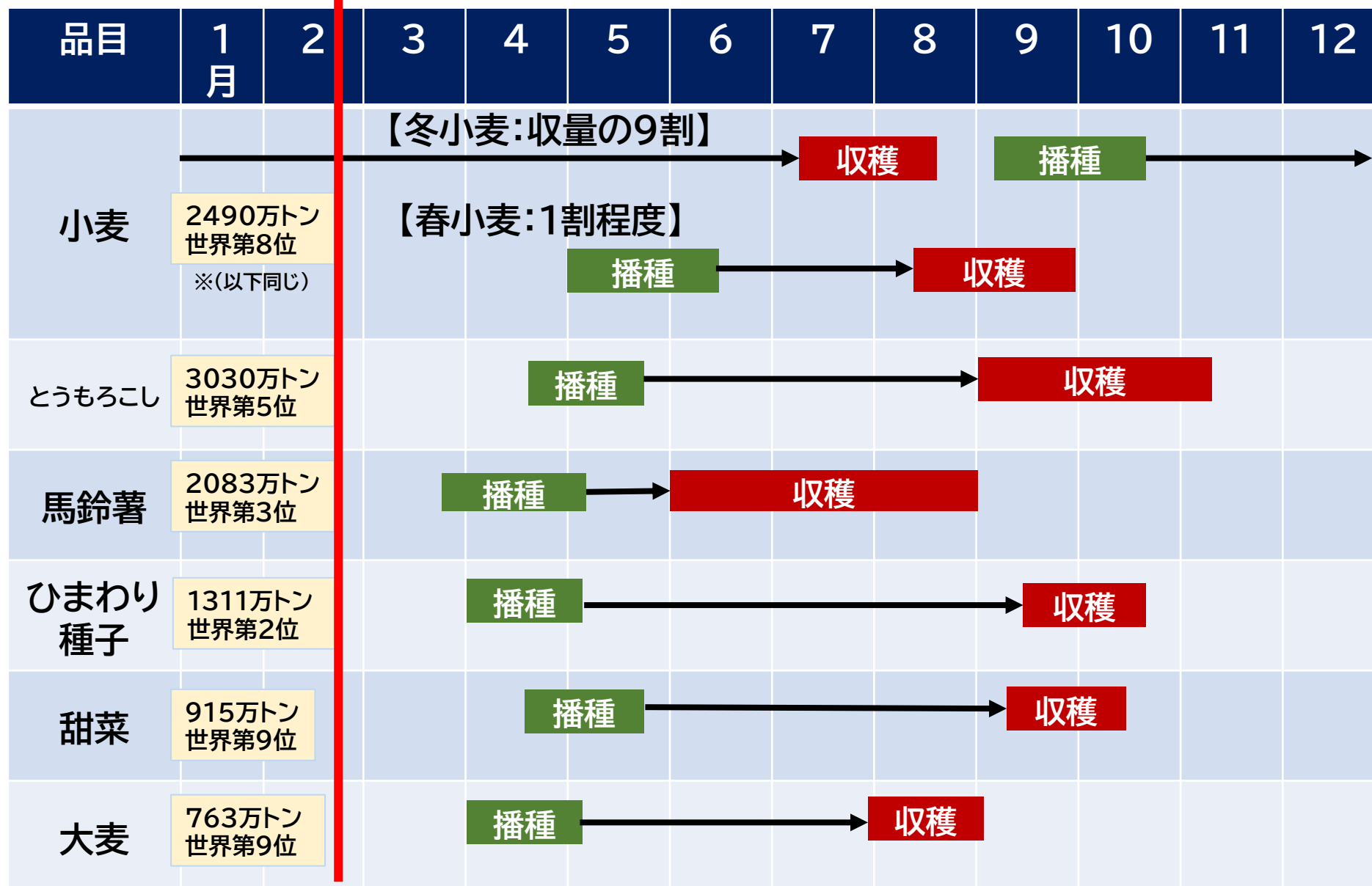


資料: UN「National Accounts Main Aggregates Database」、FAOSTAT

注: ()内の数字は対2020年比

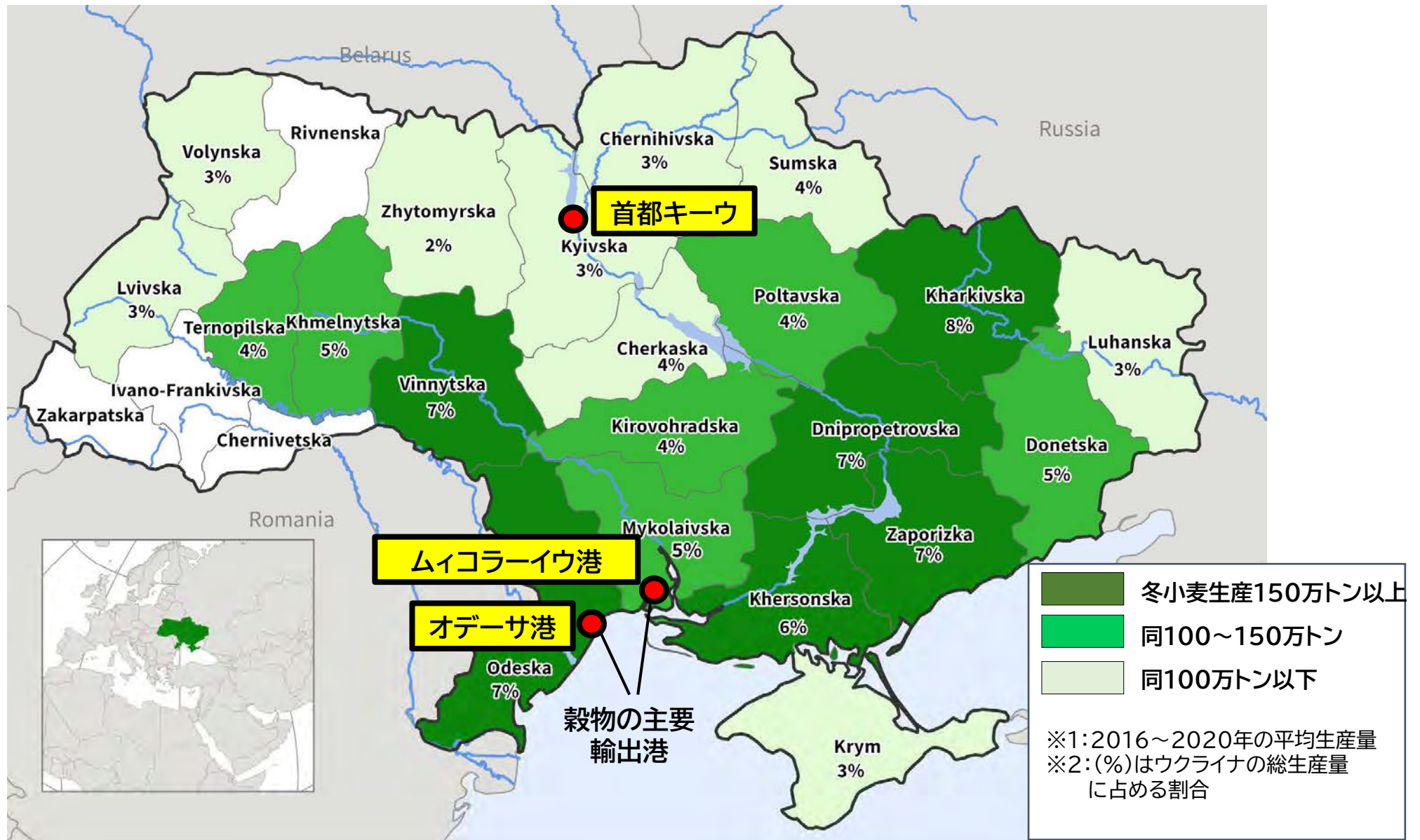
(参考)ウクライナの主要農産物の作付・収穫時期

ロシア侵攻開始

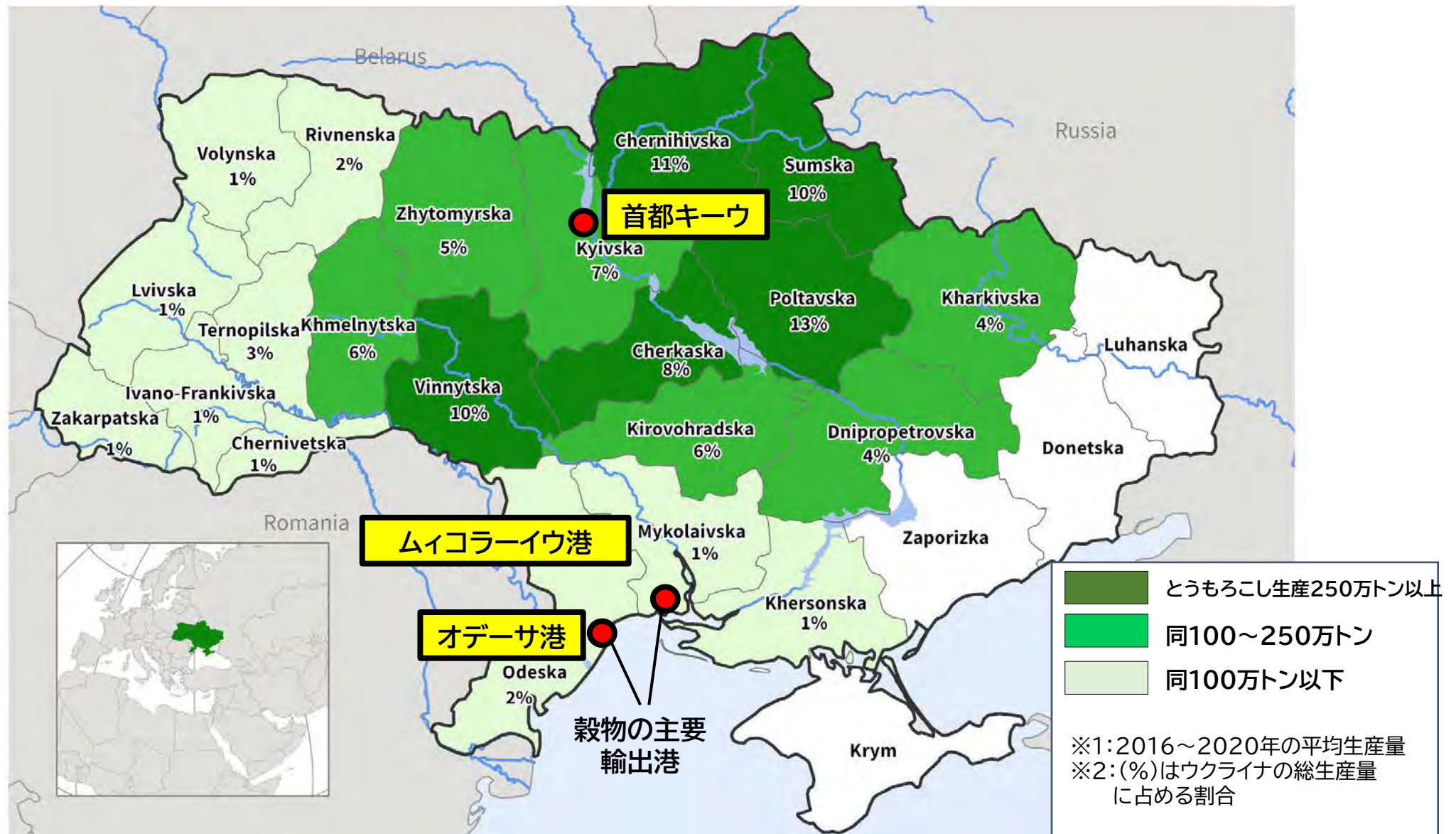


出典:FAOSTAT、米国農業省、農林水産省調査 ※2020/21の生産量および生産量順位を示したもの

(参考)ウクライナの小麦生産地



(参考)ウクライナのとうもろこし生産地



(参考)ロシア・ウクライナの穀物サイロの形態

収容能力

〈ウクライナ〉 71.6百万トン（内陸:66.0百万トン 港湾:5.6百万トン） 資料:ウクライナ穀物同盟

〈ロシア〉 146.8百万トン 資料:ロシア穀物同盟

1.形態別の特徴(ロシア、ウクライナ共通)

- (1)近代的な金属製エレベータ (2)ソ連時代に建設された鉄筋コンクリート製エレベータ
- (3)「納屋」タイプ倉庫(コンクリート床に直置きする施設) (4)ポリマー製の細長い袋(圃場など屋外に置いておく)



(1)近代的な倉庫(港湾)



(1)近代的な倉庫(生産地)



(2)ソ連時代の倉庫



(3)納屋タイプの倉庫



(4)ポリマー製の袋

2.形態別の特徴

〈所有〉(1)と(2)は比較的大手企業、(3)は大手企業の他に中小企業。(4)は主に保管施設が不足する場合の補助的な位置づけで、比較的近年、使用が広がり始めており、大手だけでなく中小も使用。

〈サイズ〉(1)と(2)は大型。

〈用途〉(1)(2)は周辺の生産者の穀物も受け入れる営業倉庫の場合が多い。生産をしない保管専門の企業が保有している場合もある。(2)は製粉施設に併設されている場合がある。

〈特性〉(2)は老朽化している場合が多く、品質が劣化しやすい可能性がある。(3)はトラックで運んできたものをそのまま積み下ろしただけの原始的な施設のため、品質が劣化しやすい傾向。定期的にショベルカーでかき混ぜたりして品質を維持。(4)は外国由来の技術であり、密閉された袋なので、保存の質は良好で、ロット管理も容易。一方で、圃場に並べたりの使用のため、長期の保管は播種作業の邪魔になる。また、(1)や(2)よりもコストが低いものの、エレベータとは異なり、袋に入れる前に別途、乾燥処理や異物除去が必要。また、一度袋に入れてしまうと中の状況が分からないため、長期保管には向かないとの指摘。サイレージ用の使用が多い。

【利用上の注意】

食料安全保障月報は、国際穀物需給に関し、在外公館からの情報、農林水産省が独自に各国の現地コンサルタント等を通じて入手した情報、公的機関（各国政府機関、FAO、IGC 等）の公表資料、Oil World 等民間の調査会社から購入した資料、その他、商社情報や新聞情報等から入手した情報を農林水産省の担当者において検証、整理、分析したものです。

○ 本月報に記載のない情報は以下を参照願います。

（１） 農林水産省の情報

ア 我が国の食料需給表や食品価格、国内生産等に関する情報

- ・食料需給表：<http://www.maff.go.jp/j/zyukyu/fbs/>
- ・食品の価格動向：<http://www.maff.go.jp/j/zyukyu/anpo/kouri/index.html>
- ・米に関するマンスリーレポート：<http://www.maff.go.jp/j/seisan/keikaku/soukatu/mr.html>

イ 中・長期見通しに関する情報

- ・食料需給見通し（農林水産政策研究所）：<http://www.maff.go.jp/primaff/seika/jyukyu.html>

（２） 農林水産関係機関の情報（ALIC の情報サイト）：<https://www.alic.go.jp/>

- ・砂糖、でんぷん：<https://www.alic.go.jp/sugar/index.html>
- ・野菜：<https://www.alic.go.jp/vegetable/index.html>
- ・畜産物：<https://www.alic.go.jp/livestock/index.html>

（３） その他海外の機関（英語及び各国語となります）

ア 国際機関

- ・国連食糧農業機関（FAO）：<https://www.fao.org/home/en>
- ・国際穀物理事会（IGC）：<https://www.igc.int/en/default.aspx>
- ・経済協力開発機構（OECD）（農業分野）：<https://www.oecd.org/agriculture/>
- ・農業市場情報システム（AMIS）：<http://www.amis-outlook.org/>

イ 各国の農業関係機関（代表的なものです）

- ・米国農務省（USDA）：<https://www.usda.gov/>
- ・ブラジル食料供給公社（CONAB）：<https://www.conab.gov.br/>
- ・カナダ農務農産食品省（AAFC）：<https://agriculture.canada.ca/en/sector/crops/reports-statistics>
- ・豪州農業資源経済科学局（ABARES）：<http://www.agriculture.gov.au/abares>

○ 食料安全保障月報で使用している統計数値は、主に米国農務省が 2023 年 2 月中旬までに発表した情報を引用しています。

さらに詳細なデータ等が必要な場合は、米国農務省のホームページを参照願います。

http://www.usda.gov/wps/portal/usda/usdahome?navid=AGENCY_REPORTS

主な参考資料

「World Agricultural Supply and Demand Estimates」

<http://www.usda.gov/oce/commodity/wasde/>

「Grain : World Markets and Trade」

<https://www.fas.usda.gov/data/grain-world-markets-and-trade>

「Oilseeds : World Markets and Trade」

<https://www.fas.usda.gov/data/oilseeds-world-markets-and-trade>

「World Agricultural Production」

<https://www.fas.usda.gov/data/world-agricultural-production>

「PS&D」

<https://apps.fas.usda.gov/psdonline/app/index.html#/app/advQuery>

など

- **データは予測値であり、毎月各種データの更新を受けて改訂されます**ので留意してください。
- 資料原典で表示されるブッシェル及びエーカー等の単位は、それぞれトン及びヘクタールに換算して記載しています。
- 資料原典において現地通貨で表示される金額を円換算するにあたっては、日本銀行国際局・財務大臣公示の基準外国為替相場及び裁定外国為替相場等の換算レートを用いています。
- 市場年度は、おおむね各国で作物が収穫される時期を期首として各国ごとに設定されているため、国、作物によって年度の開始月は異なります。
なお、各国別、作物別の市場年度は、米国農務省によります。
<https://apps.fas.usda.gov/psdonline/app/index.html#/app/downloads>
(注：同サイトの「Reference Data」を参照)
- 期末在庫率の対前年度増減率の欄は、前年度とのポイント差になります。なお、表示単位以下の数値により計算しているため、表上では合わない場合があります。
- 本資料の引用等につきましては、出所（農林水産省発行「食料安全保障月報」）を併記願います。

なお、生産見通し等の予測は、各国国際機関及び各国の農業機関によりそれぞれの分析手法に基づき行われるため、機関によってデータの相違がある場合があります。また、各国の農業機関の公表を受けて、国際機関の見通しが改訂される場合があります。

英国については、2020 年 1 月 31 日付けで EU を離脱しました。英国の小麦に関する情報については小麦の EU27+英国のコーナーで取り扱います。

- 本月報の電子版は下記アドレスでご覧になれます。

農林水産省 食料安全保障月報

http://www.maff.go.jp/j/zyukyu/jki/j_rep/index.html

- 本資料に関するご質問、ご意見等は、下記までお願いします。

連絡先	農林水産省大臣官房政策課食料安全保障室 TEL : 03-6744-2368 (直通)
------------	--

「食料安全保障月報」に関するアンケート

いつも食料安全保障月報（以下、「月報」）を御愛読いただきありがとうございます。
今後のより良い月報の作成に生かすため、皆様の声を是非お聞かせください。

- 1 あなたの所属を教えてください。（選択式）
商社、食品・飼料メーカー、食品卸・小売業、調査会社、自治体、大学・研究機関、大学生・高校生、その他
- 2 あなたの所属する会社・組織が所在する地域を教えてください。（選択式）
北海道、東北、関東（東京以外）、東京、中部、近畿、中国、四国、九州・沖縄、海外
その他
- 3 月報をどこで知りましたか。（選択式）
口コミ、以前から（海外食料需給レポート時代から）、検索エンジン、農水省 HP、
書籍、その他
- 4 月報を書籍で知った場合、その書名が分かれば教えてください。
- 5 月報で一番関心／参考にしている項目は何ですか。（複数選択可）
概要編（今月の主な動き（穀物等の国際価格の動向）、今月の注目情報、その他）
品目別需給編（小麦、とうもろこし、コメ、油糧種子（大豆））
特別分析トピック
- 6 月報で一番関心／参考にしている項目のうち、特別分析トピックを選択された場合、特に関心があったテーマがあれば教えてください。
- 7 最近で最も興味を引いた／役立った記事は何ですか。（自由記載）
- 8 今後重点的に取り上げてほしいテーマは何ですか。（自由記載）
テーマ例：世界的な異常気象（干ばつ、洪水など）の穀物生産への影響
地域別の穀物需給動向（米国、南米、豪州、東南アジア等）
中国の需要・輸入動向
- 9 特別分析トピックで取り上げてほしいテーマは何ですか。（自由記載）
- 10 今後月報に期待することはありますか。（自由記載）



ご回答は以下 URL または右の QR コードよりアクセス願います。

https://www.contactus.maff.go.jp/j/form/kanbo/anpo/anpo_geppou_ankeeto.html